第十六段
天主教

り。

天主教は、其の奉ずるところの天主を以て、一切萬物を造化するの神なりとす。この造化神の教を以て、眞實の法となす。故に彼の教を信ずる徒は、こと〳〵く外我見に墮して。自己の外に、自己を支配するものを認め。生死禍福も、みな悉く彼れ天主の愛憎に出づるものとなせり。就中耶蘇のごときは、みづから天主の愛子と稱し。一切諸法の因果を撥無し。天主の威靈を假り、人民を驅て、己が奴隷たらしめんことを圖りしものなり。故に其の身は、刑戮に罹りしといへども。其の教法は流布して、殆と全地球上に蔓延するに至れり。

秦の始皇

秦の始皇は、其の人民をして、徒に己の威靈に依らしめんことを勉め。鬼神を崇し、先王の舊典を廢し、諸子百家の書を焚き。天下を帥ゐて斷見に墮落せしむ。故に其の民を弱めんことをはかりて、天下はいよ〳〵不屈の氣をおこし。人々一分の我見をさしはさみ、我取て代るべしと云ふに至り。終に其の國を亡ぼせり。要するに、一の我見なれども。概ね根機の暗鈍怯弱なるものは、外我見に墮いり。其の強勇なるものは、內我見に執じ。共に見惑を免るゝこと能はざるなり。

鈍根の者は外我見に墮し利根の者は內我見に執ず

第十七段
眼鏡の譬喩

斯くの如く、一の我見に內外あるは。全く斷常の二見に根據せり。斷見の徒は、內我見を立つ。常見の徒は、外我見に陷いる。一切の凡夫は、此の有無斷常の見を離れて、諸法の眞理に通達することあたはざるにより。種々の見惑となり。光づ自己を錯亂し、從て世間を錯亂するものなり。譬へば、黃色の眼鏡を懸て看るときは、天地萬物悉く黃色を帶ぶ。綠色の眼鏡をかくるときは、天地萬物こと〳〵く綠色を呈するがごとし。生來よりかけ來る眼鏡なれば、人々見るがまゝに、正色とおぼえたり。たま〳〵黃色より、綠色に變ずるときは。豁然として悟得せしがごとく思ひ。最前の黃色を、無下に下劣の見とし、また綠色より、紅色に變ずるときは。大に智識を發達せしやうに思ふものなり。是れみな、麁細の差別はあれども。畢竟じて、有無斷常の間に、往來するのみ。

第十八段
靈魂の問答

或る人問て曰く、佛教の所說は。此の靈魂を以て、死後存在するものとなすか。又は消滅するものとなすか。余對て曰く、子の靈魂と稱するは何物ぞ。その物によりて、或は存在すべく、或は消滅すべし。死後の有無はしばらく置く、即今何の形狀なるか。曰く、吾が靈魂と稱するは、即ち吾が心なり。別に形狀を知らず。

虛空に計量あり

形體は計量の客虛空は計量の主

有無は我心の分別

曰く、子の心は、即今有に屬すとなすか。無に屬すと爲すか。曰く、有に屬せり。もし心なしと云はゞ、有無を問ふものもなき理なり。曰く、有形なりや。無形なりや。曰く、無形にして、計量なし。故に無形なり。曰く無形にして、計量ありや。はた計量なしや。曰く、計ほ計量あり。もし虛空にして量なくんば、形量あるものを、空所に置くことを得ず。當に知るべし、計量は物體にあるにあらずして、虛空にあることを。譬へば、土人形を造るに、印子を用ふるがごとし。この印子の中に、虛空ありて。其の計量に應じて、土をいれて印出するときは。人形を現出す。故に形體の計量は、虛空と主客をなせり。形體は、計量の客なり。虛空は、計量の主なり。是故に、無形といへども。有に屬するものは、計量なしといふべからず。若し無形にして、しかも計量なしといへば。兎角龜毛の、唯に名目のみありて、その實は絶無なるに同じ。是故に、心は無形といへども。計量あるべきなり。計量あるものは、虛空に同ぜず。有形に同ぜず。おのづから無形にして、物あるなり。子以て何如か分別するや。その人茫然として、應ることあたはず。余又曰く、有無なるものは、

心は有無を離る

第十九段　心念の光影

我心の分別にあらずや。有は斯くのごときなり、無はかくの如きなりと。心識に認め得るものは、悉く有となし。心識に認め得ざるものは、無となす。されば、有無は。諸法の眞實にあらずして、此の心の分別の相なり。これを言を易へて云へば、此の心を以て、認め出だしたるものは。有無の分別なり。若しこの心にして、無に屬するものなるときは、無を知らず。有に屬するものなるときは、有を知らず。譬へば、火のみづから、其の熱を知らず。水のみづから、其の濕を知らざるがごとし。畢竟吾が心は、有無を離れて。有無に同ぜざるによりて。能く有無を雙觀して、分明なり。是故に、子が死後の心を以て。有無の一邊に、片つけんとするは。恰もみづから有といふ穴と、無といふ穴とを堀りて。みづから其の心を葬らんとするがごとし。豈また愚ならずや。

是故に、心を以て、心の有無を定めんと欲するときは。全く己が心念の光影に付き廻り、到底落著せざるものなり。其の不落著の上に、種々の工夫を著け。樣々に分別を生じ。他の邪敎邪法を聽受し、思惟を凝らし。斷見の徒は、斷見のまゝに分別を長じ。常見の徒は、常見のまゝに、分別を長じ。道理を求め。右に斷見

を取廻はすものあれば、左に常見を撚るものあり。東に持ち運ぶものあれば、西に擔ひ去るものありて。其の見惑は恰も鼎沸の如し。凡下の人は、欲に引かれ、不思議に迷ひ。臆病より、神經病に變じ。其の見惑の果ては、一命を捨てゝ、君父に敵對するも、非理非道とも思はぬにいたる。是れ等は多く、外我見より生ずる大害なり。外我見の徒は、大概臆病より、神經病に陷いり。彼れ無上の威勢ある天主等に侯して、安んずるものなれば。其の臆病は、却て宗教上の威勢となり。爲めに死すれば、死後に大なる果報を得るものと思へり。總じて、常見は、臆病の者に多く。臆病の者は、必ず內我見に墮し。斷見は、憍慢の者に多く。憍慢の者は、必ず內我見に執ず。故に斷見は根機の勝れたるものゝ見惑なり。常見は、根機の劣れる者の見惑なり。是れ皆な諸法の眞理を、發明すること能はざるにより。種々分別を起して、都合よき所に、片つける積りなるべし。中〳〵有無斷常の見にては、容易に片付く時節は無かるべし。無の邊に片付けても、緣によりては、無きものも忽然として生じ。有の邊に片付けても、緣盡くれば、有るものも俄然として滅す。そも〳〵諸法は緣によりて生ずるものなれば。其の生ずる原

臆病却て敎の威勢

諸法は緣に從て生ず

因は、果して有か無か。是れ何の仔細ぞと深く觀察せざれば。水上の泡の起滅を見て、有無を說くに同じ。試におもへ、草木の種子の如き。水土の中にありて、漸々に成長すれども。其の草木を以て、水土の塊物なりとはいふべからず。何となれば、水土は緣にして、其の因は、全く種子に發育すべき自性を具有すればなり。蓋し草木のごときは、有形にして、眼に見ゆるゆゑに。誰も種子は因にして水土は緣なりと。明らかに了知すべしといへども。彼の種子も、すでに水土を含有せり。若し其の水土を去れば、形ち散じて、種子の質分を破るべし。さるときは、彼れ種子の因は、幽靈となりて、空中に飛去せりとも云ふべきか。はた彼れ種子の發育機は、無形にして、其の實性なしと云はゞ。物は因なく、緣にのみより て生ずと云ふを得べし。能々工夫すべきことなり。近代の理學者は、諸の分子を穿鑿して。人の靈魂も、衆分子の和合の働きに生ずるものなりといへり。是れ甚だ謂れなきことなり。何となれば、靈活なる心を以て、種々の頑物を生ずるは、容易なるべしといへども。頑物を集めて、一の靈活物を生出することは覺束なし。是れ本末輕重を知らざるの臆度なり。

靈魂は衆分子和合の働

第二十段

因緣果報

常見者の見所

斷見者の見所

斷常の見は、有無の見より起り。有無は、自己心念分別の影事にして。諸法の眞實にあらざることを了知すれば。おのづから此の見惑を斷じて、心性の理にも、通達することを得べし。そも〳〵一切諸法は、無常轉變の理なり。其の轉變に、必ず一定の規則あり。謂はゆる因緣果報是れなり。斷見は、此の因果を斷ずるなり。常見は、此の轉變の理を悟らざるなり。蓋し常見の徒の、無常轉變の理を見ること。恰も金鐵丸の轉ずるが如く思ひ。天地の始より、靈魂といふ塊りがありて、天地間に存在し。ごろ〳〵と轉ろげて、人間に來り。天上に往き。極樂にも往き。地獄にも墮ると思ふなり。故に常見の徒は、此の靈魂を荷ひ歩き。はなはだ落著に迷惑し、種々の畏怖疑惑を生じて。終に外我見に墮す。斷見の徒は、靈魂といふもの有るにあらず。生活する中は、肉身の働きにて心を生じ。肉身の働きを失へば。其の心は、火を吹き消すが如く、跡方もなきものなり。元來天地は、有形の外に實性あることなし。有形物の配合にて、種々の人畜禽獸等も生じて。生活するものなりと思ふなり。されば、からくり人形のそこねたるがごとし。天地の洪大なる、萬物の靈妙なる。假令仔細なきも、是れ等淺近の見

第二十一段

惡平等の立見

惡差別の立見

所の、能く看破し得べき所にあらざるなり。

惡平等見なるものは、平等均一を以て、萬物本源の理を立つるものなり。故に人事上、各々差別の道あるを惡み。これを非理非道として。尊卑の別、親疎の分を破壞し。甚しきは、自他の行事をして。一樣の規律にあらしめんことを欲するものなり。其の惡差別見は、全く惡平等に反し。一切萬物は、箇々分立して。各々相ひ關するものにあらず。其の優勝劣敗は、全く自然の淘汰なり。眞理なりと立つるものなり。又一類の者ありて、惡平等惡差別を一人にて擔ひ來り。惡平等を以て、他人を責め。惡差別を以て、自己を守り。卑諂に、人の物は我が物なり、我が物は我が物なり、といふがごときの邪見を立てり。是れはなはだ卑劣の見といふべし。

第二十二段

惡平等惡差別の由來

惡平等惡差別の、因果を撥無し。世間の義理を錯亂するは。なほ內我外我の見に同じくして、甚だ劇烈なり。しかして惡平等は、外我見より變じ。惡差別は、內我見より發するを通途とす。其の故は、外我見は、自己の外に、自己を支配するものを、認むるものなれば。其の主宰の心術を臆度し。謂はゆる天主天帝等は、一

切を以て、平等均一ならしめんことを欲するものなりと思へり。蓋し教法は、其の制作者たるもの、みづから神に通ぜしがごとく思ひ。其の臆度思量を以て、天主天帝の意となし。程よく差別して、これを主張するものなり。曰く、天帝は汝がために、某物を造化せり。某事を授與せり。彼れも汝の爲めなり、此れも汝の爲めなりと。遂に父母をも、彼れ天主の命じて、汝を撫育せしむるものなりと云へり。故に其の信徒は、先づ惡平等見に墮して。しかも惡差別見を起し。思へらく、一切萬物は、全く天主天帝の、吾が爲めに造化するものなり。其の君父の、吾を撫育保護するは。彼れ君父の、天帝に對する務めなり。吾其の恩惠を知らず。其の恩惠は、こと〴〵く天主天帝にあるなりと。是故に、人々一分の見惑は、有無斷常に過ぎずといへども。邪教邪師に從て、其の法を受け。種々に思惟分別して、其の邪見甚だ多般なり。或る邊は、惡平等に墮し。或る邊は、惡差別を說き。或る邊は、常見に類し。或る邊は、斷見に似たり。然りといへども、到底常見にあらざれば、外我見に墮せず。斷見にあらざれば、內我見に墮せず。其の惡平等見は、外我見に發し。其の惡差別見は、內我見に發するものなり。

天主我が爲めに萬物を造化す

邪見の多般

第二十三段　歐洲にて惡平等惡差別の流行

近時歐洲にて、惡平等惡差別の見の流行するは。種々の因緣によるといへども、其の根源は、悉く耶蘇教より發源するものに似たり。耶蘇教は、謂はゆる外我見の猛利なるものなれば。天主の私意を以て、世界萬物を支配し。假令君父の重きも、天主の威德よりこれを見れば、誠に輕賤のものとなす。是れ惡平等なり。故にこの信徒の根性は、知らず識らず惡差別に墮して。今日世界に、ありとあらゆるものは。一つも我が爲めならざるはなく、我より貴重なるものはなしと臆度せり。即ち慣習性をなし、同分の妄見となりて。終に彼の教を信ぜざるものも、自然に君父を輕賤し。萬物を土芥のごとく思ひ、甚だ殘忍の風を長じ。惡平等惡差別の見惑を帶び來て、大我見を起すに至れり。

第二十四段　神ありて不思議を支配す

其の惡平等見の者の思念には、耶蘇教は妄誕なり、信ずべからずといへども。然かも天地の物を生ずる、必ず神ありて、此の不思議を支配せり。此の不思議は、固より人智の究明し能はざるものにして。其の究明し能はざる所のものは、謂はゆる神の境域なり。此の神は、一視同仁にして。彼れ尊く此れ卑しきを欲せず。今日現在の世界は、此の神意に反し。悉く人の欲情より、成り立ちしものなり。

神意は全く一視同仁

欲情も亦平等均一

しかして、此の欲情に就て、これを言ふも。貴賤に分ちなく、尊卑に別なく。世に生存するものゝ常情なれば。其の欲情に相應するの幸福も、また必ず平等均一ならざるべからず。然るに彼れ大欲者は。力を兼ね、威をさしはさみ、他を横奪し。小弱のものをして、日夜衣食に奔走するといへども。凍餓を免かるゝことを得ざらしむ。而して其の威力あるものは、金殿玉樓に安居して。小民を奴隷となし。富貴を極め、逸樂を事とし。恰も禽獸世界の、弱肉強食のありさまと異なることなし。故に今日現成の世界は、神の惡むところにして。尤も人事の不平なるものなれば。此の社會を破壞して、宜しく平等均一の法を創立し。人々をして、平等均一の福利を得せしむべし。といふに外ならざるべし。

第二十五段

一視同仁の神あることなし

其の惡差別は、全く斷見の徒に發するものにして。人界は、強弱勇怯、智愚敏鈍娟媿の差別ありて。自然に其の禍福を同くせず。若し神ありて、一視同仁を以て心となさば。おのづから自然の差別ありて、人々の禍福を異にするの理なし。是れ全く偶然の事にして。其の差別あるは、世界のありさまなれば。箇々みづから爲めにし、みづから福を求めて。用捨なく他に打勝ちてこそ、人間に生存す

平均論は劣弱者の妄想

るの光榮と謂ふべけれ。彼れ平等均一論を唱へて、公平を求むるは。劣弱者の常にして、愚鈍の妄想に出づるものなり。畢竟人間の欲情は、人々みづから爲めにし。みづから勝れんことを求むるものなれば。假令一時平等均一になすも、忽ち不平均を生じ。強者は弱者を凌ぎ、智者は愚者を欺き。また今日の世界と、異なることなからん。是故に此の道理を會得するものは、弱肉強食は、世界の常理と思ひ。公平心慈悲心等に、謬らるることなく。十分に他を横奪しても、自己の光榮を計るべきなり。と云ふに外ならざるべし。

弱肉強食は世界の常理

第二十六段

斯くのごとき惡平等、惡差別の說は。誠に麁相なるものにして、取るに足らずといへども。世人は往々、これら麁相の見惑には陷いり易すし。何となれば、いづれも自己の貪欲に相應せし思量なれば。其の地位に應じて、有無斷常の見に差別なく。一概に、富貴に從順するものは、惡差別の見に誘はれ。卑賤に在るものは、惡平等見にいざなはれて。終には、人間界の大爭亂も、生起すべし。孟子曰。聖王不作。諸侯放恣。處士横議。楊朱墨翟之言。盈天下。天下之言。不歸楊。則歸墨。楊氏爲我。是無君也。墨氏兼愛。是無父也。無父無君是禽獸也と。楊氏は全く內我見なり、惡差

富貴者は惡差別に應じ卑賤者は惡平等に應ず

楊氏

墨氏

第二十七段見惑の次第定則

斷見にして外我見を立つる者

常見にして內我見を立つる者

斷見にして惡平等を立つる者

常見にして惡

別見なり。墨氏は全く外我見なり、惡平等見なり。學士にして、是れ等の邪見に陷いるものは。前段の麁相なる論量に似ずといへども。其の說いよ〳〵精くして、いよ〳〵世を紊り。愈々密にして、愈々人心を惑はしむ。其の禍害は、百代の後ちに流れて、止むときなかるべし。

是故に有の見は、必ず常見となり。無の見は、必ず斷見となり。常見は、外我見となり。斷見は、內我見となり。內我見は、惡差別を生じ。外我見は、惡平等を生ず。

是れ見惑の次第定則なり。就中內實は斷見にして、外我見を立つるものあり。是れ自己の內我見を以て、外我見に托し。人の子弟をして己れの眷屬となし。其の君父にも背かしめて、己れの支配に歸せしめんと欲する、大惡人なり。常見にして、內我見を立つるに似たるは。眞の見所にあらず。彼の思惑中に攝する、貪瞋癡の爲めに制せられて。內我見に類せしが如きのみ。惡平等も、斷見にして立つるものあり。是れは無の見にて、平等を見るものにして。其の均一論は、富貴者の行事を憤懣して、論理を求め。彼れが威勢をとりひしぎ。他の貧困者をして、幸福を得せしめんと、思願するものなるべし。常見にして、惡差別を立つ

差別を立つる者

見思二惑互に混ず第二十八段

分析學
比例術
自然自適

るものは。人々の靈魂は、箇々分立して、人間は人間なり、畜生は畜生なり。富貴者は富貴者、貧賤者は貧賤者にして。過去より取極まりたる約束なれば。今日は今日にして、各々榮華を求め。敢て他に關すべからず。人の世話より、身の世話大事なりと。思ふほどのものにして。此の惡差別も、貪欲に根源するものなれば、思惑中の攝なり。元來思惑見惑と分かつれども、我が一心の迷惑なれば。見惑の中にも、思惑あり。思惑の中にも、見惑ありと知るべし。

內我外我、惡平等惡差別の見惑は。今日人間世界の常にして、彼此相ひともに錯亂して、止むときなし。たま〳〵眞正の學士にして、眞理を究明せんと欲するものも。概ね是れ等の見惑中に彷徨して、出脫すること能はず。就中其の非を悟るものは、或は分析學を以て、眞理を求めんと欲し。或は比例術を以て、眞理を求めんと欲し。或は自然に托し、自適に放任するものあり。是れ等の見は、人事を錯亂するには至らずといへども。其の眞理を求むるに於ては、到底一重の關を隔てゝ。通達すること能はざるものなり。何となれば。其の分析學を以て、眞理を求めんと欲するものは。物質の細分子を究明し。其の分子の功用を以て、

形以下の學

萬物造化の原理を認めんと欲す。是れ形以下の變化を知るに止まりて。決して、諸法本來の自性に通達すること能はざるなり。馬の足を見て、悟ること能はざるものゝ。蚊の足を穿鑿して、悟るべきの理なし。男女の相を看て、悟ることあたはざるものゝ。羯羅藍遏蒲曼を穿鑿して、悟るべきの理なし。蓋し細大は、比量の見にして。大必ずしも、麁ならず。小必ずしも精ならず。諸法の眞理は豈分析學の發明し得べきものならんや。いま草木を以てこれを例せんに。櫻は櫻なり。梅は梅なり。松柏は松柏なり。各々其の枝幹を異にし、花實を同くせず。假令いかなる分析術を用ふるとも、其の差別の原因を發明すべからず。若し梅は梅の種子あり、櫻は櫻の種子あり、松柏は松柏の種子ありと。おの〳〵其の種子に放任せば。何物か放任しあたはざるものあらん。天地は天地の性あり、人は人の性あり、禽獸は禽獸の性ありと、放任するも不可なかるべし。斯くの如くんば、必ずしも分析學をまちて、麁細を論ずるとを要せざるなり。其の比例術を以て、眞理を求めんと欲するものは。今日世界に現存する諸物を、彼此比例して。其の一定の約束を證明し。以て眞理に通達せんと欲するものなるべ

比例術心性を發明すること能はず

自然自適は苛育の病

し。若しそれ、一定の約束によりて、その眞理を證明するに足るといはば。人類の上に就て、必ずまづ、その眞理を、容易に證明することを得べし。何となれば、人の形體は、萬人が萬人ながら、その約束を同くし。その心も、貪欲瞋恚愚癡等は、貴賤尊卑の別なく、これを異にするものなし。是故に、人の形體心術ほど、彼此を比例して、一定の約束に合せしものはなく。當に現在世界の億兆のみならず。過去幾千年の昔も、その變易なきは。古人の書を讀みても、これを知るべし。かゝる大比例の慥かなるにも似ず。尤も暗昧にして、古今發明しあたはざるものは。吾が心性、本來の面目なり。死後の有無は、しばらく置く。即今自己と稱しながら、その面目は、恰も一怪物におなじ。是れ即ち比例術の、眞理を發明するに足らざるの一證なり。これを要するに、分析比例の學は、利用厚生の術に於て、裨補なからざれども。畢竟一技術にして。眞正學士の、眞理を究明するに於ては、もとより則を取るに足らざるところのものなり。其の自然に託し、自適に放任するは。所謂學士の、苛育の病なり。此の種類の見所は。萬事萬物は、自然の力ありて、成就するものなれば。人の作業は、大概諸法の實理を案り。人生の禍害を招

世人善惡の虚名に迷ふ

くものなりと思へり。その君臣父子等の名分も、全く人作にして、自然の理にあらず。蓋し善惡是非は、慣習風俗に出づるものにして。是れ即ち善なり、これ即ち惡なりと云ふも。素より一定の規律なし。然るに世人は、往々この是非善惡の虚名に迷ひ。其の中に出頭沒頭して、恰も地獄の苦惱を受るに似たり。是れ全く、自然の理を知らずして。古今人間の迷惑の見を以て、取捨安排せし惡習慣に、支配せらるゝの報いなりといへり。もしそれ斯くのごとき見所にして、眞理なりといはゞ。飯を喫するに、匕箸を用ふるも。是れ人間の迷惑といふべし。

第二十九段

見惑より生ずる禍害

見惑の種類多般にして。其の變相は、これを一々明說するに遑あらず。いまその世間に大害を生ずるものを略陳して、學士の考案に供するのみ。これを要するに、見惑より生ずる禍害は、內我外我、惡平等惡差別に論なく。彼此の自體相用を害し。その正因緣を紊り。世間を破壞するものなれば。眞正の學士たるものは、其の邪徑を分別し。高く精彩を著け、此の見惑を出脫し。眼を放て、自他の實相を看破し。その眞理を悟得すべし。抑も一切の理法は、有無の雙觀を以て、これが根據となすものなれば。有に執じて、無を捨ることなかれ。無に執じて

理法は有無の雙觀

有を賤しむる事なかれ。謂はゆる有無は相對の位なれば。共に諸法の變相に過ぎず。蓋し凡夫の見として、動もすれば理源を一に歸し。その一に、分別心を落著せんことを求むるものなり。假令諸法の眞理を歸納して、一邊に落著するも。これが自體相用を、發明開悟せざれば。なほ大極と觀念し。天地と一口に唱へ出だすも。其の眞理の暗昏無明なるは、免るべからず。或る古人のごとく。萬法は一に歸す、其の一何の處に歸すと云て。擔ひ來りになひ去りて、他に質問するとも、詮なかるべし。是故に、眞正の學士は、有無を雙觀して。其の有無の上に、輕重得失の見を生ずることなかれ。自己を負かに、有無の外に出脫して。無を觀ずるときは、天地山河と、自己と、共に無に觀達し。有を觀ずるときは、天地山河と自己と、ともに有に觀達し。觀達し去り、觀達し來り。眼中一物を留めざるときは、有無斷常の見を離れて、居然として、眞實現前するの時節あるべし。

眞正學士の觀法

第三十段

佛道本論卷之二　名法供養

天に在ては、日月星辰なり。地に在ては山川草木なり。其の中間に命ずるは、人

人々所見を異にするの理なし

獸鳥魚なり。されば苟くも五官の感覺を具足して、これを觀察す。豈に人々其の所見を異にし、家々その論量を同うせざるの理あらんや。譬へば、一匹の布をはかるに、一定の尺を用ふるがごとし。千萬人をして、これが長短を說かしむるも、寸分を違へざるべし。然らばすなはち、事物を同うして、其の所見を異にするは。是れ全く人々の妄覺にして、其の妄覺偏執の上に、種々の分別を生じ。其の分別の中に、七顚八倒して、出脫することあたはざるものなりと覺悟すべし。

人々の妄覺

第三十一段　眞理の常體

諸法の眞理は、學者異同の見解に關せず。常におのづから眞實にして、火の燃るが如く、水の流るるがごとく。天の高きが如く、地の卑きがごとく。實際に住し、諸法に同ぜり。是故に、其の理を窮明せんと欲するの學士は。たとへば射を學ぶもの、その正鵠を失し、其の的中を得ざるときは。反て自己の手もとを省みるがごとく。苟も有無斷常の見の、邪觀なることを知らば。更に正知見を發得すべき觀法を求むべし。余いま其の觀法を逐一論明せん。抑も諸法の自體相用を觀察するには。先づ法と器との差別を知るべし。器とは、形器なり。法とは、其の形器に相應して、現はるゝものにして。妙用自在なるものなり。譬へば、火

法器の差別

第三十二段　正觀の着歩

地大水大火大風大
堅相濕相煖相動相

の薪に緣りて現はるゝがごとし。薪は器なり、火は法なり。其の光其の熱も、こと〴〵く法の相にして、器の相にあらず。此の法器の差別を、信解せざるものは。到底眞理を、發明すること能はざれば。此の差別は方便なれども、能々觀念して、如實に修行すべし。

一切萬物の眞理を窮明するには、必ず先づ其の器に就て、其の法の妙相を觀じ。其の妙相に就て、其の妙用を知り。其の相用に卽して、法體を覺悟すべし。蓋し器は法の器なり。法圓なれば、器もまた圓なり。法方なれば、器もまた方なり。長短曲折、悉く法の因緣に相應して、各々その器を成就す。而して、其の器たる質分は、謂はゆる四大なり。何をか四大と云ふ、一には地大、二には水大、三には火大、四には風大、是れなり。地大は堅相、水大は濕相、火大は煖相、風大は動相、此の四大、すなはち、堅濕煖動の相を離れて、觀察するときは。其の器に卽して、必ず其の法の相用を悟得することを得べし。譬へば家屋のごとし。其の材料を分別するときは、竹木瓦石なり。此の竹木瓦石の相を離れて、觀察するときは。堂室廳牖、こと〴〵く其の家相にあらざるはなし。此の堂室廳牖は、法にして。竹木瓦石

第三十三段 衆生

有情非情生住變滅

生住變滅は隨緣の變相

は、其の器なり。若し竹木瓦石を、一々分別して、家相を求むるときは。啻に家相を觀得すること能はざるのみならず、其器たる所以の理をも失すべし。是故に、器は法の器にして。法の因緣に相應して、千差萬別あり。假令千差萬別ありといへども。器の質分は、必ず四大の外ならざること。なほ家屋に千差萬別あるも、其の材料は、必ず竹木瓦石なるがごとし。

法の器によりて現はるゝを、衆生といふ。衆はもろ〳〵なり、生は生るゝなり。此の衆生を差別して、有情非情の二とす。（動物植物といふにおなじ）而して。此の有情非情ともに、生住變滅の法なり。此の生住變滅は、其の生ずる時に於て、生法あるにあらず。其の滅する時に於て滅法あるにあらず。生と滅と、其の相は相ひ反するも、其の法は、全く一義なり。其の生ずるの法、即ち住するの法にして。其の住するの法、即ち變ずるの法なり。其變ずるの法、即ち滅するの法なり。是故に、衆生の生住變滅は、其の器に隨緣するの變相にして。その生を以て有とし、滅を以て無とするは、全く凡夫の倒見なり。譬へば、日の東方に升るを生と說き。其の天に中するを、住と說き。その西に傾くを、變と說き。其の沒するを、滅と說くがごと

法體常住

第三十四段 正觀の進步

し。若し日輪の體に即して、これを觀るときは。始より生住變滅の法あることなし。是れ卽ち法體常住の義なり。されば此の世に現在するもの、何物か、器に依らざらん。何法か、生住變滅ならざらん。たとひ眞正學士の、眞理を究明せんと欲する者も。必ず法と器とによりて、現在するものなれば。己れも均しく、此の法器の分際に在て。その觀察する事物も、生住變滅にして。其の觀察する心念も、生住變滅なり。是故に自他轉變遷流の上にありて、一定の見所を立し。外觀の一偏より、諸法の眞理を、究明せんと欲するは。譬へば、地球の大陽外を經過し。且つその迅速なる自轉の上に、瀛車を走らし。其瀛車の上に、銃丸を飛ばし。その銃丸の上に、電機を設け。其の電氣の上に住して、時間を計量し。動相を推測し。以て他の電氣上に在る的を射て、其の正鵠を失せざらんとするが如し。是故に、法器の差別は、諸法の眞理を究明するに於て。大切の要目なりといへども。此の分別の上に、障礙せらるゝときに。又も正觀を失するに至るべし。夫れ法器の差別を、審かに觀察し。彼れ一切衆生の、自體相用は。器の質分を離れて、分明なることを知らば。更に四大の相に就て、其の質分の如何を究明し。所

一切萬物の元子

謂器なるものも、彼れ衆生の自業力によりて、成就する所以の理を究明すべし。余いま四大に就て、一々これを論明せん。火大は煖なり、水大は濕なり、風大は動なり、此の三大も、また所依の法ありて、顯はるゝものなれば。獨り地大のみ、器の實質をなすものゝごとし。何となれば、實質の體を離れて、煖相なく。實質の體を離れて、濕相なく。實質の體を離れて、動相なし。故に器の質分を究明するときは。風火水大も、無形にして。其の所依は、只に地大の一種に歸著せり。謂はゆる地大なるものは、形質あるものゝ總名なれば。苟くも形質あるものは、地大の種類にして。是れ即ち、一切萬物の元子といふべし。近時の理學者、これを分析して。七十有餘の元素ありと謂ふ。しかして、此の元素は、各々形質作用を異にし。合離聚散して、萬物の實質をなすといへり。是れ全く形質あるものは、いかなる因緣に相遇するも。不變なるものとして、說を立つるものなり。若し此の元素の形質を、分析しつくして、絕無に歸するときは。その作用も、烏有に歸し。恰も彼の器を離れて、法の見るべきなきと、一般ならん。夫れ地大は、かならず實質あり。實質あるものは、これを析くことを得べし。その析くべからざる極度

形質も終に絕無に歸す

能依所依

第三十五段

時間の論

にいたらば、これを極微と名づく。此の極微も、形質あるうへは邊際あり。邊際あるものは、中心あり。中心あるものは、析くべし。故にこれを析き、これを折きて、形質を盡くさば。その析くべからざるの時節は、形質も絕無となりて。其法は、空に入るの時節なるべし。是故に、元素實有の見は。彼の所謂有の見のものゝ見惑にして。畢竟不壞の形質あるにあらず。しばらく四大の相を以て、器と立つるは。能依所依を差別して、觀察するものなれば。法は無形なり、器は有形なりと見るも。いまだ正觀にはあらざるなり。

茲に人あり、有形のものは、假令析きつくすとも。遂に空に入るの理なしといへり。是れ全く想念の一著なり。何となれば、凡夫の見には、時といふものすらありと思へり。いま此の時を分かち、一晝夜を二十四時とし。その一時を六十分とし。其の一分を六十秒とす。然るに電氣の迅速なる、一分間に地球を四週す。この電氣、必ず形體あるものによるが故に。其の形體の、一々の極微を通過すべし。その一極微を、通過するの時も。また時と云はざるを得ず。此の時間は、彼の一秒の、何億萬分の一なることを知らず。若し斯くのごとくして、時間の微妙

萬物の轉變即ち時

を盡くさば。地球上の算術家を集め、未來際を盡くして、これを分割するも。時間の間隔を盡くすこと能はざるべし。是れ全く、時なるものありと、豫想せし見惑なり。夫れ時は、時といふものあるにあらず。全く萬法轉變の相なり。時ありて、萬物を移すにあらず。萬物の轉變、即ち時なり。人の船に乘て、水を下るに。みづから其の船の轉ずるを知らずして、山の移るを見るがごとし。總じて物の變遷を見るは、その變ぜざる者よりこれを定むべし。いま人の時を論ずるに、みづから變遷に處し。その心念の轉相は、殆と電氣の經過よりも劇しくて。却て不動の位に在るがごとく思ひ。萬事を以て、時の變遷に托するは。豈顚倒の見にあらずや。

顚倒の見

故に經曰。過去心已滅。未來心未生。現在心不住。三世心不可得。（金剛經）と。若しそれ眞正の學士にして、三世を出脫し。以て一切萬物の、無常轉變を觀ずるときは。恰も火輪の轉ずるがごとく。一處を動ぜず、一法を變ぜず。謂はゆる常自寂滅の法たることを悟得すべし。

常自寂滅

第三十六段

今重ねて分子實有の見を破し。所謂地大の種性、不壞の形實ありて、存するものにあらざることを論明せん。彼の蒸氣のごときは、水の分量を增加すること、一千七百倍なりと云へり。此の增加の上に就て、觀察するに。火の熱は、無形にして、方量なく。唯に形質あるものに寄托するものなり。故に此の增加は、水中に熱を加入して、增加せしものといふべからず。必ず水の分子、火熱を傳へて。所謂元素の中心邊際の別なく、一齊に膨脹せしものなるべし。若し斯くのごとく膨脹せしは、分子稀薄になりて、方量を增加せしと云はゞ。その稀薄の點は、熱を以て塞ぐべからず。空を以て塞ぐべからず。必ず實質あるものによりて、遍滿せざるを得ず。是れに由てこれを言はゞ、所謂元素なるものゝ質分は、一定の形質方量ありて。不變なるものにあらざること分明なり。若し夫れ元素のごときも、火熱等の因緣によりて、伸縮長短するものとなさば。其の伸縮長短は、元素の何の點にあるかを、尋究するときは。是れも時間の推測におなじくして、終に究明すべからず。要するに、形實あるものも。因緣によりて變化窮りなきが故に。その聚散すべきときに方りては、聚散し。其の合離すべき時にあたりては、合離し。その增減すべきときに方りては、增減し。其の生滅すべき時に方りては、生滅し。畢竟有無斷常の見を以て、推測すべからざるものなり。然るを此の元素

元素に一定の方量なし

形質ある物も因緣に由て變化す

元來不變の見

第三十七段

分析窮理の學は現象の推測

學士の邪思惟

は、全く增減生滅なきものと見るは。是れ特に凡夫著有の見といふべし。

余は分析窮理の學を排斥して、非法となすにあらず。此の學は、全く器の質分を詮索し。且つ諸法の現象に就て。その關係を證明し。其の變化を推測するに止まるものにして。所謂眞理に通達するの階級にあらざることを、論明するに過ぎず。蓋し古今聰明の學士にして。動もすれば、形器の上に執し。形器は、實有なり。諸法は、形器の作用なりと思ひ。遂に諸法の實相を、正觀するの慧眼を失ひ。今日世界の人事は、程よく取り運びて。己が形器を保護するの外は、更に他事なきものなりと、邪見を立つるものあり。故に此の實有の見を破し。所謂法器ともに、有無斷常の分際にあらざることをも極論せるなり。されば眞正の

學士の正思量

學士は、謂はゆる形器の質分も、實有にあらざることを覺悟し。たゞ〳〵正觀の方便に、且らく法と器との差別を立すべし。器は所謂四大なり。此の四大の性は、法界に周徧し。諸法の因緣に即して、聚散生滅し。或は大、或は小、或は强、或は

第三十八段

三世

弱、畢竟一切衆生の業力に應じて、固より方所あることなきものなりと知るべし。熟々一切衆生の分際を觀察するに、其の托して以て生住變滅する境界は、三世十

十方

亡民の譬喩

三世十方の看破

方の中なり。三世とは、謂はゆる過去、現在、未來、なり。十方とは、東、西、南、北、四維、上下、なり。（十方は、天方を示すものなり。若しこれを子細にせば、億萬方を立つるとも、盡くすこと能はざるべし。法相の所立、概ね是のごとし。）此の十方三世の何物たるを究明するは、即今眞正學士の急務なり。若しこれを覺悟せざらんには恰もみづから生所住所を知らざる亡民の、道途に醉眠し。その醉眠中、鬼神に攫み去られて、暗窟に置かれ。醉夢始めて覺めし時。我が身の何物たる、境界の何處たるを知らず。たゞ心に感覺するがまゝに、妄分別を生じ。有無を計し、得失を念じ。漸くにして。其の境に慣れ。その分に安んじ。またも醉眠して、鬼神に攫み去らるゝがごとし。故に學士にして。此の一物を覺悟するの慧目なきものは。自己の妄念を分別し。有と感ずるものは、無の妄念を擔ぎまはり。其の妄念に、何學何道といふ名字を付と感ずるものは、有の妄念を荷ひあるき。無し。みづから智識と稱して、他の慧眼を潰ぶし。邪見に誘導して、相ひ共に醉生夢死す。誠に悲しむべきことなり。されば學士たるもの、苟くも眞理を究明せんと志さば。必ず先づ、三世十方を觀破し。諸法實相の田地を占め、以て一切の萬物に對せば。おのづから自他の境界も分明にして。其の來所を知り、その去

第三十九段

虛空界の一多邊際

所を知り、其の身を動ぜずして、天の天外までも知り得べし。

三世は、時間の經過を差別するものにして。此の差別も、顚倒の見に起るものなることは。前章に於て、大概これを論究せり。いま人あり、無始無明の窟宅に住し、以て余が境界を比量し。なほ三世の始終を疑問するものあらば。余はこれに對へて、雞卵の時を告るは、迅雷の耳を掩ふに遑あらざるものなりと言はんのみ。其の十方虛空界を打破して、微塵となすがごときは。容易ならざる事業なれば、先づこれを觀察するの方便を示し。然るのち徐に手を下して、至當の處分をなすべきなり。そも〳〵十方虛空界といへども、おのづから方量あるべきなり。彼の天の天外は、何の際限あるかを觀察するときは。中〳〵凡夫心念の攀づべきにあらず。若し此の十方虛空界を以て、一といへば、一の方量あり。多と云へば、その數多の虛空を含有するの虛空界ありて。その方量あるべきなり。若し虛空は、一多をいふべからず。其の方量なきは、即ち虛空なる所以なりといはゞ。今試みに、この虛空界に、實質形體あるものを周徧して。其の方量を求むるときは。謂はゆる虛空界のあらん限りは、實質形體にして。その實質形體の外面は、必ず限量あるべきなり。この限量外は、なほ虛空界なりと云はゞ。また其の虛空界のあらん限り、實質形體の物を以て、周徧するときは。終に際限あるべからず。是故に、即今頭を回らして、望むところの虛空界は。果して一多方圓の分際にあらざることを知らば。深く觀念して、是れ何の子細ぞと、工夫を下すべし。

虛空際に一多邊際なし

第四十段

無念有念

虛空界も有念の相

虛空界一多方圓の觀察は、なほ極微空有の觀察に同じくして。全く自己心念の相を、分別するものなれば。其のこれを盡くさんと欲する者は、宜しく自己の見著を離れて。先づ有念無念の相を覺悟すべし。有念とは、是の心の境に攀づるの相なり。無念とは、是の心の境を離れたる相なり。彼の虛空界のごときも、なほ有念の相にして。彼の實有の境を盡くして、攀づべきものなきにより。遂に虛空に攀ぢ、以てその邊際を盡くさんと欲するものなり。總じて有念の相は、夢中に天地山河の境を認め。その夢中の心念は、夢境に攀ぢ。前念は轉じて、後念の夢境を現じ。念と境と相ひ攀緣して、斷絶せざるがごとく。その夢境の斷絶するは、覺悟の時節にして。其覺悟の時節は、正しく無念なり。これを言を易て

無念とは解脫の境界

所見差別の譬喩

世界は衆生の能見所見

云はゞ、無念とは、是の心の夢境を離れて、解脫せし境界なり。抑も凡夫肉眼の所見を以て、一切を推及比量するは、元來所詮なきものなり。自己の我見を以て、種々に方圓曲直長短廣狹遠近を計り、以て一切法界を盡くさんと欲せば。恰も夢中の山河を測量して、實有の見を立つるがごとし。更に其の甲斐あるべからず。いま試みにこれを譬へん。此の世界の百分一の世界ありて。山河草木人獸鳥魚も、其の世界に相應せり。しかして其の世界の人は悉く百倍の顯微鏡を以て、その眼根を成就するものとなさば。一切諸法の長短廣狹遠近等は、さらにこの世界と、異なることなかるべし。其の千分の一、萬分の一、若しくは萬々分の一なる世界も、なほ此の理にして。經に謂はゆる、以須彌之高廣、內芥子中、無所增減、須彌山王本相如故。（維摩經）ものなり。されば、一切の界は、全く此の衆生の能見所見より現じ。その所見は、其の能見によりて。種々の變相あるものなりと覺悟すべし。即今この地球上の有情も、人間は人間の所見あり。禽獸は禽獸の所見あり。各々その見所に相應して、みづから己が世界を建立せり。其の大小廣狹長短遠近も、差別あるべきことなり。夫れ衆生とは、凡そ生あるものゝ名なれば。天に

世界の建立

衆生の外に世界なし

第四十一段

在ては、日月星辰。地に在ては、山川草木。ことゝ〳〵く衆生の相なり。此の衆生は、各々自己の體相用を具して、生住變滅するものなれば。畢竟じて相ひ互の衆生、各々己が見より他の衆生を計し。みづから私して、己が世界を建立するものなれば。甚だ以て不都合といふべし。是故に、一切衆生、各々己が世界と觀得すれども。彼れは彼れの彼れなるが故に彼れは彼れの因緣に任せて、生住變滅し、更に他に關係なく。壽命の長きは、天地の如く。その短きは、蜉蝣の如く。山河なり草木なり、實に己がまに〳〵なり。此の義を能々覺悟すれば、この世界は、全く衆生の建立せし者にして。これを分別すれば、衆生の外に世界なく。その衆生、各々其の根機に任かせ。他の衆生を所見して、ほどよく世界の觀をなすものなることをも知り得べし。

一切の萬物、全く虛空界を室とし、其の中に生住變滅しながら。却てこの虛空界を覺悟して、方圓廣狹の相を分別すること能はざるのみならず。凡夫慣例の有無の沙汰も、盡き果てしこそおかしけれ。若しもや眼前に、かゝる一物なかりせば。邪見の火は隨緣して、一切萬物を燒き亡ぼすとも。これに注ぐの海水なき

虛空界を看破するの眼鏡

がごとく。所謂見惑を斷じて、正知見に引入するの手段もなかるべし。いま人あり、余に此の虛空界の一多邊際を問はば。余は淵默して、この虛空界を看破するの眼鏡を與ふべし。此の眼鏡は、恰もこの虛空界の方量と同一にして。この眼鏡より、望見すると、きは、黃面老子の所謂三界は、目下に在るものなれば。天上人間修羅餓鬼畜生地獄の變相も、かならず分明ならん。夫れ三界とは何ぞや、即ち一切衆生心の變相なり。經曰。三界之中。以心爲主。能觀心者。究竟解脫。不能觀者。究竟沈淪。衆生之心。猶如大地。五穀五果。從大地生。如是心法。生世出世。善惡五趣。有學無學。獨覺菩薩。及於如來。心地觀經と。然らば則ち、諸法の眞理は。全く一切衆生の心地に、含有具足するものなれば。今や所見有無の論究を止めて、是れより衆生心の觀察に入るべきなり。

三界は衆生心の變相

第四十二段　衆生心の觀察

夫れ法の衆生と現ずるを、心と名づく。是の心の靈妙なるは、言ふもさらなり。方圓長短の相にあらず。青黃赤白の相にあらず。眼を以て視るべからず。耳を以て聽くべからず。即ち聽くべからず、視るべからず。而して一切の衆生なり。此の衆生の緣起するは。たとへば水上に浮漚の生ずるがごとく、空中に雲霧の起るがごとく。法界の中に、法爾として緣起するものなり。今その緣起の法を正觀するに、兩鏡相ひ對して、其の影像の緣起して無量なるがごとく。明覺湛然たる一法界の中に、忽然として一塵を發すると、きは。法々相ひ纏ひ、塵々相ひ映じ。心と境とおのづから差別して、其の中に五蘊を結び。結根を命とし、抱合して放たず。是の因緣を以て、生死あり、苦樂あり。生死三世を隔て、苦樂萬境を分ち。因緣其の果報を引き。輪轉して、盡未來際斷絕せず。是故に、眞正の學士はみづから省み、深く五蘊の結根を觀察し。その子細を覺悟し、以て解脫を求むべきなり。

衆生緣起の相

第四十三段　色蘊受蘊想蘊行蘊識蘊

一切衆生の身心を分別して、五蘊となすは。全く衆生界の理を、論究發明するものにして。眞正の學士は、深く觀察を加へて、自得すべき要目なり。五蘊とは一には色蘊、二には受蘊、三には想蘊、四には行蘊、五には識蘊、是れなり。蘊は、蘊蓄積聚の義にして、是の心の宿習なり。夫れ四大緣起して、法界の中に、色塵を發す。色と心と內外をなして、一にあらず、異にあらず。結聚して、色身を感ず。既に色身あれば、心識その中に動く。故に色と識と、相ひ須ちて受あり。受は想を生ず。

法界一相

第四十四段

諸法は色の一法に歸す

想は行を生ず。行は識を生ず。色受想行識蘊蓄して、我相を執り、生死禍福を計し、有無得失の見を起す。是故に色なければ、受なし。受なければ、想なし。想なければ、行なし。行なければ、識なし。識なければ、法界一相なり。譬へば人の一身安穏にして、一點の痛苦なきときは。四肢五體ともに、其の心に同ずるがごとし。

色は塵なり、塵を集めて身となす。身に諸受を受く。即ち眼に色を見、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、口に味を嘗め、身に冷煖痛痒を覺す。この諸受を集めて、推究するときは。衆生の現境は、悉く色の一法に歸するものなり。故に一切の法は、全く所見にして。其の所見を離れては、一法も求むるものなし。いま人あり、境は色なり、故に一切の法は、所見なりとなさば。他の聲香味觸は、我が現境にあらずやと云ふものあらん。是れ深く觀察せざるの過ちなり。夫れ人の聲を聞くや、必ず曰く、是れ何物の聲なり。香を嗅ぐや、必ず曰く、是れなに物の香なり。味を嘗むるや、必ず曰く、是れ何物の味なり。觸を覺するや、必ず曰く、是れ何物の觸るゝなりと。其の何物を尋るに、必ずその形あり。故に曰く、是れ草木なり、是れ禽獸なりと。諸法を擧げて、全く色の一法に歸せり。若し眼に見るべからざる聲香味觸あらば、必ず驚て鬼神となし。怪みて不思議となさん。されば凡夫の覺知の現境は、色の一法に歸し。その所見を以て、世界を建立すること知るべきなり。是故に、一切の世界は、能見所見ともに、衆生の相にして。此の衆生は、悉く色塵を積聚して、身となすものなれば。其の身を離れ、その形を離れて。一法も見るべからず。故に此の世界は、色界にして。此の衆生の身は、即ち色身なり。當に知るべし、色界の諸法は、所見にして。一切の諸受も、色蘊の因緣たることを。見によりて、色と名づく。其の色たる所以のものは、四大なり。此の四大の相を、分別するときは。堅濕煖動なり。此の堅濕煖動の相を、取るにもあらず。また一切衆生心を觀ずるにもあらず。而しておのづから世界の相をなし。天地を室とし、萬物を器とし。其の形象の中、色受の分際に熏起するものは、謂はゆる想なり。想とは、想像の想なり。我が心に現ずるを、想と云ふ。我が境に現ずるを、像といふ。此の心想は、彼の形像の影事なり。彼の形像は、此の心想の影事なり。譬へば明鏡を懸けて、萬物を寫すに。方所に隨て、影像自在なるがごとし。是故

受蘊の緣起

第四十五段

想蘊の緣起

行蘊の緣起

第四十六段

に想像は、内外の法にして。全く衆生界の分際と知るべし。其の分際の中に在て、身口意の三業間斷なき、これを行と名づく。その識の如きは、八識の別あり。此論明は、後章に讓るべし。

身は色身なり。この色身に相應して、受あり。少壯より、老大にいたるまで。肥瘦長短、その分に應ず。其の受に相應して、想あり。頭足腹背、念ぜずして失せず。是故に、想は人相なり。いま人あり、忽ち臂を斷ず。扁鵲なるものありて、頃刻の間にこれを治す。その人動もすれば、斷無の臂を用ひんとす。蓋し臂の色受は去るといへども。其の想蘊は、未だ全く除かざるがためなり。余が友、曾て戰場に在て、彈丸を石橋の下に避く。敵の一大砲丸、忽ち石橋を碎き、橋下に破裂す。その人狼狽して、人に問ていはく、余が頭ありや否やと。一時傳へて、笑柄となす、是れ全く劇烈なる受によりて、忽ち想蘊を亂るものなり。曹操曾て暑中に軍を行る、軍士大に渴して、進むことあたはず。曹操軍に傳へて曰く、前山を越えて、梅林あり。實まさに熟せり。到らば則ち人々をして飽食せしめんと。軍士これを聞て、渴想頓に止む。また以て想蘊の理を知るべし。

第四十七段

大人は大人の想あり。少年は少年の想あり。男子は男子の想あり、女子は女子の想あり。美人は美人の想あり、嫗婦は嫗婦の想あり。強者は強者の想あり、弱者は弱者の想あり。富者は富者の想あり、貧者は貧者の想あり。貴者は貴者の想あり、賤者は賤者の想あり。乃至禽獸蟲魚は、禽獸蟲魚の想あり。おの〳〵其の色受の分際に應じて、想蘊を結び。その想蘊の中に於て、種々善惡の諸業を造れり。是故に、大人の大人らしきは、大人の想なり。少年の少年らしきは、少年の想なり。男子はおのづから男子にして。女子はおのづから女子の想あり。美人はおのづから高慢自得して、嫗婦はおのづから謙遜卑下す。強者は驕暴にして、弱者は退屈す。富者は奢り、貧者は歎く。貴者は權を恃み、賤者は力を恃む。乃至翼ある者は飛び、蹄ある者は走る。その怒るや、角ある者は觸れ、牙ある者は嚙む。萬法無所得の中に、熾然として有所得の相あるものは。全く一切衆生の妄想なり。蓋し想の變相たる、一々計すべからず。これを要するに、色法によりて、色身を成就し、身によりて、受あり。受によりて、想あり。想によりて、行あり。行によりて、識あり。五蘊假りに結て、結根を命とし。抱合して放たず。是れ苦

可憐の衆生

第四十八段

色蘊は衆生の所依

樂生死の集るところ、佛の所謂可憐の衆生なるものなり。

色は外境界にして、想は內境界なり。此の內外の感應は、全く符節を合するがごとく。一異をいふべからず。外境界の色相を變ずれば、內境界の想も變じ。隨て行蘊も變じ、識蘊も變ず。要を採りて言はゞ、衆生の業相、おのづから變ずるものなり。譬へば、富者の一朝破產せしときは、貧者の想となる。その破產は、外境界の變なり。この外境界の變は、まさしく富者の想を破し、貧者の想となす。この貧者の想は、すなはち內境界の變なり。一旦貧者の想となるときは、おのづから外境界の觀も變じ。萬事萬物ともに、彼の富者の時とは、相違して見ゆるものなり。貧者の富める、貴者の權を失ふ、賤者の權を得る、その理は易はることなし。是故に、色蘊は、一切衆生の所依にして。この色界および色身の轉變は、即ち衆生生死の法なり。幸にして、天地のごとき壽命の長き色法ありて、これを所依とすれば。人間世界は、天地の住する限り、相續もすべし。たゞ此の色身は、誠に不完全なるものにして。一日に三度も飲食して、色法を補ひ、程よく相續しても、七八十年位の中には大概壞るゝものなり。此の色蘊の壞るゝ時は、想蘊も壞れ、一時

第四十九段衆生差別の因緣

に世界をうしなひ、途方にくるゝものは大方なり。富者貴者の世界は、尤も廣大にして、莊嚴の至極なるものなれば。これが一時に壞るゝ時は、中〳〵の大事なり。若しそれ、衆惑を斷じて。これ等の世界に遊ぶものより、これを見れば、誠に憐れとも思ふべし。我等斷末の苦しみは、今より思ひやられて、恐ろしき次第なり。誰も血氣盛なる時は、死は鴻毛より輕しなどゝ、口癖に言ふめれど。此の色身の壞るゝ時は、血氣も退き、元氣もなし。無量劫來つくり來りし罪業は、目前の境に現じて、まさしく地獄の苦報なり。この故に、平生より邪見を離れ、因果を信じ、一切衆生を憐むべし。勢に乘じて、貧賤の者を、土芥のごとく思ひ。猥にこれを苦しむる時は。其の苦しめられし貧賤者の怨は、一身にあつまり。未來も必ず善き果報はなかるべし。今時聰明利智の人は、未來は兎もあれ、今世さへ十分なればなど云へど。未來に求めなければ、今世にも求めあるべき理なし。所詮邪見の人は、其これを調伏する事六つかし。

衆生差別の因緣は、色蘊の上に現はれ。其の色蘊の形勢は、全く宿業の果報なり。此の果報を轉じて、他の果報を生ずるは。所謂三業の善惡によるなり。三業善

受蘊全く善惡の境界を緣起す十

なれば、おのづから善境界を感じ。三業惡なればおのづから惡境界を感ず。蓋し行蘊は、彼の想蘊より緣起し。彼の想蘊は、受蘊より緣起するものなれば。全く受蘊の因緣いかんにして、一切衆生善惡の境界を緣起するものなり。是故に。世間の法として、種々の因緣を正し。色法の上に差排して、正法を建立し。以て衆生の受蘊を成就せり。曰く、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫婦兄弟朋友たり。乃至一切見聞覺知の境を正して。これを敎へ、これを習はす。即ち王法の善惡は、世間の治亂にあらずして、一切衆生界の善惡なり。孔子曰、去食自古皆有、死民無信不立と。この言、人情に近からざるに似たりといへども。また能く、王法建立の大事を、發明せしものなり。されば人間の萬法は、まつたく人間界を成就するものにして。此の法を差別すれば、おのづから十善なり。この十善は、內外の相なく。外に在りては、王法となり。內に在りては、人々の業道となり。全く人の人間に在る姿なり。抑も色法に同別の分あり。故に受想行識も、これに應じて、別業身、同分身の別あり。別業身は、人々の色身これなり。同分身は、一の色法を以て、衆人の所依となすもの、是れなり。譬へば、衆人の一船に乘ずるが

別業身同分身

第五十段

三代の聖王は十善を以て天下を興す

ごとし。一船の安危、即ち衆人の安危にして。その安危の繫る所のもの、同分なれば。その受想行識も、また同分なるがごとし。是故に、一家は、一家の衆同分あり。一族は、一族の衆同分あり。一國は、一國の衆同分あり。一郷は、一郷の衆同分あり。一郡は、一郡の衆同分あり。其の一國の色受想行識は、なほ一人の色受想行識と、其の理異なることなし。

別業身の業道と、同分身の業道と、共に十善一致して、衆生界の福力を增長し。此の善根力によりて、人間の果報おのづから殊勝なり。この相應は、誠に緻密にして。影の身に副ふが如く、食の體を養ふが如く、須臾も相ひ離れざる者なり。古昔支那三代文明の世は、聖賢頻々出世して。文物を整へ、禮義を制し。所謂十善業道を以て、其の衆生界を、高く結搆して。下劣に至らしめず。周末に至り、異端蜂起し。種々の邪見を起し、漸く十善業道を失す。文物亂れ、禮義日を逐て廢頽し。終に今日の衰世に推移れり。是れ畢竟衆生心に、古今の異なるあるに非ずして。全く人間界の諸法建立の因緣を失せしによるなり。其間に生ずる者は、悉くこの錯亂の諸法を感覺受持し。想蘊を結び、行蘊を成就し。知らず識らず、

隋の煬帝は十惡を以て天下を亡ぼす

唐の太宗は十善を以て天下を化す

生れながら開化の人

怨恨の府

第五十一段　識蘊は衆生心の根本

惡道に沈み惡果を引くに至れり。就中隋の煬帝の、政を亂るにあたりてや、其の民多く、惡道に墮し。天下擧て、殺盜の風をなし。甚しきは、人を殺して食ふにいたれり。後ち唐の太宗起るに及びては、その民化して良民となり。數年を經ずして、天下の大辟の數を計るに、七百に滿たずといふ。其の事史傳に詳なり。然らば則ち、色受の人を化する、恰も水の方圓の器に隨ふが如し。近時歐洲諸國は、其の文物大に開化せりと云へり。思ふに、昔時蒙昧の歐人も。其の衆生心は、今人と異なる事なかるべし。是れ全く、聖賢德者なる者ありて、人間の諸法を建立成就し。漸次に、十善業道に相應せしめしによるなり。其の中に生ずる者は、少壯の時より、五蘊の結果を異にし。恰も生れのまゝにして開化の人の如し。唯惜むらくは、殺伐の風を尙み、殺生を輕んずるより。おのづから人情刻薄にして、貧賤者を、非道に處するが故に。多年の後は、此の人間界も、怨恨の府となり。爲めに瓦解せざれば、必ず土崩するに至るべし。是れ全く、敎法の眞實ならざるが爲めなり。

識蘊は、衆生心の根本なり。彼の色受想行は、此の識蘊に悉く含有執持せり。譬

眼識
耳識鼻識
舌
身識意識
末那識
阿賴耶識

第五十二段
前五識

ば好絹の、諸の色を染て、執持するがごとし。その色の青黃赤白に應じ、種々形象を現ずといへども。絹地を離れて、見るべき相なし。此の識を分別して、八識となす。一には眼識、二には耳識、三には鼻識、四には舌識、五には身識、六には意識、七には末那識、八には阿賴耶識是れなり。一に眼識とは、眼に色を見て、知覺するものの是れなり。二に耳識とは、耳に聲を聞て、知覺するもの是れなり。三に鼻識とは、鼻に香を嗅て、知覺するもの是れなり。四に舌識とは、口に味て嘗て、知覺するもの是れなり。五に身識とは、身に觸て、知覺するもの是れなり。六に意識とは、種々の法を分別して、相續不斷なるもの是れなり。七に末耶識とは、自他の分を知て、內外の法を現ずるもの是れなり。八に阿賴耶識とは、萬法を含藏す、故に藏識とも讖ず。凡夫の人は、第六識を認めて自心と思へり。其の末那賴耶の二識のごときは、不覺なるものなり。

心識の差別は、種々の名目ありといへども。大概は此の八識の差別にて、盡せるものなり。しかして眼耳鼻舌身を、前五識と名づく。此の前五識の因緣により、第八賴耶より熏起するものは、末那識なり。內は末那識により、外は前五識に

最後識根本識

阿賴耶識は無明の根本

醉生夢死

無明

よりて生ずるものを、意識となす。故に意識は、最後識なり。阿賴耶識は、根本識なり。この故に眞正學士の、眞理を究明せんと欲するものは。必ず先づ第八阿賴耶識を看破するを要す。この識は、所謂無明の根本にして。見思二惑の起るところなれば。恰も心賊の巣窟ともいふべきものなり。凡夫の人は、意識を以て、自己を立つるが故に。內は無明の冥府を扣へ、外は生滅の苦境に對し。その危急なること、比するに物なし。たま〳〵目の覺めたる時は、奇怪ながら、心もこゝに在ぬべし。一たび睡眠するときは、みづから自心の行くへを知らず。醉生夢死とは此の事なり。されば第八阿賴耶識は、いかなるものかといへば。方圓長短の相にもあらず。靑黃赤白の相にもあらず。全く自己の心性なり。この心性が、諸塵に著し。隔てられて、無明となる。無明とは、暗き義なり。即ち色塵に隔てられて、一寸先きは闇の夜となりたるものなり。無明といふものあるにあらず。たとへば大日輪の光明も、暗窟のうちには至らざるがごとし。この暗窟は、色塵を以て隔てたるものなり。我が心性の光明、一たび色塵に隔てらるゝときは。心中は全く暗窟となり。其の暗窟の中に在て、妄念するが故に。種々の畏怖疑惑を生じ。幽靈のごときもの、怪物のごときものも、出生するなり。此の阿賴耶識は、無明の根本にして。然かも如來藏なれば。一たび色塵の隔てが破るゝと、恰も天の岩戸の開きしと同じく。世界はその盡にして、暗きが明るくなるものなり。暗き時にも、種々の見を起して、種々の物を見るは。眼を閉ぢて、種々の物を想見するに同じく。其の明るくなりて、種々の物を見るは。眼を開きて、正眞の物を見ると同じく。暗中とは又別段のものなりと知るべし。

阿賴耶識即ち如來藏

第五十三段阿賴耶識は自己の心源禪定の修法

阿賴耶識は、自己の心源なるがゆゑに。學者の最も力を用ひて、看破すべきは勿論なり。そのこれを看破するには、禪定の力を以て。先づ色蘊を除き、受蘊を盡し、想蘊を破し、行蘊を斷じ。識蘊の中に在て、前際を求めず、後際を嫌はず。前念を追はず、後念を取らず。是れ何の子細ぞと、勇氣を鼓し。恰も大力士の、徒手にして敵城の鐵門を排するがごとく。一微塵も、畏怖心をおこして、辟易すべからず。蓋し識蘊の中は、朦朧たる虛空の如く。其の虛空の中に、おのづから明了たる一物あり。此の一物、すなはち賴耶識蘊にして。所謂無明の根本なり。故に此の一物を打破すれば、法界は洞然として、更に異相なし。至愚の人は、此の明了

明了たる一物

法界洞然

野狐禪

枯木死灰

以心傳心

第五十四段色身即ち阿賴耶識

自悟自得

たる一物を認めて、自己の心性と思ひ。凡夫の知らざる理源に達せりと、甚だ奇特の想を起す。これより種々奇怪の言を發し、他人を誘導して、悉くこの暗窟裡に墮落せしむ。誠に恐るべきことなり。今時佛法を修行するものゝ中にも、此の種類は、隨分澤山なり。古人はこれを、野狐の精靈なりと云へり。また此の一物を、打破するの修行力なきものは。種々に工夫して、無念無想の觀に入り。枯木死灰のごとくなりて、無明窟裡に、一生をおくるものもあるべし。是れらは却て、實頭のものなれば、他を害することは、鮮なしといへども。道を亡ぼすの罪は、野狐の精靈より深かるべし。是故に、此の大事は、所謂以心傳心なれば。明師を求めて、修行すべきことなり。

余が見所に約すれば、阿賴耶識なるものは、別物ならず。直に此の色身、即ち眼耳鼻舌身より、毛髮爪齒五臟六腑まで、是れ其の物なり。一切の凡夫は、妄念に隔てられ、他に一物あるがごとひ思ひ。外に求め、內に求めて、不可得の心を逐廻はすこと。恰も狂人の東奔西走して、自己身を尋ぬるものゝごとし。一朝自己は自己なりと覺悟すれば。此の自己は、內より出るにもあらず、外より來るにもあらず。東に得しにもあらず、西に求めしにもあらず。依然として自己なり。但此の色身は、四大和合の因緣によりて、現在するものなれば。四大の相を執て、自己と稱すべからざるは勿論なり。蓋し法器の差別を以て、觀察するときは。四大の相を離れて、自己の自己たる一面目あるべし。若し此の四大離散して、自己を失ふがごとく思ふものは。所謂凡夫著有の見にして。愚癡の至りといふべし、

不生不滅の體生滅の相

論曰。心生滅者。依如來藏故。有生滅心。所謂不生不滅。與生滅和合。非一非異。名爲阿黎耶識。起信論

と。此の心の不生不滅の體と、此の心の生滅の相と、和合して。阿賴耶識を成ずるといふ事なり。此の心の不生不滅の體とは、即ち衆生平等の心地なり。此の心の生滅の相とは、即ち衆生差別の現身なり。何となれば、此の心の生滅は、所謂色塵に由て、緣起する者にして。この色塵は、此の心の生滅の現相なればなり。此の心の生滅に相應して、色塵を緣起し。この色塵に相應して、種々の識分を緣起す。即ち眼識耳識鼻識舌識身識等なり。この前五識は、受に生じ。末那識は想に生じ。意識は行に生ず。然らば則ち、第八阿賴耶識は、色と和合するものにして。若し十分に色蘊を破る時節あらば、自己の色身はもとより、天地

如來藏に證入す

第五十五段　五蘊の譬喩

阿賴耶識より因緣して諸識を生ず

山河とともに打破し。脫然として、如來藏に證入することを得べし。その手際は、全く學者の力量いかんにあるのみ。

今五蘊の義を總說するに、一の譬喩を以てすべし。好絹に青黃赤白等の色を以て、種々の衆生の形を畫き。この絹地は、靈妙なる衆生平等の心地となし。青黃赤白等を以て、色塵となし。其の色の絹地に染むを、受となし。其の染受せし形を、想となし。其の形像に應じて、諸の衆生みづから働きを起すを、行となす。しかるに識は、此の心の不生不滅の體と、此の心の生滅の相と和合して。一に非ず異に非ざるがゆゑに。彼の絹地と、諸の色と和合せしものにして。其の色のある所、即ち此の心の生滅の處なれば。所謂色蘊の在る所は、即ち阿賴耶識の體なり。受蘊の在る所は、即ち眼耳鼻舌身識の生ずる所なり。想蘊の在る所は、即ち末那識の生ずる所なり。行蘊の在る所は、即ち意識の生ずる所なり。唯一の阿賴耶識より因緣して、諸の識分を生ぜり。所謂蘊は、蘊蓄積聚の義にして。彼の絹地に、久しく色像を留むるときは。其の絹地に薰染して、除くべからざるがごとし。乃至受想行識の宿習すること、恰も寫眞師の藥を以て、種々の形像を留むるに同じ。されば、絹地のいかんは、直に自己の心地なれば。人々みづから看破して。その本源を盡くすべし。然らざれば五蘊の次第を會得するも、徒らに分別の影事に滯り。眞實の義には、通達すべからず。蓋し衆生心の靈妙なるは、時々刻々の諸法を知覺して、深く蘊蓄積聚し。過去より現在に緣起し、現在より未來に輪廻し。出頭沒頭して、未來際を盡す。譬へば、田地に種々の種子を蒔き置くときは。その時節到來すると、種々の萌芽を生じ、花を著け實を結び其の實は地上に落ちて、又も發生するがごとく。衆生平等の心地に、種々の因果を結び、種々の衆生を生ずること、全く此の理におなじ。故曰、衆生之心。猶如大地。五穀五果。從大地生。如是心法。生世出世。善惡五趣。有學無學。獨覺菩薩。及於如來。と。菩薩如來は、解脫の相なり。一切衆生は、流轉の相なり。

衆生心の靈妙

第五十六段

佛道本論卷之三　名法供養

經曰。根塵同源。縛脫無二。識性虛妄。猶如空華。楞嚴經。と。正眼に看來れば。衆生平等の心地は、自他の分なしといへども。色塵の緣影によりて、五蘊を積聚し、三界を

六趣を一念頭上に分つ

欲界色界無色界天上人間修羅餓鬼畜生地獄

建立す。過去の業果を受けて、六趣を一念頭上に分ち。修羅に赴くものあり、餓鬼に墮するものあり。畜生に走るものあり、地獄に沈むものあり。譬へば行人の方に迷ふて、日夜に奔走するがごとし。人々目前の利路を求めて、來途の難易を知らず。諸佛これをかなしみ、慇懃に出離解脫の道を敎ふ。夫れ三界とは何ぞや、欲界、色界、無色界、これなり。六趣とは何ぞや、天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄、これなり。此の三界六道は、諸佛菩薩の解脫の道場にして。一切衆生の、生死輪廻の境なり。

第五十七段　胎生卵生濕生化生

六趣の業道を感ず

佛說の差排によるに、有情の生因を分別して、四種となす。一には胎生、二には卵生、三には濕生、四には化生、これなり。此の四生の中に於て、其の形軀は、千差萬別ありといへども。其の業道のごときは、必ず六趣なり。此の六趣の業道は。直に我が一念頭上に現じて、種々差別の境界を感覺す。天上の心より、これを見れば。天地山河、乃至禽獸草木までも、悉く天上界の果報にして、其の意に適順せざるものなし。人間の心より、これを見れば。まさしく人間界にして、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の五倫、儼然たり。故に身口意の三業は、必ず十善を以て、相應となす、

有財餓鬼無財餓鬼

第五十八段

修羅の心より、これを見れば。彼我相ひ敵し、怨仇相ひ集り、謂はゆる優勝劣敗、弱肉强食の境界にして。我れ彼れを害せざれば、彼れ必ず我れを害せり。此の修羅道は、天上、人間、及び畜生にも、時として緣起するものなり。餓鬼は、常に飲食に乏しく飢渴に苦めり。其の咽は針の如く、其の腹は大海の如し。其の中、有財餓鬼、無財餓鬼の別あり。畜生は、全く君臣なし、父子なし、夫婦なし、兄弟なし、朋友なし。唯に飲食を見て、相ひ爭ふといへり。地獄の變相は、其の理至て甚深なり。此の論明は、後章に讓るべし。斯くの如き六趣の業道は。全く過去の業因を引て、直に我が一念頭上に現ずるものなれば。眞正の學士は、みづから省み。仔細に觀察して、默識神通すべし。

余はみづから憶念するに。生を三界の中なる欲界に受けて、人間に在りといへども。動もすれば、修羅道の東西に彷徨して、餓鬼畜生道の南北に流轉せり。地獄の猛火は、常に身心を焦がし。衣中の寶珠も、燒けて灰となれり。されば法非法を論明すべき分際にあらずといへども。諸佛威神の建立するところ、死灰の再び燃るがごとく。更に諸法如實の理を略記すべし。經曰。說法不有亦不無以

法性は虚空界に周徧す

因縁故諸法生。無我無造無受者。善悪之業亦不亡。（維摩経）と。元來法體に邊際なきが故に、法性は等虚空界に周徧せり。佛に在ても、一分を增さず。衆生に在ても、一分を減ぜず。當所に生じて、有にあらず。當所に滅して、無にあらず。因により緣に應じて、種々の業相を現ずること。恰も空中の空華の如し。是故に即今目前の人間世界も。邪見を離れて、能々觀察する時は。他に眞實の理を求るまでもなく、其儘にして眞實なり。鳥の天を飛ぶも、眞實なれば。獸の地を奔るも、眞實なり。父母妻子も、眞實なれば。兄弟朋友も、眞實なり。火の燃るも、眞實なれば。水の流るゝも、眞實なり。山はおのづから高く。海はおのづから深し。たゞ人々自ら欺き、他を欺く所のみ。不眞實といふべし。

第五十九段

人の果報も千差萬別なり

天地の間に在て、横目縱鼻の一類を、ことさらに人間と名づく。此の人間の果報を、麁相に觀察すれば。彼れ此れ、一樣なるものゝごとしといへども。人々依報の異なるにより、おのづから苦樂悲歡も、一樣ならず。東家に哭するものあれば、西家に喜ぶものあり。南隣に悲むものあれば、北隣に樂むものありて。其の境界は、千差萬別なり。是故に、此の人間界も。人々の因緣に就て、仔細に觀察するときは。恰も枕を並べて寐ぬるものゝ、おのがまに〳〵、種々の夢を見るがごとく。此の人の夢は、彼の人知らず。彼の人の夢は、此の人知らず。各々己が見し夢を以て、人間の境界と思ひ。同業吸引して、同分を感じ。其の迷惑のうへに、又も一境界を建立せり。たま〳〵夢想のおなじからざるものあれば。大に惡み憤りて、讐敵となす。淺ましきことなれども、是れ全く、人々因果の異なるが故に苦樂悲歡を異にし。まさしく人の身體を具して、同じく人間世界に生れながら、其の人間の果報は、殆と名のみなり。されば世間に菩薩なるものありて。三界は大夢なることを覺悟し。一切の衆生界に入て、方便を設け濟度の道を開く。

三界大夢

大心者

菩薩は大心者と、名づく。所謂大人といふに同じ。其の心廣大にして、彼此衆生の苦樂を感じて、自己の苦樂となし。自己の依報を捨て、一切衆生を依報となす。故に衆生界の盡きぬ限りは、命終せずといへり。此の菩薩大人ありて、自他に通じ。以て衆生の因緣を正し。これが解脫を得せしむるなり。

第六十段

依報

依報とは、一切衆生の寄托して、生ずる者なり。譬へば、蠟燭の火の、蠟燭に依りて。現在するが如し。此衆生心は、本來生住變滅の四相なしと雖も。依報に、生住變

依報は衆生の生命

人々の依報は

生命の異なる者

滅の四相あるに由て。此衆生にも生住變滅あり。依報住すれば、此衆生も住し。依報變ずれば、此衆生も變じ。依報滅すれば、此衆生も滅す。是故に、一切の依報は、全く此衆生の生命なり。此生命の正しきは、依報の正しきに由るなり。此生命の邪なるは、依報の邪なるによるなり。即今人々の依報は、色身なり。此色身は、父母の血肉の餘分にして。即ち父母の賜なれば、固より正邪を論ずべきにあらずと雖も。此の身體を、相續するの法も、また依報にして。所謂衣食住の三は、人生の大本ともいふべし。是故に、人々みづから恃て、人間界に生存するの道も種々にして。威權を恃むものあり、財寶を恃むものあり。藝術を恃むものあり、文學を恃むものもありて。其依報の種々なることは、現在世界の人事の種々なるを以て、知ることを得べし。是れ皆所謂生命の異なるものにして。其の異なるうちに就て、人々の志向、即ち正報に正邪あるが故に。其の依報にも、正邪あり て、千差萬別なり。たとへば、財寶を恃みて商賈するは、一樣の依報に似たりといへども。其の人品に應じて、正邪の分は、幾種にも分かれ。大富長者の依報は正しく、小賈郎の依報は邪なりとは、一概に判斷すべからず。要を採りてこれをい

宿世の因緣依報を成就す

地獄の淬

地獄の變相

へば、宿世の因緣によりて、人々の依報を成就し。其のうち十善全きものは、必ず依報も正しく。境界も清淨なり。其の宿習の邪惡なるものは、依報もおのづから不潔にして。甚だ脆弱なるものなり。其の下劣なるものゝ如きは、恃むべき依報もなく。日々夜々時々刻々に生ずるが如く、死するがごとく。欲界の中に、出頭沒頭して。果ては地獄の淬となり。日月の光も、慘怛として。草木の花も愁を帶び。鳥蟲の聲も、悲みを催すに至るといへり。かゝる薄福の衆生はしばらく置く、大槃色身の亡るときは、云ふまでもなく、威權あるものは、其の威權を失ひ。財寶あるものは、其の財寶を失ひ。所謂想蘊の一時に破るゝときは、即ち命終の時にして。宿惡のものは、必ず地獄に墮すといふ。總じて衆生の命根は、依報なるにより。其の依報に緣じて、心念も生じ。有無得失を臆度し、禍福利害を情量するものなれば。一旦所依を失するときは、忽ち心念の攀緣する所なきがゆゑに、深く無明暗窟の中に墮いり。過去を悔み、未來を歎く。その時彼の藏識は、淨玻璃の鏡と開け。自己の法身は、閻王と現じて。其の是非善惡を差排して、毫釐も假借せず。誠に以て畏るべきことなり。國王の刑罰や、父母の呵責は、逃

るべき時節もあるべし。此の自己法身の慧光によりて、苦惱を受くるは。假令蘇張の辯ありて、孟賁の勇あるも、免かるゝこと能はず。斯くいへば、凡夫の癖に。地獄といふも、此の世にあり。極樂といふも、此の世にありと、思惟するものもあるべし。是れ甚だ淺はかなる見所なり。地獄といふも、墮獄すれば、其のものゝ此の世なり。いまだ墮獄せざれども、墮獄の因緣をなすものゝ爲めには、來世なり。此世來世といふは。無常轉變の上へに、立てたる假名のみ。看よ人間も一度に生れ、一度に死するものにあらず。死し去るものもあれば、生れ來るものもあり。樂むものもあれば、苦むものもありて。一日一時の間も、千差萬別なり。此世此世とのみ見て、無常轉變の上に、常見を立つるは。誠に淺ましき見惑と云ふべし。

此世來世は無常轉變の假名

第六十一段　衆生無盡

熟々阿賴耶識の理を觀察するに、此の識は、全く衆生心の當體なれば。此の心性の斷滅せざる限りは、衆生界の盡る期あるべかちず。彼の依報の如きは、誠に無常轉變なるものにして。一刹那の間も常住せず。人の色身のごときは、一日に三度も飲食して。これを相續せざれば、保つこと能はず。若し此の色身、壞滅に歸するときは。自己善惡の因果も、絶無に歸すると云はゞ。昨日の因緣は、今日の果報を來さずして、大小便利と倶に、壞滅せりと云ふべし。金錢を非道に取集めて、これを破產せしときは。其の罪科苦報も、彼れ破產せし時に、金錢と共に散亂せりと云ふべし。是れ啻に此の理なきのみならず。却て破產せし後は、其の罪科苦報も、一しほ深重なり。されば此の衆生心の斷絶せざる以上は、此の心を以て、因緣せし果報は。假令色身は壞滅するとも、自己の業力によりて。またも種々の依報を成就して、相續すべき道理なり。若し夫れ、此の心も斷滅すべしと云はゞ。是れ即ち、一切衆生界の斷滅にして。此の理は毛頭もあるべきことにあらず。是故に、人の善惡の業因は、恰も虛空に印せしがごとく。此の虛空界の存する限りは。此の衆生の因果は、彼の衆生と現じ。彼の衆生の因果は、此の衆生と現じ。自他平等の一法界中に、彼れとなり、此れとなり。轉變輪廻して、窮極なし。經曰。一切諸法。以意生形。と。是れ等の妙語を、能々工夫すべし。阿賴耶識に、善意の種子を含藏し。諸緣に觸れて、意識に現はれ。其の前念を緣として、後念を生じ。念々相續して、種々の思惟分別を生じ。以て自己の業道を

因果不滅

因果相續

以意生形

第六十二段

意生身

善根力

夢中の因果は衆生の實相

第六十三段衆生内外の分

決定せり。この決定の一念を、意生身と名づく。此の意生身の業道を以て、種々の形を感じ。六趣に輪廻して、三界に昇沈す。就中宿善あるものは、其の善根力によりて。自己本有の智慧を失せず。故に大邪見を起して、三惡道に沈淪するとなく。常に天上人間の果報を受くと云ふ。されば一切衆生の至寶とも稱すべきものは所謂善根力なり。此の善根力は、全く父母師長の教誡に發するものにして。人間に生ずるものは、必ず人間の宿善あり。天上に生ずるものは、必ず天上の宿善ありて。其宿善に相應して、自己本有の智慧を發し。貪瞋痴等の煩惱中にありて、事の是非を判ち、道の善惡を知り。未來輪廻の地を觀見して、覺悟する所あり。故に其の意生身は、常に清淨にして。身口意の三業も、次第に十善を增長せり。經曰。善人行善從樂入樂。從明入明。惡人行惡從苦入苦。從冥入冥。無量壽經と。三界は大夢なりといへども、夢中の因果は、即ち衆生の實相なれば。人々みづから、自己の意生身を省察するのみならず。他の意生身をも觀察して、人間の善根を培養すべきことなり。

衆生に内外の分あり。我が外境界に生滅するものは。外分の衆生なり。我が

互に父母となり男女となる

内外の衆生互に因緣す

本分の意生身

内境界に生滅するものは。内分の衆生なり。此の内分の衆生は、能く外分の衆生を、昇沈輪廻せしむ。此の外分の衆生は、能く内分の衆生を、昇沈輪廻せしむ。此の内外の衆生は。無始以來相ひ因緣して。互に父母となり、互に男女となり、善惡の二道に往來して。窮極あることなし。故に經曰。衆生恩者。即無始來。一切衆生。輪轉五道。經百千劫。於多生中。互爲父母。以互爲父母故。一切男子。即是慈父。一切女人。即是悲母。昔生々中。有大悲故。猶如現在父母之恩。等無差別。心地觀經と。正眼に看來れば、此の内外の衆生は、形と影とのごとく。外分の衆生は、内分の衆生を因緣し。内分の衆生は、外分の衆生を因緣し。相ひ共に、因緣の父母となり。所謂衆生平等の心地に因緣して。深く阿賴耶識の中に種子を下し。胎卵濕化、其の分に應じて生出す。其の生出するときは、各々みづから、忽然として生ぜしがごとく思ひ。曾て宿善宿惡の餘報なることを知らず。たま〳〵天上人間の果報を受るも、その餘報盡るときは。又も三惡道に墮して、苦果苦報を免るゝこと能はず。是故に、眞正の學士にして、かゝる衆生生滅の因緣を觀察し。自己本分の意生身を、現ぜんと欲するものは。所謂分別の影事に欺かるゝことなく、阿賴耶識

第六十四段

三種の身

不生の生
不滅の滅

を打破して。直に本來の面目を、看破することを勉むべし。

阿賴耶識を打破して、五蘊の窠窟を出脱するときは。いかなる面目なるかは、實踐修行の人にして、自覺自悟すべしといへども。いま試に余が見所に約して、これを云へば。別に異相あるべきものにあらず。彼れ三世諸佛の法身も、一切衆生の心地より因緣して、生ずるものなれば。横目縱鼻のまゝにして。迷惑するものは、迷惑するものなり。覺悟するものは、覺悟するものなり。其の覺悟の上には、まさしく一心に、佛の三種の身を具足せり。何をか三種の身と云ふ。一には自性身、法身二には受用身、報身三には變化身、應身是れなり。自性身とは、人々具有せる自性を指すものにして。其の生ずるときも、自性は不生なり。其の滅するときにも、自性は不滅なり。不滅なるが故に、無にあらず。不生なるが故に、有にあらず。有にあらず、無にあらざるが故に。內外中間の相を離れて、直に人々の心性なり。人々の心性なるが故に、我が生は、不生の生なり。我が滅は、不滅の滅なり。或が生滅は、即ち不生不滅なるが故に。横目縱鼻のまゝにして生死解脫の相なり。譬へば火の薪によりて生滅ありといへども。其の火性より、

悲智の二德

因緣に應じて自在に變現す

大慈德大智德

大慈德

第六十五段

これを見れば。其の生滅は、生滅のまゝにして。其の火性に出入增減あるのゝごときなきがごとし。其の出入增減あるものゝごときは、全く隨緣の相にして、衆生の見分なり。さて此の自性に、悲智の二德を具して。各々その因緣に相應して、受用するが故に。これを受用身と名づく。眼に色を見るが如く、耳に聲を聞くがごとく、手に携へ、足に運ぶがごとく。人々みづから自性の德を、受用するを云ふなり。其の變化身なるものは、種々の因緣に相應して。天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄に身を現じ。一切衆生の苦惱を救て、厭倦休息なし。この故に、一心に三種の身を現ずといへども。畢竟自己本來の面目の外に、異相あるにあらざれば。能々觀察して、佛道の大意を了解すべし。經曰。等唯一佛實。具三種身。一自性身。二受用身。三變化身。第一佛身。有大斷德二空所顯。一切諸佛。悉皆平等。第二佛身。有大智德眞常無漏。一切諸佛。悉皆同意。第三佛身。有大恩德。定通變現。一切諸佛。悉皆同事。心地觀經と。

自性身の大斷德とは、有無を斷じ、生滅を斷じ、迷悟の分際、生佛の假名をも斷じ盡くして。眞實々際なるを云ふなり。抑も一切の諸法は、自性を離れざるものな

れば。其の諸法の相を以て、其の自性を分別するは。恰も毛髮爪齒、眼耳鼻舌、筋骨皮肉乃至五臟六腑の一部分を以て、自己の全體を認めんと欲するがごとく。終に其の全體を覺悟すること能はざるのみならず。其の名相の愈々微細なるは、愈々一身の迷を生じて。到底落著するの時節はなかるべし。若し自己は自己なりと覺悟すれば。眼耳鼻舌、五臟六腑等の一部分を以て、一身となさゞるのみならず。是れ一身の相なることを知り。此の相を離れて、別に一身をも求めざるべし。起信論曰。所謂心性。不生不滅。一切諸法。唯依妄念而有差別。若離心念。則無一切境界之相。是故一切法。從本已來。離言說相。離名字相。離心緣相。畢竟平等。無有變異。不可破壞。唯是一心。故名眞如。以一切言說。假名無實。但隨妄念。不可得故。言眞如者。亦無有相。謂言說之極。因言遣言。此眞如體。無有可遣。以一切法。悉皆眞故。亦無可立。以一切法。皆同如故。當知一切法。不可說不可念故。名爲眞如。と。是故に自性に迷て、妄に有無生死を見るを、凡夫と云ふ。自性を悟て、有無生死の中に在て、異念を生ぜざるを、佛と云ふなり。佛は覺なり、さとると云ふことなり。何をさとるぞといへば、みづから自性を覺悟するを云ふなり。此の外に、別の仔細あらば。佛道

眞如

凡夫

佛

にあらず、悉く魔說と知るべし。

第六十六段　自受用他受用

受用身に、二種の相を差別せり。一には自受用、二には他受用、これなり。自受用とは、人々みづから受用するを云ふなり。他受用とは、他の受用も、自性を隔てざるが故に、他は他に任せて、受用するを云ふなり。此の自受用他受用の義は。一分の人我見あるものは、其の眞實を、開悟すること能はず。蓋し自性本來、自他の分なきが故に。人々の受用するまゝが、直に受用身にして。其の自他の相を立つるは、全く賓主の位なれば。我が他受用身は、即ち他の自受用身にして。他の他受用身は、直に我が自受用身なり。此の賓主互換の妙處は、實踐修行して知るべし。無碍なる所以なり。

第六十七段　賓主互換

受用身の大智德とは、四智を成就するを云ふなり。何をか四智と云ふ。一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智、是れなり。實踐修行の人ありて、阿賴耶識を打破すれば。此の識忽ち轉じて、大圓鏡智となる。菅て論明せしがごとく、阿賴耶識は、所謂無明の根本にして、然かも如來藏なれば。一たび色塵の隔てが破るゝと、恰も天の岩戸の開きしと同じく。世界は其の儘に

大圓鏡智
平等性智
妙觀察智
成所作智
大圓鏡智は阿賴耶識の轉ずる者

異熟識とは阿賴耶識の異名

大智

大悲

して、暗きが明るくなる者なり。故に經曰、大圓鏡智、轉異熟識得此智慧如大圓鏡、現諸色像。如是如來鏡智之中、能現衆生諸善惡業。以是因緣、此智名爲大圓鏡智。依大悲故、恆緣衆生。依大智故、常如法性、覆觀眞俗、無有間斷。常能執持無漏根身、一切功德。爲所依止心地觀經と。異熟識とは、阿賴耶識の異名なり。彼の阿賴耶識は、種々の因緣によりて。宿善宿惡を含藏して、人々異熟するが故に、此の名あり。大智とは、明鏡の明體にして。大悲とは、其の明鏡中に、萬物の色像を現じて更に隔てなきを云ふなり。夫れ如來鏡智の中には、必ず一切の衆生を現じて、隔てなきが故に。

大日輪の光明

大悲の心は、恰も自己の頭目を救ふがごとく、法爾として生ずるものなり。そも〳〵如來鏡智の、一切衆生界を照明して。其の差別の業相を現ずること。大日輪の、光明の。盡十方虛空界に彌淪して、一切差別の形色を照明すと。其の理は、毫も異なることなし。蓋し彼の日輪の光明は、必ず所明に顯はれ。其所明の器を現じて、隱すところなしといへども。却て光明の體相は、肉眼の所見にあらざるが故に。晴夜に首を仰て、日輪の光明を虛空中に見ることあたはず。若し月輪東方に生ずるときは、此の月輪、即ち日輪の所明にして。其の體相甚だ分明な

月輪即ち日輪の所明

自己の所明に迷ふ

り。乃至一器一物を照明するも。必ず其の一器一物の、差別の體相を現じて。毫釐も相違せず。されば、如來の鏡智も。一切衆生の差別の因緣を照明して。甚だ分明なりといへども。衆生みづから、自己の所明に迷ふて、妄分別を生じ。眞と聞けば、眞に迷ひ。道と聞けば、道に迷ひ。種々の見惑を起し、所謂自己心念の光影は、却て自己の心性を障へ味まして。恰も暗中に狂奔するがごとし。若し夫れ、見惑を斷じて、直に此の世界を看得すれば。此の世界は、全く如來鏡智の上に現じて。自他の因果は、即今分明なり。男子と照し出され、女子は、女子と照し出され。假令いかなる事情あるとも、男子は、男子にして、女子と思はんと欲するも、得ざるなり。女子にして、男子とおもはんと欲するも得ざるなり。父母は父母と照し出され。夫婦は、夫婦と照しいだされ。子孫は、子孫と照し出れ。兄弟朋友は、兄弟朋友と照しいだされ。其の中、微細の因緣も、分明にして。箇々差別の道も、おのづから現前たり。此の因緣を以て、大智の中に、大悲を發し。大悲の中に、大智を現じ。親となり、子となり、夫婦兄弟朋友となり。其の所應に隨ひ、變現自在なり。此の所應に隨て、變現自在なるを、變化身と云ふ。故に曰、第三

自他の因果は即今分明なり

變現自在

第六十八段平等性智は末那識の轉ずる者

佛身。有大恩德。定通變現。一切諸佛。悉皆同事。と。

平等性智とは、想蘊盡きて、末那識の轉ずるものなり。彼の想蘊は、衆生平等の心地に、人我の境界を立つるものなれば。所謂阿賴耶識の轉じて、大圓鏡智となるときは。おのづから末那識をも轉じて、自他の相を破し、自他平等の我性に通達す。經曰。平等性智。轉我見識。得此智慧。是以能證自他平等無二我性。如是名爲平等性智。心地觀經と。

我見識とは末那識の異名

我見識とは、末那識の異名なり。末那識は、想蘊の中に起るものなれば。おのづから我相を執て、しばらくも忘失せず。夢中にも、我相我見あるがごときものなり。

第六十九段妙觀察智は意識の轉ずる者とは意識の分別識の異名

妙觀察智とは、意識の轉するものなり。經曰。妙觀察智。轉分別識。得此智慧。能觀諸法。自相共相。於衆會前。說諸妙法。能令衆生得不退轉。以是名爲妙觀察智。心地觀經と。分別識とは、意識の異名なり。意識は、能く內外の諸法を分別するが故に、此名あり。

第七十段成所作智は前五識の轉ずる者

成所作智とは、前五識、卽ち眼識耳識鼻識舌識身識を轉ずるものなり。經曰。成所作智。轉五種識。得此智慧。能現一切種々化身。令諸衆生成熟善業。以是因緣。名爲成所作智。心地觀經と。

第七十一段

大悲三昧中の消息

斯くのごとき四智は、人々自受用身の上に現じて。自他の境界を照明し、一切の諸法を覺悟するが故に。假令、天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄、の六趣に出頭沒頭するも。其の六趣は、當所に解脫の道場にして。種々善惡の業相は、全く我が大悲三昧中の消息にあらざるはなし。この故に、迷惑すれば、八識の分際に、苦果苦報を受け。覺悟すれば、八識を轉じて四智を成じ。受用不盡の妙境界を證得す。

通身一條の生鐵

月庵和尙の法語に曰く、夫れ心迷へば、佛卽ち衆生となる。心悟れば、衆生卽ち佛となる。是故に佛と衆生と、全く別なし。唯是れ迷へると、悟れるとの見異なるなり。迷悟の異見なければ、心にもあらず、佛にもあらず、物にもあらず。一切の道理を離れて、通身一條の生鐵のごとし。出生入死、唯是れ暫時緣に隨ふのみなり。去來なく、蹤跡なく、所依なく、所住なし。鏡の像に對するがごとく、谷の響を受るに似たり。內に主宰なく、外に境緣なし。地獄天堂、心に任せて遊戲し。苦樂逆順、處に隨て自在なり。何の生死の懼るべきかあらん。何の禪道の求むべきかあらん。大千沙界は、海中の漚。一切の聖賢は、電拂のごとし。這裏に至て、手を那邊千聖の外に撒し、步を今時塵勞の中に廻らして。道理なき處に於て、道

能事了る底の大丈夫の漢

心源いかん

理を立し。是非なき中に於て、是非を辨ず。是れ世間迷倒の凡夫の、實有の執見にあらず。唯無心の處に於て、一切の事を成敗す。是れを世間出世間、能事了る底の、大丈夫の漢と云ふ。佛祖終に他の落處を知らす。天魔外道、爭てか渠れが蹤跡を窺はん。汝若し恁麼に承當し去らば。曠劫の無明煩惱は、一念の中に、悉く消滅して。七通八達、大解脫、大安樂の人となるべし。それ尙然らずんば姑く歩を退けて。己に就きて、我が此の心源いかんと、究め看るべし。唯坐禪の時のみに非ず。十二時中、行住坐臥、見聞覺知、着衣喫飯、乃至一切の事を作す處に於て。急々に眼を着けて、直に見直に究めよ。工夫純熟せば、必ず大に透脫するの時節あるべし。疑ふべからず、と。

第七十二段

箇々妙用を現ず

正眼に看來れば、如來鏡智の中には。迷悟の分際、生佛の假名なし。たゞ見る此の世間の諸法は、全く因果實相にして、箇々妙用を現じ。人の親となりては、おのづから親たるの心を生じ。人の子となりては、おのづから子たるの心を生じ。乃至夫婦兄弟朋友等に在ては、おのづから其の差別の因緣に相應して其の心を生ず。譬へば、明鏡の種々の色像を現じて。美惡妍媸、一も誤らざるがごとし。

今時佛法者流

其の尊きものは、尊き因緣にして、實相なり。其の卑きものは、卑き因緣にして、實相なり。人我一體、尊卑一如の中に、千差萬別ありて。業を分ち、職を守り。各々十善業道の中に往來して、應分に內外の衆生を濟度せり。故に經曰、世間資生產業、皆與實相不相違背。（法華經）と。是故に、假令諸佛の敎語たるも。若し因果を撥無し、世間を破壞するの言句は。悉く魔說にして、決して信從すべからず。況や內我、外我、惡平等、惡差別、等の邪見をもつて、言句を立て、義理を求めて。世間を惑亂するものをや。然りと雖も、斯くの如きの見惑は、獨り外道の所立のみならず。今時佛法者流にも、往々此徒ありて。佛と云へば、靑雲の上に在るが如く唱へ。法といへば、難行苦行とのみ心得て、徒に高遠に取廻し、不思議に托して。終に黃面老子の面目を失はしむるのみならず。人々の自性を昧まし、相率て外魔の眷屬となれり。豈浩歎の至りならずや。

第七十三段

菩薩大人の志願ある者

如來鏡智のうちに、種々の妄想を建立し。其の妄想中に、我相を執て、自他の境界を構造するは。誠に甲斐なきものなりといへども。是れ實に一切衆生の當然なれば、詮方なき次第なり。是故に、所謂菩薩大人の志願あるものは。能々此の

第七十四段
現成の諸法も亦不可得

一切諸法從因緣生

眞理を發明し、彼の五蘊の因果を審かにし。一切衆生をして、程よく此の人間世界に、生れ出るやうに、因緣を與ふべきは勿論なり。

父母の庭訓、師長の敎導は、實に五蘊の原因をなすものなれば。最以て大切の事なりとす。元來此の心不可得にして、內外中間の相を離れたるものなれば。現成の諸法も、また不可得なり。眼ありといへども、色に對せざれば、眼の妙なし。色に五彩ありて、其の所見に隨て、心も移れり。耳ありといへども、聲に對せざれば、耳の妙なし。聲に律呂淸濁ありて、其の所聞に隨て、心も移れり。鼻もみづから鼻の妙を知らず。舌もみづから舌の妙を知らず。香味に對して、其の好惡をなす。此の身ありといへども、境に觸れざれば、此の身の妙を知らず。此の心ありといへども、是非、善惡、邪正、得失、を念ぜざれば、此の心の妙を知らず。これを要するに、一切諸法、從因緣生ずるものなれば、是れを不可得といふなり。されば內外中間の相を離れて。然かも內外中間の諸法は、直に一切衆生の因果なり。故に今日の人間は、今日の人間の業果にして。天より降下するにもあらず、地より湧出するにもあらず。また一衆生の建立にもあらず。要を採てこれを言はゞ、

衆緣和合して世界を建立す

第七十五段
人間世界の大菩薩

父母恩衆生恩國王恩三寶恩

父有慈恩母有悲恩

衆緣和合して、此の人間界を建立せしものなれば。恰も、色像の明鏡に現ずるがごとく。もとより其の實體實性のあるべき道理なし。外に主宰あるにあらず、內に主宰あるにあらず。唯に自他業相の影に使役せられて、知らず識らず善惡の二道に步を運ぶのみ。此れ等の因緣を、能々觀察すれば、おのづから邪見を離れて、自他の爲めに、福力を增長するの手段もあるべし。

夫れ國には國王あり、家には父母あり。國王は、我が同分の善果報を成就するものなれば。全く人間世界の、大菩薩なり。父母は、其の血肉を分つて、我が身體を成就せしのみならず。我が爲めに、宿善を植ゑて、我が五蘊のうちに、深く因緣せり。今日人と生れ來れる善果報は。ひとつとして、我が父母の、我が爲めに因緣せし果報にあらざるはなし。故に經曰。世間之恩。有其四種。一父母恩。二衆生恩。三國王恩。四三寶恩。如是四恩。一切衆生。平等荷負。（心地觀經）と。就中父母の恩を說くこと、尤も深切なり。曰。父有慈恩。母有悲恩。母悲恩者。若我住世。於一劫中。說不能盡。（中略）世間慈母。念子無比。恩及未形。始自受胎。經於十月。行住坐臥。受諸苦惱。非口所宣。雖得欲樂飲食衣服。而不生愛。憂念之心。恆無休息。但自思惟。將欲生產。漸受諸苦。晝夜愁惱。

甘露泉

子即墮地獄餓鬼畜生

尊貴天人種類

若產難時。如百千刃。競來屠割。遂致無常。若無苦惱。諸親眷屬。喜樂無盡。猶如貧女。得如意珠。其子發聲。如聞音樂。以母胷臆。而爲寢處。左右膝上。常爲遊戲。於胷臆中。出甘露泉。長養之恩。彌於普天。憐愍之德。廣大無比。世間所高。莫過山岳。悲母之恩。逾於須彌。世間之重。大地爲先。悲母之恩。亦過於彼。若有男女。背恩不順。令其父母。生怨念心。母發惡言。子即墮地獄。或在地獄餓鬼畜生。世間之疾。莫過猛風。怨念之徵。復速於彼。一切如來。金剛天等。及五通僊。不能救護。若善男子。善女人。依悲母教。承順無違。諸天護念。福樂無盡。如是男女。即名尊貴天人種類。或是菩薩。爲度衆生。現爲男女。饒益父母。若善男子。善女人。爲報母恩。經於一劫。每日三時。割自身肉。以養父母。而未能報。一日之恩。所以者何。一切男女。處于胎中。口吮乳根。飲噉母血。及出胎已。幼稚之前。所飲母乳。百八十斛。母得上味。皆與其子。珍妙衣服。亦復如是。愚癡鄙陋。情愛無二。普有女人。遠遊他國。抱所生子。渡殑伽河。其水暴漲。力不能前。愛念不捨。母子俱沒。以是慈心善根力故。即得上生色究竟天。作大梵王。以是因緣。母有十德。一名大地。於母胎中。爲所依故。二名能生。經歷衆苦。而能生故。三名能正。恒以母手。理五根故。四名養育。隨四時宜。能長養故。五名智者。能以方便。生智慧故。六名莊嚴。以妙瓔珞。而嚴飾故。七名安穩。以母懷抱。爲止息故。八名教授。善巧

母有十德

大地　能生
能生　養育
智者　莊嚴
安穩　教授
教誡　興業

第七十六段　衆生恩
有無を通じ苦厄を救ふ

第七十七段　國王恩
福德最勝の因緣ある者

方便導引。子故。九名教誡。以善言辭。離衆惡故。十名興業。能以家業。付囑子故。善男子。於諸世間。何者最富。何者最貧。悲母在堂。名之爲富。悲母不在。名之爲貧。悲母在時。名爲日中。悲母死時。名爲日沒。悲母在時。名爲月明。悲母亡時。名爲闇夜。是故汝等。勤加修習。孝養父母。若大供佛。福等無異。應當如是報父母恩。心地觀經と。

衆生の恩とは、生々世々、互に父母となり、互に男女となりて、大恩あるのみならず。現在の人間にありても。有無を通じ、苦厄を救ひ。其の功德は、固より廣大無邊なり。其の要は、前章に於て、已に說明し了れり。

國王の恩とは、大國小國の分際を問はず。其の一國內の人民をして、人間の果報を失せざらしむるをいふなり。抑も人類相ひ集て、其の因緣を同くするときは、必ず衆同分をなすものなり。此の衆同分の中に於て、福德最勝の因緣あるもの、緣起して、此の同分の主宰となり。能く國內人民の善惡の作業を支配して、人間たるの福德を保たしむ。乃至大小有土の侯伯、若しくは、地方の牧者等に至るまで。其の配下の人民を愛護するは、全く國王の德に準ずるといへり。船中には、船主あり。會社には、會主あり。其の主たるものは、各々自己の我愛我見を捨て

大人の務

三聚戒饒益有情戒攝善法戒攝律儀戒

三聚の義

丶、其の同分の福利をたもつ。皆な是れ大人の務めにして。人王にあらずといへども、おのづから其のうちの王德をたもつものと云ふ。總じて王德は、過去に菩薩の三聚戒をたもちし餘報なりといへり。三聚戒とは、一には、一切の有情を饒益するの戒。二には、一切の善法を修攝するの戒。三には、一切の律儀を修攝するの戒、これなり。顧ふに有情を饒益するの德なければ。眷屬離散して、王德をたもつべからず。善法を修攝するの德なければ。福力盡きて、王德をたもつべからず。律儀を戒攝するの德なければ。人道亂れて王德をたもつべからず。是故に王德は、必ず菩薩の三聚戒より、生ずるものなりと云へり。聚とは、其德を聚集するの義なり。これを要するに、十善業道に過ぎずといへども。他の苦惱を、解脫せしめんことを志願する、大人の戒行なり。經中に說く、此の三聚戒を、下々品に持つも、琰魔王となり。地獄の中に處して、常に自在なりと。是れ全く有情を饒益するの心は。おのづから有情に主宰たるの因緣なり。能々工夫すべきことなり。諸法は必ず因緣を以て生ず。ゆゑに因緣なくては、地獄の琰魔王たらんことを願ふも、能はざるべし。況や其の上たるものをや。古人の、盜跖に

盜跖に王仁義あり

第七十八段

八大恐怖

福德王非福主

天王

正法王十德能照　壯嚴

も仁義ありといひしは、虛言にあらざるなり。

經曰。國王思者。福德最勝。雖生人間。得自在故。三十三天諸天子等。恒與其力。常護持故。於其國界。山河大地盡大海際。屬于國王。一人福德。勝過一切衆生福故。是大聖王。以正法化。能使衆生悉皆安樂。譬如世間一切堂殿。柱爲根本。人民豐樂。王爲根本。依王有故。亦如梵王能生萬物。聖王能生治國之法。利衆生故。如日天子能照世間。聖王亦能觀察天下。人安樂故。王失正治。人無所依。若以正化。八大恐怖。不入其國。所謂他國侵逼。自界叛逆。惡鬼疾病。國土飢饉。非時風雨。過時風雨。日月薄蝕。星宿變怪。人王正化。利益人民。如是八難。不能侵故。譬如長者唯有一子。愛念無比。憐愍饒益。常與安樂。晝夜不捨。國大聖王。亦復如是。等示群生如同一子。擁護之心。晝夜無捨。如是人王。令修十善名福德王。若不令修名非福主。所以者何。若王國內。一人修善。其所作福。皆爲七分。造善之人。得其五分。於彼國王。常獲二分。善因王修。同福利故。造十惡業。亦復如是。同其事故。一切國內。田地園林。所生之物。皆爲七分。亦復如是。若有人王。成就正見。如法化世。名爲天王。以天善法。化世間故。諸天善神。及護世王。常來加護。守王宮故。雖處人間。修行天業。賞罰之心。無偏黨故。一切聖王法皆如是。如是聖王。名正法王。以是因緣。成就十德。一名能照。以智

與樂　伏怨　離怖　住賢　法本　持世　業主　人主　我之聖王

第七十九段　三寶恩佛寶法寶僧寶

悲眼照世間故。二名莊嚴。以大福智莊嚴國故。三名與樂。以大安樂與人民故。四名伏怨。一切怨敵自然伏故。五名離怖。能卻八難離恐怖故。六名住賢。集諸賢人評國事故。七名法本。萬姓安住依國王故。八名持世。以天王法持世間故。九名業主。善惡諸業屬國王故。十名人主。一切人民王爲主故。一切國王。以先世福成就如是十種勝德大梵天王及忉利天。常助人王受勝妙樂。諸羅刹王及諸神等。雖不現身潛來衛護王及眷屬。王見人民造諸不善不能制止。諸天神等悉皆遠離。若見修善歡喜讚歎。盡皆唱言我之聖王。龍天喜悅。澍甘露雨。五穀成熟。人民豐樂。若不親近諸惡人等。普利世間。咸從正化。如意寶珠。必現王國。於王隣國。咸來飯服。人與非人無不稱歎。若有惡人。於王國內而生逆心。於須臾頃。如是之人。福自衰滅。命終當墮地獄之中。經歷畜生。備受諸苦。所以者何。由於聖王不知恩故。起諸惡逆。得如是報。若有人民能行善心。敬輔仁王。尊重如佛。是人現世安穩豐樂。有所願求無不稱心。所以者何。一切國王。於過去時。曾受如來清淨禁戒。常爲人王。安穩快樂。以是因緣。逆順果報。皆如響應。聖王恩德。廣大如是。觀心地經と。

三寶の恩とは、一には佛寶、前章に於てこれを論明す、二には法寶三には僧寶、これなり。經曰。三寶恩者。名不思議利益衆生。無有休息。是諸佛身。眞善無漏。無數大劫。修因所證。三有業果。

住持の三寶

同體の三寶　別相の三寶

永盡無餘。功德寶山。巍巍無比。一切有情所不能知。福德甚深。猶如大海。智慧無礙。等於虛空。神通變化。充滿世間。光明徧照十方三世。一切衆生。煩惱業障。都不覺知。沈淪苦海。生死無窮。三寶出世。作大船師。能截愛流。超昇彼岸。諸有智者。悉皆瞻仰。心地觀經と。此の三寶に、同體の三寶、別相の三寶、住持の三寶の差別ありといへども。要するに、自己心性の外に、三寶を立つるは、外道の見にして、眞實の三寶に非ず。其住持の三寶とは、此の世間に、住持流布するの義なり。即ち佛寶は、木佛金佛等を云ふ、法寶は、黃卷赤軸等を云ふ、僧寶は、比丘比丘尼等を云ふ。其の同體別相は、全く總相別相なり。二乘凡夫の差別見に相應して、顯はるゝ者なり。同體と云へば、自己の頭腦中に在るが如く思ひ。別相と云へば、別に不可思議の境界ありて、佛菩薩がかり寄りつどひ、勝妙の果報を受るが如く思ひ。內外我他の見を離るゝこと能はざる者は、誠に甲斐なきことなり。されば別相の三寶を以て、內見を破し。同體の三寶を以て、外見を破して。眞實の三寶に歸することを勉むべし。十善法語、不邪見戒の段に曰く、三寶と云ふは。法性の、世の福緣に隨て、顯はるゝ姿なり。法性の本來明了なる所より、佛寶と顯はる。法性の本來清淨なる所より、法寶と

能歸の心即ち所歸の佛法僧

第八十段本有の德本有の理本有の行教法理法行法果法菩薩僧聲聞僧凡夫僧

顯はる。法性の本來平等なる所より、僧寶と顯はる。姑く三寶と說けども、唯是れ一法性なり。誠信に佛に歸する者は、佛の外に自心なく、自心の外に佛なく、能歸の心が、直に是れ所歸の佛寶なり。誠信に法に歸する者は、法の外に自心なく、自心の外に法なく。能歸の心が、直に是れ所歸の法寶なり。眞正に僧に歸する者は、僧の外に自心なく、自心の外に僧なく。能歸の心が、直に是れ所歸の僧寶なり。茲に至て、三寶長く世に住して、增減なしと名づくと。

要を取りてこれを言へば、三寶とは、別義にあらず。自性本有の德を、種々に顯はして、佛寶となす。自性本有の理を、種々に顯はして、法寶となす。自性本有の行を、種々に顯はして、僧寶となすものなり。經曰。善男子。於法寶中。有其四種。一者敎法。二者理法。三者行法。四者果法。一切無漏。能破無明煩惱業障聲名句文。名爲敎法。有無諸法。名爲理法。戒定慧行。名爲行法。無爲妙果。名爲果法。如是四種。名爲法寶。引導衆生。出生死海。到於彼岸。と。又曰。善男子。世出世間。有三種僧。一菩薩僧。二聲聞僧。三凡夫僧。文殊師利。及彌勒等。是菩薩僧。如舍利弗。目犍連等。是聲聞僧。若有成就別解脫戒。眞善凡夫。乃至具足一切正見。能廣爲他演說開示衆聖道法。利樂衆生。名凡夫僧。雖未

眞福僧

福田僧

第八十一段

宿福の衆生

能得無漏戒定。及慧解脫。而供養者。獲無量福。如是三種。名眞福僧。復有一類。名福田僧。於佛舍利。及佛形像。幷諸法僧聖所制戒。深生敬信。自無邪見。令他亦然。能宣正法。讚歎一乘。深信因果。常發善願。隨其過犯。悔除業障。當知是人。信三寶力。勝諸外道。百千萬倍。亦勝四種轉輪聖王。何況餘類。一切衆生。如鬱金華。雖然萎悴。猶勝一切諸雜類華。正見比丘。亦復如是。餘衆生。百千萬倍。雖毀禁戒。不壞正見。以是因緣。名福田僧。若善男子。善女人等。供養如是福田僧者。所得福德。無有窮盡。供養前三眞實僧寶。所獲功德。正等無異。如是四類聖凡僧寶。利樂有情。恒無暫捨。是名僧寶不思議。心地觀經と。

三寶のこの世間に住持流布することは。誠に希有の勝緣なり。若し人あり、邪見を捨てゝ、歸依するときは。おのづから解脫を得るの基となるべし。抑も衆生の心は、種々の執著を以て、動くものなれば。猫の耳の、鼠の聲にするどく。蛇の目の、蛙の形にするどく。假令その側に、七寶莊嚴の器物あるも。彼れが業緣にあらざれば、兎角龜毛におなじかるべし。されば三寶は、人々の目前に現ずるも。宿福の衆生にあらざれば、歸依の因緣なしといへり。今時偶〻黃卷赤軸を、披閱讀誦するものありといへども。動もすれば、邪見の眼を以て。これを看破

醜婦明鏡に對す

せんと欲するが故に。自己心念に、不相應の言句あれば、忽ち嫌惡の心を生じ。曰く是れ空理なり。是れ方便なり。敢て取るに足らざるものなりと。恰も醜婦の明鏡に對して、己が醜面目の寫れるを知らずして。猥りに明鏡を忌み遠ざくるがごとし。誠に以て詮方なきことなり。この故に、苟も佛法を修して眞實の理を覺悟せんと欲するものは。必ず先づ自己の見惑を去りて、能〳〵經意を工夫し。自己の心想に照らし見るべし。黄面老子は、他事を廣舌せしものにあらず。直ちに人々の眞面目を、說破せしものなれば。その言句は、有相無相を離れて、悉く人々自性本有の消息なり。これを明鏡に譬へて云はゞ、鏡中に青黄赤白の相なきが故に、能く一切の色相を、現ずるがごとく。經意に有無內外の相なきが故に、能く我が性相を發明して、覺悟することを得せしむるなり。經曰。依於義不依語。依於智不依識。依了義經不依不了義經。依於法不依人。隨順法相無所入無所歸。維摩經と。これを四依四不依といふ。道を修するものは、必ず四不依を去て、四依に歸すべし。是れ所謂霧海の南針にして、夜途の北斗なり。

自性本有の消息

四依四不依

第八十二段

此の世界ありて、此の衆生あり。到る處として、衆生界ならざるはなし。此の衆生ありて、此の四恩あり。一衆生として、四恩を負荷せざるものなし。此の四恩の、衆生界を建立成就せること。恰も植物の、氣候水土の緣に應じて、發育するがごとく。誠に不可思議の因緣なり。經曰。如我所說四恩義是名能造世間田。一切萬物從是生若離四恩不可得。譬如世間諸色應能造四大而得生。有情世間亦復然。由彼四恩得安立。觀經と。仔細に觀察すれば、一切世間の法として、彼の四恩に緣起せざるものなく。一切衆生の道として、此の報恩の大事にあらざるはなし。此の恩を知るを、智者と云ふ。此の恩に報ずるを、仁者といふ。是故に、眞實に四恩を知て、眞實に四恩に報ずるものは、佛とも云ふべし。菩薩とも名づくべし。十善十惡の差排も、所論にあらず。人の人たる眞面目は、必ず此の中に全し。されば眞實に四恩を知て、眞實に四恩に報ずるものは。事宜に際しては、爲めに人をも殺傷することあり。況や畜生等をや。蚤蝨をも殺さず、禽獸をも愛護して、却て報恩の大事を忘るゝものは。乃ち佞佛者にあらざれば、所謂鄕愿の類なるべし。假令出家淨戒の人たりとも、彼の四恩を忘れて。徒らに名言句義の佛法を主張し。恰も佛界より降下したるごとき風情のものは、所謂木頭に異ならず。豈こ

衆生界の建立

造世間田

智者仁者

眞實に四恩に報ずる者

佞佛者

木頭

第八十三段
地獄往生

れを人寶なりといはんや。唯に人間に害なきを以て、これを稱譽するとせば。蟲鳥の類にも、其種類は澤山あるべし。

曾て人あり、余に問て曰く。子の命終の後は、再たび何の處に受生するやと。余これに對て曰く、余は命終の後、決定して地獄に墮すべし。其の故は、假令地獄に生ずるも、父母なくしては、生ずべからず。是れ既に父母あるなり。苦惱を受る衆生もあり。威嚴の尊き閻王もあり。住持の三寶は、流布せざるも。同體別相の三寶は、彼の猛火の中に現然たり。されば地獄にも四恩あるなり。余は生々世々、未來際を盡くして、四恩に報ぜんことを誓願す。聞くがごとくんば、地獄尤も苦境なりと。その苦境を擇て再生を期し。過去無量劫來の大恩に報ずべし。余は斯く決定の信を起し、他の極樂往生を期するものと、其の趣を異にして。其の歸を一にせんと欲するなりと。是れ一時の戲言にあらざるなり。

第八十四段
四恩を知れば邪見消滅す

四恩を知るときは、外我見も立つべからず。四恩を知るときは、內我見も起るべからず。乃至惡平等・惡差別等の邪見は、地を拂うて消滅すべし。總じて人間の妄想は、無量なるによりて。その邪見も、無量なりといへども。四恩をわすれ、報恩の大道を蹈みはづすものにあらざれば。決して其の心に邪思惟分別を生じ、甚だしき見惑に陷いることなし。況や、大口を開て、邪義を主張することをや。

邪義を主張する者

看よ邪義を主張するものは、必ず婉曲に人の父母を輕しめ、人の衆生を輕しめ、人の國王を輕しめ、人の三寶を輕しめ。而して我が所言に順て、汝の身命をも捨てよと、說得するものなれば。苟も眞實四恩の義を開悟するときは、如何なる外魔も、寄りつくこと能はざるなり。例を擧て云はゞ、耶蘇の言に曰く、勿意我來致平於地。我來非致平。乃致劍。我來致平之家人也。愛父母過於我者。不宜乎我也。愛子女過於我者。不宜乎我也。不任其十字架而從我者。亦不宜乎我也。得其生命者。反失之。爲我而失其生命者。反得之。新約書馬太傳と。

耶蘇の言

甚だ無慙なる立言なれども。外我見より立つるときは、是れも尤の思考なるべし。是故に、能〳〵正念して、報恩の大事を忘るべからず。假令忠孝仁義の人と稱せられざるも。此の大事を知て、邪見に隨順せざる所に、無上の大功德あり。

邪見に隨順せざる所に大功德あり

これに反して、邪見道に、人の子弟を陷しいれんとして。種々の善術をほどこし、世間を誑惑するは。是れ全く、人間の奸賊と云ふべし。

人間の奸賊

第八十五段　外魔の狐狸

四恩は眞實善惡は虛名

外魔の狐狸ありて、世間を惑亂するは。何の國何の時に差別なく、免るべからざる衆生界の災厄なり。故に菩薩大人なるものありて、種々の福緣を與へて、これを救護す。若し人あり、菩薩大人の志願を發し、彼の外魔を退治せんと欲せば。能く觀察して、必ず先づ彼れの實相を看破すべし。夫れ彼れの惡は憎むべしといへども。彼れの邪見は、排すべし。四恩は眞實なり。善惡は虛名なり。虛名の善惡に誑惑せられて、眞實の四恩を、忘却するは。愚癡の至りといふべし。余曾てこれを聞く、人あり緣家にいたり。夜更けて、將に歸らんとす。その家人、これを留めて曰く、歸路甚だ危險なり。且つ狐狸いてゝ人を誑かすと云へり。その人強ひて辭して、歸途に上る。たま〳〵松林の中を過ぐ。人あり背後より呼て曰く、汝と相ひ與に歸らんと。其の音聲は、全く叔父に似たり。其の人思へらく、果して狐狸の余を誑かすものなりと。刀を揮てこれを斫る。乃ち走て家に歸り、衆に告て曰く。歸途松林の中に於て、怪物を斃せりと。相ひ携へて、往てこれを檢す。豈圖らんや、その斃死するものは。狐にあらず、狸にあらず、眞正の叔父なりといふ。

眞理に暗き者

菩提涅槃の性相なし

第八十六段　福緣即ち福分なり

これ等は、全く一時の畏怖心より、起るものなりといへども。畢竟眞實の理に暗きが故に、かゝる大事に至りしものなり。經曰。善男子。一切障礙。卽究竟覺。得念失念。無非解脫。成法破法。皆名涅槃。智慧愚癡。通爲般若。菩薩外道所成就法。同是菩提。無明眞如。無異境界。諸戒定慧。及淫怒癡。俱是梵行。衆生國土。同一法性。地獄天宮。皆爲淨土。有性無性。齊成佛道。一切煩惱。畢竟解脫。法界海慧。照了諸相。猶如虛空。此名如來。隨順覺性。圓覺經　と。如來鏡智の中には、菩提涅槃の性相すらなし。何ぞ況や、外道衆魔の狐狸ありて、他を誑惑せんや。

佛道本論卷之四　一名法供養

法性等流して、一切衆生の福緣となるものは、即ち一切衆生の福分なり。これを差別するときは、所謂四恩にして。此の四恩の福緣によりて、この人の此の世に緣起すること。なほ魚龍の水に生じて、水を離れず。禽獸の山林に生じて、山林を離れざるがごとし。而して、その離れ得ざる所のもの、即ち其の衆生の福緣にして、全く福分の在る所なり。今それ、人として、人の福緣を離れ、人の福分を棄て

禽獸の福分

人の福緣即ち四恩是なり

第八十七段諸法緣起の相は不可思議なり

心性靈明

丶、彼れ禽獸の世界に陷いるときは。彼れ禽獸の福分より下劣なること、幾許なることを知らず。何となれば、鳥は兩翼ありて、自在に長空を飛翔し。獸は四蹄ありて、自由に嶮岨を奔走す。一枝の上、一樹の陰も。彼れ禽獸の福分には、金殿玉樓なるべし。飢て食ひ、渴して飲む。其求むる所、容易に其の欲に充つ。是れ豈人の安んじて、福分となすべきものならんや。されば人の福緣は、これを四恩の外に求むるも、決して得べからざるが故に。即ち此の四恩は、人間の福分なること知るべきなり。

諸法緣起の相は、はなはだ不可思議なるものにして。これを觀察するに、恰も形と影とのごとし。此の緣ありて、此の法成就し。此の緣盡きて、此の法壞滅す。其の成就する所の法は、必ず此の緣に相應するものなるが故に。彼れ邪見の徒は或は惑て天主天帝等の差排となし。又は單に自然業力の所爲となし。種々に臆測して、遂に因果を撥無するに至れり。試みに思へ、此の緣によりて生ずるものは。必ず此の緣に相應すべきものにして。若し相應せずんば、一法も生ずることなきことを。蓋し衆生の心性靈明なるがゆゑに。衆緣に相應して、微細

天命性命

人非人

第八十八段法性等流

因緣果報

の差別を現じ。其の差別に相應して、種々の業相を現じ。各〳〵福分のある所を、離れざるものなれば。古人は此の實際を觀得して、天命若しくは性命とも稱せり。されば此の福緣を離れ、福分を失ふものあるときは。これを人非人となし。甚だ賤惡して、人間に齒せざりき。是れ實に止むを得ざることなり。然りといへども、彼れ人非人も、必ず人間界に緣起せしものなれば。禽獸の群に入り、禽獸の分際に安んずることは、決して能はざるが故に。たとひ四恩に背き、其の福分を棄るも。なほ人間に雜居して、他の福分を奪ひ。他の福緣を損ふものなり。されば此の人非人ほど、邪惡なる者は、天地間にあることなし。

諸法緣起の理を以て言へば。即今現然たる事々物々は、悉く法性より等流して、眞實々際なるが故に。更に是非善惡の、撰擇すべきものなしといへども。此の緣は彼の法を緣起し。彼の緣は、此の法を緣起し。彼此の業感を以て、一切諸法を成就するが故に。其の成就の上に、禍福を生じ。此の禍福の現境は、直に人間の果報なれば。人々みづから觀察して、彼の惡因を斷じ、惡緣を去り。以て此の人間界の果報をして、常に幸福の地に在らしむることを務むべし。夫れ因とは、世

善因緣善果報
惡因緣惡果報

第八十九段

間事物の生起する原因に就て云ふなり。緣とは、彼の因を助け長じて、能く變化するの法を云ふなり。此の因ありて、彼の緣に感じ。因緣和合して、一法を成就するを、果と云ふ。故に果は、衆緣和合の事物なり。報は、其の事物によりて、受る所の禍福をいふなり。この故に、因あれば、必ず緣あり。因緣あれば、必ず果報あり。しかして其の善因緣には、善果報を引き。惡因緣には、惡果報を受く。是れ當然の理にして、道るべからざるの數なり。これを草木に譬へて云はゞ、其の種子を因となす、地味氣候等を緣となす。此の因ありて、緣に相應し。おのづから生育蕃茂し、花を着け實を結ぶを、果と云ふ。其の惡因なるも、善緣によりて生ずる時は、幾分の善果を結ぶべく。其の善因なるも、惡緣によりて生ずるときは、幾分の惡果を招くべし。其の惡果を因として、漸次に惡緣によるときは、終に大惡果を結び。人間の因緣を以ていはゞ、其の果報盡きて、三惡道に墮する時節も到來すべし。これに反し、其の善緣によりて、惡因を轉じ。漸次に善果を招き。終に天上の樂果を受くるも、決して疑ふべからざるの理なり。

別業の因緣は、別業の果を生じ。衆同分の因緣は、衆同分の果を生ず。其果を因

結果の遲速

速は遲に歸し
輕は重に合す

異熟果
等流果
增上果

として、諸緣に應ずるが故に。漸次に轉變輪廻して、善惡の二道に往來せり。蓋し別業衆同分の差別なく。其生住變滅の迅速なるものは。其の果を得るも、迅速にして、其の果を變ずるも迅速なり。其の遲緩なるものは、其の果を得るも遲緩にして、其の果を變ずるも遲緩なり。されば遲速輕重、相ひ錯綜して、變化すといへども。其の迅速なるものは、其の遲緩なるものに歸入し。其の輕微なるものは、其の重大なるものに統合すること。恰も日計の統計を、月計となし。月計の統計を、年計となすが如く。其中間に於て、種々の得失利害あるも。終に大體の上に決定せし禍福の結果は、容易に變化せざるものにして。其の變化も、必ず過去に於て因緣せし遲速輕重の度に、相應すべきは勿論なり。佛敎の差排によるに、此の結果を差別して、三段となす。一には、異熟果、二には、等流果、三には、增上果、是れなり。異熟果とは、別業若しくは衆同分の因緣作業、各々異なるによりて。其の別業若しくは衆同分の上に、異熟するの果を云ふなり。其の等流果とは、異熟果によりて、現在人間の上に等流して。恰も水の東に注ぎ、西に注ぎ、南若しくは北に注ぎて。其傾斜の分際に應じて、須臾も休息せざるをいふなり。其の增

第九十段

諸縁に逆順あり

吉人には福縁附添ひ凶人には惡縁附添ふ

上果とは、果報漸く増長して、窮極するをいふなり。この故に今日人間の果報は、別業若しくは同分の差別なく。必ず過去の因縁によりて、各々異熟せる結果の上に在るものにして。或は等流果に在り、或は増上果に在り、又は異熟果を結ぶ分際に在て、千差萬別なるものなれば。能々工夫して、其の實際を觀察すべし。即今人間界に於て、人々の禍福相ひ同じからざる者は、所謂異熟果にして。其の異熟の果報に相應して、諸縁に逆順あること、全く影の形に生ずるがごとく。響の聲に應ずるがごとし。此の人の爲めには、福縁なるものも、彼の人の爲めには怨讐となり。彼の人の爲めには、凶事なるものも、此の人の爲めには、福德となる。總じて吉人には、福縁附き添ひて、其の心身を離れず。凶人には惡縁附き添ひて、其の心身を離れず。人々自己の果報を引て、相應すること、誠に不可思議なり。譬へば。畜生の中にも。狐狸等のごとき、人の嫌惡するものもあり。犬猫のごとき、人の愛護するものもありて。おのづから自他の感覺を異にし、其の禍福の分劑決定するときは、免るべからず。是れまさしく等流果にして。過去に於て異熟せる、因果の餘報なり。其の増上するに及びては、世界の事々物々までも。

物我の業感

第九十一段

舉賢而上功

尊賢而親親

諸法は因縁に由て轉變す

其の業因に感じて、異熟すること。恰も貧賤の人は、處として窮困ならざるはなく。富貴の人は、處として自在ならざるはなきが如し。是故に異熟等流、増上果の次第を、能々思惟するときは。今日有情世界のありさまは。三世十方にをし通じて、明了なるべし。

要を取てこれを言へば、世間一切の因果は、輕重遲速とも、必ず異熟するものにして。其の異熟果より等流し、等流果より増上して、終に壞滅に歸するものなれば。眞正の學士は、能々古今人間上の變化を觀察して、工夫を下すべし。古書曰。太公始封。周公問。何以治齊。曰。舉賢而上功。周公曰。後世必有簒弑之臣。周公始封。太公問。何以治魯。曰。尊賢而親親。太公曰。後世寖弱矣と。是れ全く異熟等流、増上果の上を觀察して、能く未來世を了知するものなり。されば聖人の智は、斯く未來世を了知すといへども。萬世の後までも、變易なき制作を立てゝ、人間の一大幸福を留むることは。また決して能はざるなり。何となれば、一切諸法は。種々の因縁によりて、轉變輪廻するものなれば。時と所に應して、其の取捨安排の權は。かならず當時人智の明暗に歸するものなれば漸く弊を生じ。彼の制作の如きは、漸

正像末

我國の佛教

佛法斷滅の時

人天の福緣

次事實を離れ。徒らに空文を留めて、學問上の一部分として存するに至ればなり。この故に黄面老子は、種々の制作方便を設けて。此の正法を、世間に住持流布せしといへども。彼の因果の理は、固より免るべからざるを知り。正像末の三時を立てゝ、其の教法上の變遷を説明し。末來世の佛弟子たるものをして、省察反正するの地をあたへたり。されば我國佛教のごときも。古昔王政の世に、隨緣異熟せる結果より、等流し來り。武門專政の世に、增上果を結び。今日まさに滅亡の時運に至れり。若し出家學道の人にして、反省するの慧目なきに於ては。佛法斷滅の時は、必ず今日ならん。然りといへども、教主制作の三寶は、人間世界に相應せし福緣なれば。いやしくも人間世界の斷滅せざるかぎりは、三寶の斷滅することあるべからず。いま佛寶法寶は、木佛金佛、黄卷赤軸なれば措て論ぜず。所謂僧寶なるものは、出世間の人を以て、出世間の法を修め出世間の道を說き。全く世間の因果を離れて、正法を住持し。特に人天の福緣たらしむるが故に。其の隨緣の形迹は假令世間の因緣によりて、時に盛衰汗隆あるも。眞實住持の僧寶は、決して因果の差排を以て變易すべからず。

第九十二段　增上果の盡る時

平氏

德川氏

盛衰興敗

第九十三段

總じて增上果は其の一世界を感じて、異熟せしむるものなれば。一旦其の果の盡るときは、人心俄然と變じ。繕きの威靈は、今日の笑柄となり。其の珍重せし所の事物は、全く乾屎橛に異ならず。誠に以て不思議といふべし。彼の平氏の繁榮なるときにあたりては、平氏にあらざれば、人にあらずと云ふに至る。是れ即ち增上果の時にして、平氏滅亡の期なり。德川氏の末世のごときも、殆ど無情の草木まで、其の威德を感じ。公儀の二字は、天下の人心を威伏するに足れり。其の果報の盡て、滅亡するときは。恰も靑天白日の忽ち雲雨を起し、迅雷疾風相乘ずるに異ならず。其の變化は倏忽の中に在り。是等は衆同分の上に現るゝ因果なれば。所謂菩薩大人の志願ある眞正の學士は、能々觀察すべきの大事なり。古昔、邦國の盛衰興敗するも、皆この理にして。其時と所との因緣は、各〳〵異なりといへども。此の因果の數を免るゝものは、決してあるとなし。啻に邦國のみならず、一家一族、若しくは一人の上に於ても。おのづから此の理に準ずる者と知るべきなり。

斯くのごとき異熟、等流、增上の果報は。別業若しくは衆同分の上にも、種々差排

正因果

のあるものなれば。人々心を潛めて、觀察すべきは勿論なり。就中彼の福緣によりて、異熟するものゝ如きは。全く法性より、等流する所の、吾が福分にして。此の人間世界に、生れ出てし時に、定まれる正因果なり。いま別業の上に就て、これを云はゞ。人々各〳〵、父母あり、兄弟あり、親族朋友ありて。其の貴賤貧富の差別に論なく。其の生緣のまゝが、即ち吾が福分にして。此の因果は、生前生後に貫徹して。決して變易すべからざるものなり。又衆同分の上に就て云はゞ。

衆同分の福緣

一國または一州一郡、もしくは一鄕一村にもあれ。各〳〵その生緣の國土に、異熟せる因果は。全く吾が衆同分の福緣なれば、決してこれを撥無すべからず。譬へば、一船に乘ずるものゝ。其の一船の因緣を以て、人々禍福の係る所のものとなすが故に。此の衆同分の因果を撥無し、安危に貪著なく、却て一船の災害を招くものは。これを海中に投入しても、全船の福利を保たざることを得ざるが如し。されば、吾が生緣より生起する所の別業、もしくは衆同分の異熟は。彼れ人我の分際より生起する因果に比するに。さらに特殊の一大事なれば。古人は、これを天命、若しくは性命と云ひしも、さることなり。總じて吾が生緣の一大

特殊の一大事

事を決定して、疑惑なきに於ては。佛道も茲に究竟するものなり。

第九十四段　正法は生緣の上に現はる

吾が生緣は、吾が福緣なり。吾が福緣は、吾が福分なり。ゆゑに人々の正法は、全く人々の生緣の上に現はれて。取捨安排すべき分劑にあらず。天時に違ふべからざるが如く、地理に背くべからざるが如く、また決して人倫に戻るべからず。

人倫

人倫といふは、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等の五倫にして。人々各〳〵、その生緣の分際に應じて。此の五倫の上に、種々の因緣果報ありて。苦樂悲歡も、一樣ならずといへども。自己生緣の上に起る苦厄災難は。みづからこれを分として、隨時隨所に、報恩の大事を忘るべからず。今時徒らに、國の爲め世の爲めと唱へ、自己生緣の分際を忘れて。虛頭に走り、戲論空論に沈み。終に相牽ゐて、身命をも捨るものあり。甚だ謂れなきことなり。夫れ法性本來無所住にして、一切時一切所に相應するものなれば。一たび邪見の深坑を跳出せしものは。其の親に對しては、其の子たる因緣分際に於て、其の心を生じ。其の子に對しては、其の親たる因緣分際に於て、其の心を生じ。乃至一切差別の因緣分際に於て、無分別にして、隨時隨處に、これが相應を失せざるものなり。かゝる大自在の上より云はゞ、

虛頭に走る

邪見の深坑を跳出す

正念に住す

生緣の上に異熟せる因果

天命を知り人道を盡す

第九十五段人我分際の因果

所謂報恩の一大事も、一念心頭に究竟し盡して。是ぞ殊更に報恩の大事なると、名づくべき事もなかるべし。假令斯くのごとき眞實々際の境界を、證得せざる者も。能ゝ思惟分別して、正念に住するときは。必ず自己法身の慧光により、一切生緣の上に於て、其の得失、輕重、乃至禍福の因緣を審かにし。これに相應すること、鏡の像に對するがごとく。隨時隨所に、不覺悟なかるべし。これを要するに、吾が此の生緣の上に、異熟せる因果は。此の身心と、異一を論ずべきものにあらざれば。別業若しくは同分上の禍福に差別なく。此身心を以て、從事すべきものにして。假令聖人にもあれ、賢人にもあれ、佛菩薩にもあれ。この果報を免かるゝことは、決して能はざるべし。啻に免かるゝこと能はざるのみならず。此の果報は、自己の正因緣にして、即ち吾が正法の所在なれば。必ず此の身心を以て從事するものにして。聖人賢人、若しくは佛菩薩とも稱すべし。されば此の果報を明らかに證得するを、天命を知ると云ひ。此の果報を審かに履行するを、人道を盡すともいふなり。

人我の分際より生起する所の因果は。別業若しくは衆同分に論なく、ことゝ

善因緣惡因報

人衆ければ天に勝つ

餘毒等流

く善惡の二法を以て差排すべし。其善因緣は、所謂天命人道に順ずるものにして。全く人間の善果報を成就して、これが福緣となるものなり。其惡因緣は、必ず天命人道に逆ふものにして。これを別業に成就すれば、四恩に背くのみならず。生々の所に於て、みづから種々の苦報を受く。これを衆同分に成就すれば、所謂人衆ければ、天に勝つものにして。其の增上果の盡くるまでは、世間を壓倒して。種々の禍害を生ずるものなり。されば天命に逆ひ、人道に背くものは。久しからずして、必ず亡滅に歸すべしといへども。其の餘毒やゝもすれば、人間に熏習して等流。遂に一國の滅亡を來すこと少なからず。たとへば大患に罹る人の、其の部所の病は癒治するも。衰弱して餘病を發し、終に斃死するに異ならず。誠に恐るべきことなり。この故に菩薩大人の志願ある眞正の學士は、かゝる世間の因果を觀察して。過現未三際の上に眼を放ち。假令即今別業同分の果報は、或は異熟、若しくは等流增上果に在るに拘らず。勉めて其中の惡因緣を去り。天命人道に應じ、各〳〵みづから其の生緣の正因緣に基づきて。善果報を成就せんことを務むべし。今試みに、これを今日の佛敎上に就て云はゞ。我

第九十六段一類邪見の人

が國の佛敎は、既に增上果を盡くして、滅亡の期に至ると雖も。若し出家學道の人、みづから出家たるべき因緣に住して。佛祖の衣鉢を傳へ、衆生濟度の佛躅を履まば。豈に今日の衰運を一變して、再たび佛日の光輝を、世界に發揮するの日なからんや。願ふに實行如何にあるのみ。

此心の所住

此の世間に、一類邪見の人ありて、佛敎の名相に異解を生じ。出世間と云へば、虛空界外にも飛び去ることのやうに思ひ。此の形軀の存する限りは、此の世間に住して、身命を保ち。一旦命終するときは、平生の修行力にて、佛界にも往生し。清淨の法身も得べきものなりと觀念せり。是れ甚だ淺はかなる見所にして。所謂身土の何物たる、世出世の何事たるを知らざる、最下凡夫の思量なり。夫れ國土とは、所住の上に立つる假名にして。身命とは、所緣の上に現はれし假相なり。其の所住は、全く此の心の所住にして。此の身の所住に非ず。故に此の心生ずれば此の身も生じ。此の心住すれば、此の身も住し。此の心去れば、此の身も去る。而して此の心は、必ず因緣によりて生ずるものなれば。各々其の生緣の上に所住するは、勿論にして。此の所住の土には、世出世の差排もあることなし。唯に其の生緣の土に迷惑するものが、凡夫なり。覺悟するものが、佛菩薩なり。迷惑すれば、此の生緣の土が、直に五欲の境となり。三毒の身を現じて、流轉止む時なく。覺悟すれば此の生緣の土が、直に法性の土にして。心境不二の上に、三種の身を現じて、大自在なり。凡夫著有の見にては、因果のほかに、一種世界といふものありて。其の世界に生れ出たること、恰も主人のなき舊家屋に寄宿して、暫時所住し。又も明暗の中に流浪して、窮極なきものゝごとく思へり。夫れ一切世界は、我が唯心の所造なり。因緣ありて、此の世界に生れしにあらず。我が心より所造して此の世界を感得す。其の所造の因緣は、即ち此の世界を感得するの因緣にして。其感得するの因緣は、即ち此の世界に生住變滅するの因緣なり。地水火風の堅濕煖動も、全く此の心の所感にして。彼れ四大に、堅濕煖動の實相あるにあらず。乃至金銀財寶の、此の世間に貴きも。衣服家屋の、此の身體に切なるも。みな悉く我が心の業感より、建立するものにして。佛菩薩の境界より、これを看破するを須たず。彼れ禽獸の心よりこれを見るも。此の人間の境界は、ひとり人間の業感より建立成就すること分明なり。されば此の人

世界は唯心の所造

四大の相も此心の所感

財寶家屋も我心の所感

業感を離れて別に世界なし

衆生の報土

第九十七段　日本國土

日本人

大邪見の者

間世界は、全く人間の業感を以て、建立成就せしものにして。此の業感を離れて、別に一種の世界あるにあらず。抑も衆生種々の業感は、過去因緣の異熟より、生起するものなるがゆゑに。各〳〵其の業感の土に所住するは、まさしく其の衆生の報土なり。蓋し理は義を以て顯はれ。法は因緣を以て生ずるものなれば。其の義を格して、其の理を開悟し。其の因緣を審かにして、其の法を證得すべし。彼の一切經文は義に依て理を顯はすものなれば。其の實際は、目前の衆生界を觀察して、通達するにあらざれば。黄面老子の廣長舌も、翅に戯論空論のみならず、一段の魔說となりぬべし。

今我が報土。即ち我が日本國土の因緣を觀察するに。此の國土は、過去三千年のむかしより、建立し來るものにして。其の間に、幾億萬の人ありて、生住滅せるも、こと〳〵く日本人なり。此の日本國土に生れたる日本人は。かならず日本人たるの因緣を以て、此の國土を感得せしものにして。此の因緣は、過去三千年の昔より等流し來り。即今我が生緣の上に現はれて分明なり。近時一類大邪見の者ありて。動もすれば、此の因果を撥無し。我が此の生緣の大事を破滅せんと欲す。余は此の國土の因緣を以て。此の身命を立つる者なれば。此の國土と此の身命とは。恰も影と形とのごとく。此の國土の因緣破滅するときは。所住すべき依土なきが故に。全く我が身命も、斷絶するの時なれば。我が身命のあらん限りは、此の國土を護持すべき分際なり。是れ特に余一人の偏見にあらず。苟も日本國土に生れし日本人たるものにして。其の邪思惟分別を離れて、能々正因緣を觀察するに於ては。必ず余の生緣と同分なるべし。請ふこれを論明せん、抑も我が國土に生住滅せる人は。過去世に於て、其の幾億萬人を知らずといへども。悉く日本人にして、日本國土に所住し。乃至禽獸草木も、其の當時は、その當時にして。相應に蕃殖せしに相違なかるべし。今よりこれを求むるに數千年の前はしばらく置く。數百年前の人物も、俱に泯滅して跡形なく。北邙一片の烟だも、殘らざるに至れり。されば我が日本國土として、古往今來變異なきは。唯に茫々たる大海面に隆起せる、一地脈にして。此の一地脈を以て、眞實我が所住の國土と稱するは。恰も髑髏を抱て、賢愚醜美を論ずるに異ならず。誠に以て愚痴の至りといふべし。是故に即今現然たる日本國土の實相は、

國土と身命とは形影の如し

一人の偏見にあらず

髑髏の醜美

日本國の實相

因緣の相續は日本國土の相續

彼の海中の塊れにあらずして。國初より等流せる衆同分の因緣にして。無常轉變の上に、相續不斷なる果報なり。故に苟も日本人たるものは、此の因緣を以て生じ、此の因緣の上に住し、此の因緣を相續する分際に相違なかるべし。されば此の因緣の相續するかぎりは、日本國土の相續にして。別業同分の差別あるも、なほ我が一身に異ならず。看よ我が此の色身の無常なる、一日に三度も飲食して、これを相續すといへども。惡因緣に觸れざれば、百年の壽命をもたもつべし。此の心は、刹那刹那に生滅して三世不可得なるが故に。今日の心は、昨日の心に異なり。今年の心は、去年の心に異なり。啻に此の心のみならず、一切內外の諸法も、轉變して留むべき形迹なし。其の中おのづから因果の法のみ如實にして、過去現在未來に亘り。此の身體の相續するかぎりは、其の名も變ぜず。其の主も變ぜず。日々快樂に住して、安穩なるべし。此の理を能々觀察すれば。生緣の外に、國土もなく。其の生緣を離れて、立すべき身命もなきことを了解すべし。

因果の法のみ如實なり

第九十八段

此の法元來過去にも屬せず、現在にも屬せず、未來にもぞくせず。たゞ是れ因緣のある所に現はれて、始終相離れざること、環の端なきがごとく。內外相依ること、鏡の像に對するがごとく。一異を云ふべからず。一國に現はれては、一國の因緣となり來る。一家に現はれては、一家の因緣となり來る。一身に現はれては、一身の因緣となり來る。この故に一身一家一國の形は、全く因果の影法師にして。恰も空中の樓閣に等し。仔細に觀察すれば、唯心分明にして。一國の心は、一國の因緣の上に現はれ。一家の心は、一家の因緣の上に現はれ。一身の心は、一身の因緣の上に現はれて。掩ふべからず。抑も我が此の心法は平等にして、自他の相なきのみならず。此の色法も、內外の分劑なく。常に集散生滅するものなれば。一身一家、若しくは一國として、自他の相を立つるは。全く生緣の上に、內外親疎の差別ありて、五蘊を結ぶの因緣に外ならず。試みにおもへ、たとひ無常轉變なるも。一國には、一國の色法ありて、相續不斷なり。其の色法の分際に相應して、一國の受あり。其の受に相應して、一國の想あり。其の想に相應して、一國の行あり。其の行に相應して、一國の識あり。これを一國の同分身と名づく。されば一國色法の堅固なるは、なほ吾が色身の堅固なるがごとく。其

此法は因緣の上に現はる

因果の影法師

心法に自他の相なし

自他の相は因緣に由て立つ

一國の同分身

同分身を壞滅するの因緣

肉を去り骨を換ふ

健全の體格に變化す

第九十九段

の受も、能く諸の艱難痛苦に耐へ。其の想も、寬濶廣大にして。其の行も、活潑俊敏なり。其の識も、通暢快樂なり。この故に一國の同分身を護持せんと欲するものは、其の國土生起の因緣を重んじ。其の色法を相續して、堅固に建立すべし。今時邪見の徒のごとく、徒らに他國の色法をのみ羨みて、一概に自國の色法を嫌惡するは。全く我が同分身を壞滅するの因緣なり。他國は、他國に異熟するの因緣ありて。おのづから其の色法を成就せり。蓋し一國の色法は、其の國土の因緣に相應して、異熟すること。猶人身に强弱あるに異ならず。假令弱質の色身なるも、一朝これが皮を剝ぎ、肉を去り、骨を換へて、他の强質の體格に比擬せんと欲せば。必ず其の身を斃すのみにして、其効驗を得ること能はざるべし。若し夫れ攝生其の法に協ひ、運動作業其の節を得て。量を計り分に應じて、任運に加養するときは。曩きの弱肉軟骨は、無常轉變の理に應じて。漸く健全の體格に變化するは、期して俟つべきなり。

要を取てこれを云へば、一國衆同分の因果は。即ち人々の別業に融じて、其の利害禍福を感覺すること。響の聲に應ずるに等し。其の同分の緻密なるは、金玉

友愛親好

一國の善果報

のごとく。其の同分の麁惡なるは、瓦石のごとく。其の國人友愛親好の度に應じて善因緣を結び。自他の爲めに、過去を顧み、將來を慮り。無常轉變の上に、善果報を求めて、間斷休息なし。上み君王は、下も臣民を友愛し。下も臣民は、上み君王を友愛し。大人は、小人を友愛し。小人は、大人を友愛し。賢者は、愚者を友愛し。愚者は、賢者を友愛し。男女老幼尊卑貴賤、相ひ共に友愛する所に、衆同分を成就し。一國の善果報を結ぶべし。十善法語、不兩舌戒の段に曰く。此の友愛親好、近くは人の人たる道にして。家に在りては、孝となり。君に事へては、忠となり。鄕黨朋友に交りては。皆和順すべし。遠くは緣に觸れ、法を得て。境に對し自心を明かにし。飛花落葉に無師自覺す。一句一偈の中に、無漏聖位に入る。一切時一切所、みな自心と相應して。無上正覺の基本となるべし。又曰く。此の戒、法性より等流し來り。今日現今事々物々の上に相違せず。此の友愛親好は、天地の道なり。萬物の情なり。看よ、天地の間に。此の事あり、此の物ありて。或は各ゝ相ひ應じ、或は各ゝ相ひ制す。物獨立せず、事獨成せず。左右相ひ依り、能所互ひに扶け。時を得、所を得て、成立するなり。又曰く。自他元來

平等性を成就す

法を說くは相對の義

法を論ずるは能所の差排

不二なり。友愛の心、法性等流して一切衆生に徧ず。心境元來無差別なり。友愛の心。法性等流して、一切世界に徧ず。凡聖、元來融會す。修證元來別なし。悉く是の友愛の心を擴めて、此の平等性を成就す。初め凡位より、終り法性相應して、聖賢の地位に入る。皆不兩舌の德なり。此の中、此の迷情を起すは。譬へば。曠眼に空花を見るごとく。法性空中に、妄りに造作して、自他を見る。此の自他分上にも。平等の性、和合の德は、本來隱れざるなり。看よ、自は他に對して、其の相を顯はす。他は自に對して、其の相を顯はす。若し相對なければ、元來不可得なり。凡そ法を說くは、唯相對の義なり。生死に對して、涅槃を說き。凡夫に對して、聖者を說き。煩惱無明に對して、菩提を說く類なり。此に至りては。迷の源に達すれば、直に聖域に入り。迷情の中に、此の心境を見る。此の心境能所の中にも。平等の性、和合の德は、本來隱れ得ぬなり。看よ、能緣の心は、境によりて能となり。所緣の境は、心によりて所となる。心現ずれば、境來り。境來れば、愛憎生ず。若し能所を離るれば。是の法元來不可得なり。凡そ法を論ずるは、唯此の能所の差排にして。此に至りて能所確立し。唯心源を見るのみ。妄

世相を分別するは隱顯のみ

一言一默人倫の全きところ

第百段　色心の二法

想相續の中に、此の生死あり。此の生死界にも、平等の性、和合の德は、本來隱れ得ぬなり。生みづから生ならず、滅に對して、假りに生を現ず。滅みづから滅ならず、生に對して、假りに滅を顯はす。此の隱顯を捨つれば、世界元來不可得なり。凡そ世相を分別するは、唯此の隱顯のみ。此の生死界中、內あれば外あり。一あれば二生ず。萬般の世事、紛々として起る。此の萬般事物の上にも、平等の性、和合の德は、本來隱れ得ぬなり。何の故ぞ、本は末に徹して、麁細差はず。末は本のごとく、安立して左右其の原に逢ふ。今日世に交り、人に朋なひて、心に徧黨なく。言語せざれば止ぬ、言語すれば、唯此の友愛親好と俱なるべし。一言一默、人倫の全きところ。神祇の守護するところ。天命の在るところ。法性の隨順するところ。法として斯くのごとしと、此の不兩舌戒の段は、翹に人間の同分のみならず。一切諸法の感應を、論明して。懇切なるものなれば。必ず一讀して、能く眞理を開悟すべし。今は唯その要旨を記載するのみ。

別業同分の差別なく、所謂色心の二法は、諸法成就の因緣にして。一切の色法は、能く一切の心法を緣起し。一切の心法は、能く一切の色法を、緣起す。是故に、世

色法堅固の勝果

間一切の色法を、堅固ならしむるときは。能く一世の人心をして、堅固ならしめ。隨て人間の福力を增長し。謂はゆる八大恐怖不入其國の勝果を結ぶべし。これに反して、世間一切の色法を、薄弱ならしむるときは。一世の人心をも薄弱ならしめ。隨て人間の福力を退却せしめ。終には、國家運命の短縮を促すに至れり。例せば、軍人の其の執る所の器械にして、鋭利なるときは。恃て以て勇氣を生じ。これに反して、鈍器なるときは。啻に鬪心なきのみならず、却て畏怖の心を生じ。みづから縛して、應分の働きをも起すこと能はず。遂に相ひ牽ゐて、敵門に降伏するがごとし。されば人間世界を、堅固に維持し。其の福力を增長せしめんと欲せば。世間一切の色法に注意し、一々堅固に、成就することを勉むべし。彼の禽獸のごときも、本來衆生平等の心地より、緣起せしものなりといへども。其の色法の陋劣なるによりて、其の心も陋劣なり。その心の陋劣なるによりて、境も陋劣なり。其の所緣の境の陋劣なるによりて。一切の諸法、陋劣ならざるはなし。たとへば鏡の像に對するがごとし。心境元來不二なるがゆゑに。一切の色法が、直に衆生の心相と顯はれ來る。其の心相に相應して、見を起し。

色法薄弱の劣果

禽獸の色法

色法直に衆生の心相と顯る

堂塔伽藍の美觀

種々に造作して、攀緣するものなり。是故に、黃面老子は、不貪欲を以て、敎法の基礎を立つるといへども。其の色法の建立は、尤も華麗盛大を極め。動もすれば、金銀瑠璃等の七寶を以て莊嚴す。堂塔伽藍も、必ず世間最上の美觀を盡せり。是れ悉く檀越の供養する所なりといへども。若し非法に屬すれば、禁戒すべき筈なり。翅に禁戒せざるのみならず。却て大功德なりと稱しこれを慫慂せり。經曰。佛告阿難若末世人願立道場先取雪山大力白牛食其山中肥膩香草此牛惟飲雪山清水其糞微細可取其糞和合柈檀以泥其地若非雪山其牛臭穢不堪塗地別於平原穿去地皮五尺已下取其黃土和上柈檀沈水蘇合薰陸鬱金白膠青木零陵甘松及雞舌香以此十種細羅爲粉合土成泥以塗場地方圓丈六爲八角壇壇心置一金銀銅木所造蓮華華中安鉢鉢中先盛八月露水水中隨安所有華葉取八圓鏡各安其方圍繞華鉢鏡外建立十六蓮華十六香爐間華鋪設莊嚴香爐純燒沉水無令見火取白牛乳置十六器乳爲煎餅并諸沙糖油餅乳糜蘇合蜜蘇純酥純蜜於蓮華外各各十六圍繞華外以奉諸佛及大菩薩（楞嚴經）とあり。樹下一宿、日中一食の乞食境界を以て。黃面老子の得意なりと思ふは、今日緇素の邪見なるべし。是は別に仔細あるべ

第百一段　其心鋼鐵の如し

きことなり。今日我が國の諸道場、及び紺紙金泥等の經卷を見ても。佛法の華美を盡せるの一斑を知るべし。黄面老子も、金銀瑠璃等の七寶の、天より降下するものにあらず、地より湧出するものにあらず。悉く人間の精力を盡くし、死力を出して。求め得しものなることを、知見せしなるべし。これを忍びて、妄りに木佛・金佛・堂塔・伽藍及び經卷を莊嚴せしむるは、何が故ぞ。是れ全く、色法を莊嚴し、人心を陋劣に墮せしめざらんが爲めなり。斯くのごとくならざれば、人間の根機は、漸く下根下機に赴き。遂に人の人たる福分を、失するに至ればなり。この故に此等は、唯に佛法の莊嚴にあらず。全く人間世界の莊嚴なり。人間世界の莊嚴は、人心の莊嚴にして。人間相應の色法を、堅固に成就するものなり。さればとて、今時出家の人が。みづから本分を捨てゝ、勸化と稱し。妄に集財して、堂塔伽藍の建立に從事するは。謂はれなきことなり。是れは所論の外に見るべし。

鋼鐵艦に乘じて、戰に臨むものは、其の心鋼鐵のごとし。巨礮を放て、敵城を打摧くものは、其の心已に敵城を粉碎するの氣象を帶ぶ。縱行横行悉く敵を破るの

人心の厚重

菩薩根なる者

三世十方の差排　作業の廣狹

舉動にあらざるはなし。されば一點も、怖魔の乘ずべき機會なきがゆゑに。能く硝烟彈雨の中に耐忍して、國家の干城となる。此の世間一切の法は、全く此の理なり。此の理を能よく觀察して、世間一切の色法を、大切に成就すれば。其の成就する法に、相應して、人心も成就し、氣性もおのづから厚重に移るものなり。夫れ色法の堅固なるは、人心の厚重に緣起し。人心の厚重は、色法の堅固なるに緣起す。然らば則ち、色法を堅固に成就せんと欲するも。一世の人心、悉く浮薄陋劣にして。厚重の氣性なきときはあたはざることなり。されば世間に、おのづから菩薩根なるものありて。生來卑劣に安んずることあたはず。種々に工夫を運らして、此の人間世間の幸福を、計らんと欲す。此の機類をして、先づ大人の道を修めしむるときは。必ず能くみづから奮て、一切の色法を建立し。人間世界の幸福を、維持するに耐ふべし。抑も堅固なる色法は、人心の厚重によりて、顯はるゝものなれば。今その人心の厚重は、いかゞして養成すべきかを、觀察するに。是れまつたく三世十方の差排なり。人々三世十方を遠觀してみづから自己の境界を占得するの廣狹に相應して。其の作業に、廣狹厚薄の差別あり。

家屋の建築

知見の廣狹

昨日を知り、今日を知り、明日を知るも。三世を知るなり。去年を知り、今年を知り、來年を知るも、三世を知るなり。乃至百年を一期とし、千年を一期とし、盡未來際を知るも。三世を知るなり。此の三世を知て、みづから負擔するの、輕重厚薄に相應して、其の作業に顯はれ。或は堅固となり、或は薄弱となり、或は陋劣となり、或は莊嚴となる。例せば家屋を建築するに。一月若しくは一年、十年、百年と。其の建築者の豫想の度に相應して、種々の差別ありて、同じからざるがごとし。概するに。此の三世時間の短縮なる豫想は、其の作業薄弱にして。永遠を期するものは、必ず鄭重堅固なるべし。若し夫れ鄭重堅固の家屋にうまれ。これに相應して、一切色法の十分なる上に、所住するものは。おのづから其の心も堅固にして、人世の薄福を歎くことも少なく。隨て其の擧動も沉著なり。十方の上を通觀するも、なほ然りとす。一家より一村、一村より一鄕、一鄕より一國、一國より天下、乃至一切衆生界を盡して、十方の分際なり。其の知見の廣狹に相應し、其の心も廣狹の差別あり。其の知見の狹き者は、其の作業も狹劣なり。その知見の廣きものは、その作業も廣大なり。是故に人心をして、厚重ならしめんと欲せば。其の色法を、堅固に建立するに及かず。其の色法を、堅固に建立せしめんと欲せば。必ず三世の因果、十方國土の現境に通達せしむべし。物には本末あり、事には終始あり。徒らに文明開化を唱ふるも、無益のことなり。氣を張り勇を鼓し、分を顧みずして、華美に赴き。以て外面の修飾をこれ勉むるは。恰も花兒の、衆技を演するに同じかるべし。諸法元來實用の相なし。因緣相應すれば、糞土も化して王侯の珍膳に上る。因緣相應せざれば、莫耶も化して土灰となる。一切の色法、みな是のごとし。この故に色法の上に、世界を建立して、種々の作業を起すは。凡夫當然の事なれば。是の因緣を、能く觀察して。必ずしも現境に隨逐せず。能くみづから抽てゝ、諸法を堅固に建立成就し。一切衆生の安寧を圖るべし。是れ菩薩大人の行なり、例せば身體薄弱なるものは、其の心も薄弱にして、怯怖の情多し。その作業も薄弱にして、其の成就する所の法も、至て薄弱なり。斯くのごとく因緣するときは、漸々に衰弱して。果ては、人間の有樣をも失ふべし。假令薄弱の身體なりとも。みづから奮て、十方三世の因緣を達觀し。其の心に厚重の氣を養ひ、勉强從事するときは。則ち堅固の法を成就すること

物に本末あり事に終始あり

菩薩大人の行

難からず。一法堅固なるときは。此の因緣を以て、自他の氣性を變じ。漸次に厚重の心を養成し。遠大の事業に從事するも、遲緩の事業に從事するも、厭嫌卷退の心を生ぜず。死生を外にして、不朽の大業を創成することを得るものなり。

金銀瑠璃の土

我れ斯くのごとく、人も斯くのごとくすれば。必ず人間の福力を增長し。此の世界は、其の儘にして、金銀瑠璃の土とも化すべし。いまや人間の福力、大に衰弱して、悲むべき形勢を顯はし。偶〻菩薩大人の根行あるものも、往々邪見に執じ。人我の陋境を固守して、嫉妬の心を懷き。啻に友愛親好の心なきのみならず、相ひ賊害して、同分身中の蟲賊となる。誠に果なきことなり。

同分身中の蟲賊

第百二段

佛法者流の、やゝもすれば無常を說きて、此の世を厭き。娑婆を棄てゝ、疾く極樂國に往生すべしとて。一切の色法を、輕忽に思ひなし。無貪着と稱して、人間貴重の事業をも、廢退するに至るは。是れぞ妄想中の、大妄想にして。爲めに人間の福力を失ふこと、おほ方ならず。是れ實に敎法上の一大弊害ともいふべし。

敎法上の一大弊害

試みに思へ、無常とは、衰れはかなき意にあらず。今日あれば、明日あり。今年あれば、明年あり。生あれば、死あり。因あれば、果あり。一切の諸法は、常住不壞な

轉變の上に因果の理を觀ず

るものにあらざるをいふなり。是れ物我の常理にして、敢て悲歎すべきことにあらず。されば、世間一切の諸法は、悉く無常轉變なるがゆゑに。此の轉變の上に於て、因果一定の理を觀察し。程よく人間の福分を增長することこそ、勉むべき筈なれ。若し夫れ無常を以て衰れはかなきことゝなし。此の世を捨て去るを以て、佛道の本分といはゞ。佛道ほど、此の衆生界に大害あるものはなかるべし。何となれば、無常と稱し、娑婆と名づけ。此の世界を住みあらし、食ひ散らし。跡は野となれ、山となれと。相ひ携へて捨て去るときは。後來此の土にうまれ來るものは、實に迷惑の至りと云ふべし。夫れ貪欲を離るとは、大貪欲を生ぜんが爲めなり。所謂大慈大悲とは、大貪欲の異名のみ。瞋恚を離るとは、大瞋恚を發せんが爲めなり。所謂大勇猛心とは、大瞋恚の異名のみ。愚癡を離るとは、大愚癡を起さんが爲めなり。所謂大智慧光明とは、大愚癡の異名のみ。故曰從癡有愛。則我病生。以一切衆生病。是故我病。若一切衆生病滅。則我病滅。所以者何。菩薩爲衆生故。入生死。有生死。則有病。若衆生得離病者。則菩薩無復病。譬如長者唯有一子。其子得病。父母亦病。若子病愈。父母亦愈。菩薩如是。於諸衆生愛之若子。衆生病。則菩薩病。

衆生界の大害

悟道の人

衆生病愈。菩薩亦愈。維摩經と。斯くの如きの大恐疑を起すにあらざれば。衆生界の安寧幸福を保持するに足らず。能々工夫すべきことなり。近時禪門より悟道の人を出す。一機一境を以て、向上の宗旨となし。一念心頭に、殺活の手段あるを、最上乘となすものゝごとし。是れ亦、狂狷の流亞にして、悟門に彷徨するものなるべし。

佛道本論卷之五一名法供養

第百三段

本論まゝ法相の常例に合せざるものあり。今或難に對し、一塲の葛藤を生ず。

第百四段

其の是非の成敗の如きは、彌勒出世の日を俟て、他に問取すべし。

第百五段

或難に曰く、見惑、思惑、煩惱障、所知障、此の四法の取扱ひ、何によりて言へるや。是れ大小乘何の所にありても、違はぬ名目なれば。唯識以上の法相に順じて、說くべきものなり。此の名目を、勝手に取扱ては、學者の心服せぬことなり。分別俱生の名目も、なほ然りと。

見思の二惑を以て、煩惱障に攝し。獨り法執を以て、所知障となすは。通說なりといへども。仔細に觀察すれば、謂はゆる法執なるものは、分別の妄執を脫せざる分際なれば。余は本論に於て、斷して見惑を以て、一切の邪見を攝し。此の見著によりて、法性の理を障礙するを、所知障となすものなり。元來諸法を分別せざれば、所見なし。所見なければ、所知なし。所知なければ、草木瓦礫に同じ。されば、所知障なるものは。正思量を得ざる分別の妄執にして、見惑の上より生ずる障礙なり。外道の斷を計し、常を計し、乃至有無を計し。偏見に執じて、種々の言句を立つるも。悉く彼れが法執なり。物我、廣狹、是非、斷常を、見障とも名づく。宜しく省察して、本論の意に照らすべし。

見障

第百六段

所知障を以て、見惑に攝するときは。見惑は、もと煩惱障の攝なるが故に。經論の煩惱所知の二障、閑言語となるべしといふものあらん。是れ一應は、尤の批難なりといへども。法相の名目にのみ拘泥しては。眞實の佛道に、通達することは能はざるなり。元來法相なるものは、衆生の迷惑倒見の上に、種々の名目を立てし。差排するものなれば。悉く煩惱の異名なり。經曰。從初習忍。至金剛定。皆名爲伏一切煩惱。無相信忍。照勝義諦。滅諸煩惱。生解脫智。漸々伏滅。以生滅心。得無生滅。

煩惱障
所知障

此心若滅、即無明滅。金剛定前所有知見。皆不名見。唯佛頓具一切智所有知見。而得名見。仁王　とあり。又曰。爾時菩薩入金剛定。斷除一切微細所知。諸煩惱障。證得阿耨菩提。如是妙果。名現利益。心地觀經　とあり。されば此の心もし滅すれば、即ち無明滅す。

第百七段
邪見

此心とは何ぞや、畢竟分別の妄執なり。通じて煩惱障といへば、貪愛の心を以て種々に得失を分別する分際を云ふなり。所知障とは、無明の心を以て、種々に法非法を分別する分剤をいふなり。共に見思二惑の餘習なり。故曰。頓斷見思習氣。坐木菩提樹下。生草爲座。成劣應丈六身佛四儀　と。抑も世間一切の名相は、悉く衆生の思惟分別より起る。即ち唯識以上の事なり。苟も心法を論ずるものにして、衆生の心識を離れて、言句を立てんとするは邪見なり。唯識の差排といふこと、別にありといへば。唯識にあらず、唯とは總括の義なり。

南泉の猫兒

邪言とは、佛知見に合せざる不眞實の見解なり。金剛定前所有知見皆不名見とあり。是れ不眞實の見解なればなり。經論に說くところの所知障は學者從來、種々の邪見に執ぜし無明熏習を云ふなり。是等は、階級の說なれども。概して云はゞ、所知の爲めに障礙せらるゝの義なり。南泉禪師が、無慈悲にも猫兒を斬るは。此の所知障を斷ずるが爲めなり。猫兒にも所知障ありしにや。趙州の狗子は、無佛性なり。黃面老子は、一切衆生悉有佛性と說けり。獨り趙州の狗子は闡提なるべし。夜行莫履白。非水是石なり。されば觀音は入流亡所。これ等は、悉く甚深の義なり。實踐修行の人にして、自悟すべき分際なれども。畢竟じて云はゞ、攀緣の心を斷ずることなり。經曰。何謂病本。維摩經　と。一切衆生の迷倒の見は、何の所か攀緣にあらざらんや。學者にも限るべからず。總じて所知は所見なり、所見は我が心の光影なり。一切世界の法は、自心を分別するものなり。此の不覺の分別が、全く見惑なり。此の見惑の餘習を、所知障となす次第あるべきことなり。此の次第を知らずして、名目にうち任せ置くときは、法は死物となりぬべし。末を還して本を顯はし。本を正して末を脩め。以て一切衆生の迷倒の見を破し、佛の知見に引入すべし。

趙州の狗子

第百八段

或難に曰く、思惑の名目は、二果以上に在て、顯現して所斷となる惑なり、故に思惟の惑といふ。凡位にて云ふべき名目にあらずと。

第百九段

此の說、一應の常例なるべし。六根六塵の上に、愛染迷著す、何物か、思惑なからん。

凡位に在ては、却て深かるべし。貪愛によりて心念を生じ、種々に分別するは、聖凡の免かれざる所なり。唯佛與佛のみ、究竟して出脫す。二果以上に在りて、顯現すると云ふは。思惑のなき凡夫が、二果に至て、思惑を起したるにあらず。塵相の貪瞋癡が除きてみづから氣の附きたる時節なり。みづから氣が附きたるによりて、方便を求めて、斷ずるものなり。經曰。有疾菩薩。云何調伏其心。維摩詰言。有疾菩薩。應作是念。今我此病。皆從前世妄想顚倒諸煩惱生。無有實法。誰受病者。中略未具佛法。亦不滅受而取證也。設身有苦。念惡趣衆生。起大悲心。我既調伏。亦當調伏一切衆生。但除其病而不除法。爲斷病本而敎導之。維摩經と。是故に、聖凡ともに、思惑の中にあり。これを波に譬へて云はゞ、大波小波なり。小波に至らざれば、波と云ふべからずといはゞ。誠に不都合なる名目なり。大波の時は波間に浮沈し、目前は、悉く大波たることを知らず。禪定觀察の力によりて、波も漸々靜まり。始めて波の中にあるといふことを、自知する位を二果以上とも云ふべし。三界出脫の眼より、これを見れば。彼れ初めより、風波の中にあり。經曰。外境界風。漂蕩心海。識浪不斷。楞伽經と。余が所見に約すれば、見惑思惑の差排を聞て、覺悟する者

大波小波

三界出脫の眼

は。何人に限らず、悉く二果以上と云ふべし。此世間には、無相好の佛もあり。貪瞋癡を起す菩薩もあり。汝等心想佛時。是心三十二相、八十隨形好。觀無量壽經と。かゝる佛界には、動もすれば、貪欲瞋恚愚癡の佛も雜居するなるべし。

二果以上

第百十段

根本煩惱
隨煩惱

法は廣說すべし、略說すべし。其の略記の中に廣說の義を含む。本論は、斷惑證理を宗となす。轉迷開悟、拔苦與樂、および斷煩惱、得菩提、度生死、證涅槃等も、悉くこれに攝す。無明を惑本となし、根本煩惱となす。貪瞋癡を以て隨煩惱となし、思惑となす。此の貪瞋癡の中に就て、愚癡を、見惑所起の本となす。十善業道經には、貪欲瞋恚愚癡を、意の三惡業とす。邪見は、愚癡の異名なり。單に愚癡と云へば、俱生の惑なり。已に邪見と云へば、分別起の惑なり。此の分別起の惑が、見惑なり。彼の法執は、此の見惑の餘習にして、所謂所知障なるものなり。今これを略說するときは、本論の差排を以て、當然となす。名目に拘泥して、實地を知らざるものゝ、是非すべき分劑にあらず。

第百十一段
三結
一者身見
二者病相

起信論には、煩惱障を、煩惱礙と說き、所知障を、智礙と說く。經曰。須陀洹斷三結。貪癡不生。楞伽經と。貪は染心の義なり、癡は無明の義なり。貪によりて、境界に執ず、

三者戒取

愛見の二著

肉

不

第百十二段

これを染心の義といふ。癡によりて、妄想を生じ、種々に邪思惟分別す、これを無明の義といふ。經曰。由塵發知因根有相。又曰。知見立知即無明本（共に楞嚴經）と。總じて。名目は種々なれども、愛見の二著を出でず。惑と說き障と說く、其の場合によりて、名を變せしものゝみ。凡そ無明といふは、無明といふものあるにあらず。直に我が此の癡肉團、これ無明の體なり。染心といふも、染心といふものあるにあらず。我が此の不淨聚、これ染心の體なり。しばらく方便に差別して、見著愛著となす。見著は、見惑を起し、愛著は、思惑を起す。此の見思の二惑を斷ずれば、曠劫の無明煩惱を、一時に斷ず。學者の力量に差別あるがゆゑに。止むことを得ず、階級の說にわたれり。譬へば貧と云ふにも、種々の階級あり。富といふにも、種々の階級あり。其の階級によりて、差排を立つれば、千差萬別なりといへども。畢竟するに、財寶の有無のみ。別に仔細なきがごとし。本論、見思二惑の差排にて、會通すべし。

或難に曰く、七識以內に在るを、內我とし。六識外轉門を以て、外我とするは、常例なり。勝手に內外の辭を取るは、學者の取らざる所なりと。

第百十三段

天主敎

我見內外の差排は、能々工夫すべきことなり。內我は、凡夫不覺の我執なり。七識以內にあると云ふは、此の事なり。外我は、境に對して現はる。六識外轉門を以て外我とするは、此の事なり。是れは我相を心識の上に差排して說くものにして、相分なり見分にあらず。若し見分に約すれば、本論所說のごとし。蓋し一切の法は、心識を離れざるものなれば。假令外道の上に顯はるゝも、易はることなし。見聞の樣子に、少し違ひある時は。法相を取扱ふこと能はざれば、唯識の上に差排して、我相の根本を詮索するも、無用の事なり。

秦の始皇は、人を殺すこと、蟻子を踏み潰ぶすがごとき。己れを護るには、仙人を倩ひ來り。不老不死の藥を求め、遂に其の死の免かれざるを知りしにや。陵墓に魚燈を燃して、日月となし。水銀を湛へて、江河を造りしと云ふ。是れ一切衆生の爲めに、內我の相を現じて、覺悟せしむるものなり。かゝる大我相の人を、出して、示すにあらざれば。人我の骨髓を顯露して、轉迷開悟の因緣をなすこと難し。されば始皇を以て、不可思議解脫の菩薩といふも、不可なかるべし。天主敎のごときは、全く分別の上に立つる我見なり。所見の上に立つる我見なり。

妄念の上に立つる我見なり。蓋し萬法唯心なり、天主の現ずるも、かならず衆生心の上に現ずるものなり。其の衆生心念の上に現ずるは、邪法を念ずればなり。青雲の上に在りと思ふは、其の衆生の分別心のみ。我れよりこれを見れば、彼の衆生の心念の上に顯はるゝものなり。是れ全く自己の我相に轉ぜらるゝものにして、分別の影事なり。若し一切衆生に、我相なきときは。かゝる奇怪のものは、現ぜざる筈なり。心を離れて境なし、意を離れて法なし。畢竟は人を實有と執ずれば、人我相となる。法を實有と執ずれば、法我相となる。其の我相のある所に、主宰を立つ。人法元來、我無我の分際にあらず。全く衆生迷倒の我見より起る。一切衆生、迷己逐物ものなり。近時、自由の說を主張するものあり、生命を棄てゝ、自由の臣僕となるべしと云へり。自由と云ふことは、如何なるものにや。是れも恐らくは、分別の影事につき廻はりて、終に生命をも失するに至る。戲論の大害ならん、能ゝ工夫すべきことなり。常例は兎もあれ、唯心法界の中に、かゝるものが現はれ來る。これを詮索して、十八界の中に於て、いかなる所に所立せしかを、觀察すれは。教相の雜形を離れて、實地に相應し。其の差排は、寸分も邪

分別の影事

人我相
法我相

義に陷らざるものなり。

第百十五段

或難に曰く、見惑の種類に、內我、外我、惡平等、惡差別、云々本末相當せず。見惑の名に、八十八種あり。此のうち我の內外を云ふこと、經論になきことなりと。

第百十六段

我見は、一切邪見の根本なり。一切の見惑は、我見より生ず。五蘊を執じて、我相を計し。節常の見も、是れより起り。有無の見も、是れより起る。故に見惑の根本にして、見惑の中に攝せずといへども。本論內外の我見を論列する以上は、これを見惑に攝して、固より不都合なきことなり。彼の見惑八十八使の差排は、三界に配當せるものなり。今日世界の種々の邪見は八十八使の名目に漏れたるものといへども。これを心法に攝するときは、何とか差排すべき道もあるべし。十善十惡の名目に適せざれば、惡にもあらず、善にもあらずと捨て置くときは。

第百十七段

法相の差排ほど、世間に大害あるものはあるべからず。

第百十八段

或難に曰く、虛空に計量あるの說は、經に、縱令虛空亦有名貌。拗蔽 とあり。貌あるものは、計量の一なりと。

虛空に計量あるの說は、出處あるにや。小乘にても、虛空は三無爲中

虛空無爲

あるべし。又曰。此方器中。所見方空。爲復定方。爲不定方。若定方者。別安圓器。空應不圓。若不定者。在方器中。應無方空（楞嚴經）と。虛空に方圓の定量なしといへども、見分の上には計量あるべし。又曰。離明離暗及離虛空。是見元同龜毛兎角（楞嚴經）と。虛空も見所なり、無爲なりと云て、棄置くべきにあらず。所謂虛空無爲なるものは。眞空の理は、諸の障礙を離るゝに比對して云ふものなれば。今の所論にあらず。

第百十九段

是れ等の問答は、識者の一笑に付すべし。舜若多は、虛空を以て身となすと云へり。身と云へば、計量あるべし。

第百二十段

或難に曰く、地大を以て、餘の三大の總名云々。經論の中に、其の證ありやと。本論、地大を以て、餘の三大の總名となすにあらず。曰く、器の質分を究明するときは、風火水大も無形にして。其の所依は、只に地大の一種に歸著せり。所謂地大なるものは、形質あるものゝ總名なれば。苟くも形質あるものは、地大の種類にして、是れ即ち一切萬物の元子と謂ふべしと。此の文を能く看得するときは、其の義おのづから分明なるべし。經曰。水性不定。流息無恆。又曰。風性無體。動靜不常。又曰。火性無我。寄於諸緣。又曰。空性無形。因色發顯。又曰。見覺無知。因色空有。又曰。識性無源。因子六種。根塵妄出（共に楞嚴經）と。これ等は、敢て經論を引くまでもなきことなり。

第百二十一段

或難に曰く、五蘊を說くに、色と識と相ひ須て受ありと云ふこと。受は想を生ず、想は行を生ず、行は識を生ずといふこと。聞なれぬ語なり。次第生起の說は、十二因緣にては、節々云ふことなり。五蘊等に云ふことなし。且つ色の一言は、身に屬し。餘の四蘊は、心に屬す。且つ五蘊は、同時頓現の法にて、次第生起の法にあらず、と。

第百二十二段

色と識と、相ひ須て受ありと云ふこと。色心の二法を、能く觀察するときは、おのづから明瞭なることなり。經曰。生後染淨。各自能爲無量無數染淨識本。從初刹那。不可說劫。乃至金剛終。一刹那。有不可說不可說識。生論。有情。色心二法。色名。色蘊。心名。四蘊。皆積聚性。隱覆眞實（仁王經）と。色あれば、必ず受あり。受あれば、必ず想あり。想あれば、必ず行あり。本論は、畢竟色心二法の上に、內外の分劑を立て。諸法緣起の樣子を、說示せしものなり。經曰。諸法緣成。蘊所界法。如水上泡（仁王經）と。彼の十二因緣は、次第生起に限り。五蘊は、頓現の法に限ると云ふは。餘り法相の常

例に、拘泥せし說なり。頓現の上より云へば、十二因緣も、頓現の法なり。經曰。如佛所說。比丘汝今即時亦生。亦老。亦滅。維摩經と。生滅同時なりとせば、何の法か頓現にあらざらんや。次第生起より云はゞ、五蘊も、內外因緣の次第あるなり。鏡の像を寫すがごとし。其の明なるは、鏡の體なり。外像に對して、其影は頓現すれども。これを次第して云はゞ、鏡中の影は、外像によりて現ずると云はざるを得ざるなり。受と謂ふも、此の心、外塵に觸れざれば。受は決してなきことなり。經曰。善男子。有情之受。依世俗立。若有若無。但生有情。妄想憶念。作業受果。皆名世諦。仁王經と。能〻觀察工夫すべし。

第百二十三段

或難に曰く、衆生の現境、色の一法に歸すと云ふこと、經論に見えず。大論に、一切法趣色の文あれども、これは別に云ふべきことゞもあり。今の所說にあらず。又曰く、此の世界は、色界にして云々。是れは、すべて色塵なりと云ふことを、云はん爲めなれども。色界とは、三界の中の禪定地中の、色法を存する境界の得名にして。衆生色身の證とすべき名目にあらず、と。

第百二十四段

衆生の現境は、色の一法に歸するといふこと。假令經論に見えざるも、眞實語なり。經曰。此一色法生。無量色。眼得爲色。耳得爲聲。鼻得爲香。舌得爲味。身得爲觸。堅持名地。津潤名水。煖性名火。輕動名風。生五識處。名五色根。如是展轉。一色一心。生不可說無量色心。皆如幻故。仁王經と。此の世界は色界にして云々は、全く所見の上に。顯はれたるものなることを、說明せしものなり。經曰。諸法相對。所謂色界。眼界。眼識界。乃至。法界。意界。意識界。仁王經とあり。眼根に相對するを、色界と云ふも、不當の言にあらず。されば色界とは、三界の中の禪定地中の、色法を存する境界の得名なりとは。是れ一應は法相の常例にして、さる事なりといへども。彼の三界の何物たるを、目前の境界にて、辨ぜざれば。所謂法相なるものも、夢物語りに類すべし。臨濟大師は、三界とは。汝が一念の貪欲を、欲界と名づく。汝が一念の瞋恚を、色界と名づく。汝が一念の愚癡を、無色界と名づくと譯したり。瞋恚と禪定とは、全く反對の說なれども。智識の見所には、さることもあるべし。大師も、法相には達せし人のよし。かゝる說を立つるは、必ずしも妄分別にあらず。經曰。妄想名三界。楞伽經と。余が見所に約すれば、貪欲は餓鬼趣なり。瞋恚は修羅趣なり。愚癡は畜生趣なり。欲界とは、情念なり。色界とは、想念なり。無色界とは。

三界は一念の異名

無想念なり。經曰、情想合離更相變易。所有受業。逐其飛沈。以是因緣。衆生相續（楞嚴經）と。

第百二十五段

或難に曰く、身は色身なりの一段、一應は聞ゆる樣なれども。心王心所の取扱には、はづれたり。斯く說きては、經論の說に背くべし、と。

第百二十六段　心王

心王とは、意識の事なり。心所とは、諸法の事なり。法相の通說によるに、第八阿賴耶識を以て、心王となす。是れ一應の說なれども、余が所見に約すれば。心王は、みづから主たるものにして。所謂第六意識、即ち第八賴耶より出現して、隨處に主となる故に。此の意識の體相を以て心王の分際と云ふべし。凡夫迷倒の上より云へば、第六意識は、妄念にして。第八賴耶を、假りに心王とも稱すべし。假令假りに心王と稱するも。心王の位を失し、第六意識に流轉する以上は、畢竟じて虛名のみ。

信解品の窮子

法華經信解品の窮子は、第六意識と落魄せしものにして。他日大富長者の家名を續て。法王と稱するも、別人にあらず。是れ等は、智者の爲めに言ふべし。愚者の爲めに言ふべからず。然りといへども、近時法相の上に迷惑して、種々の異解を生ず。心王は、頭腦中にある等の說なり。能々工夫せざれば、却て邪說の爲めに誤らるゝに至らん。本論五蘊の虛妄なるを說明するにあたりては。心王心所の取扱ひとは、別段の趣あり。所謂心王も、吾より云はば妄想なり、能緣の相なり。本論所立の大體を知らずして。法相の差排を以て、種々に疑惑するときは。みづから眼を掩て、他の姸媿を說くに等し。若し夫れ內外の相を離れて、一切色心の上を達觀するときは。おのづから明瞭なり。五蘊の中に住して、心王を守護し、無上の寶珠となさば。是れ全く、賊を認めて子となすのみならず。其の賊子を認めて、父となすものなり。願はくは我が心王をして、五蘊の窠窟を出脫せしめんことを。故に余は縱に分別開示し、橫に分別開示して、五蘊の虛構なることを知らしめんと欲す。本論此の一段は、尤も注意して眼を透すべし。即今自他の上に顯はれて分明なり。何を苦しみて、みづから智眼を掩ひ。無量劫來鬼窟裡の活計を甘んじて、色心二法の中に流轉せんや。經曰、以空聚想人於聚落。所見色與盲等。所聞聲與聾等。所齅香與風等。所食味不分別。受諸觸如智證（維摩經）と。是れ即ち、心王心所の惡智惡覺を遠離して、世間に住するの義なり。若し夫れ、一切

賊子を認て父となす

第百二十七段

世界は、五蘊虛構の因緣にあらずと云はゞ、余が所論にあらず。經曰、一色一心生、不可說無量色心、皆如幻故と。一色一心變幻して、不可說無量の色心となる。必ずしも法相の雛形に當るべからず。

第百二十八段

內色外色

或難に曰く、外境の對語は、內心と云ふべし。內心を境と名づくる例なしと。內は識心、外は陰色を以て、內外の二境となすは、法相の通說なり。眼耳鼻舌身意の六識を、內色と名づけ。六根六塵を、外色と名づくることもあり。心の緣ずる處、何の處か境ならざらんや。是れ等の差排は、辨ずるを須たず、おのづから自知するものあるべし。經曰、內外心現妄想、又曰、遠離內外境界、心外無所見（共に伽經）と。

第百二十九段

或難に曰く、三業の行蘊と云ふことは、云はれざることなり。三業とは、身三口四意三の、十種の善惡なり。此の中、身口の二業は、色蘊に屬して、行蘊に屬せず。心はすべて、餘の四蘊に屬すと。

第百三十段

此批難は、誠に的切なり。本論、三業の行蘊と云へるは、行は衆生の作業なり。（三業の二字削除す、その意通ずればなり故に此章は、餘論と見るべし、）一切生滅の心行は、悉く行蘊に屬す。されば。心の行ずる處に、身口意あり。行ぜざれば、身口意なし。身口の二業は、色蘊に屬すとは、

さる事なりといへども。色法が、殺偸淫妄の業を造るといへば。一切の非常も、六趣に輪廻すべし。瓦礫草木も、三界に升沈すべし。本論の此の段は、衆生生滅の心行が、直に身口意の三業に顯はるゝことを、說明せしものなり。身口意業徧滿、虛空といへばとて。虛空に目鼻はなきものなりと、非難するは、其の義を深く解せざるものなり。本論の所說も、おのづから所立ありて。本末始終を約し、未悟の者の爲めに、開通するものなれば。一應に看過すれば、言句の顚倒せしがごとく見ゆるところ多々あるべし。これを將棊に譬へて云はゞ。王將の前に飛車がありても、金將の後に、步兵がありても。大體局面の上より、變化するものなれば。其の關係に應じて、不都合なきことなり。詮ずる所は、無明の敵將を亡ぼして、衆生界の安寧を圖るに過ぎず。

第百三十一段

或難に曰く、同分身、論には、衆同分と說けりと。

第百三十二段

同分身の語も、佛法會通の上に、甚だ必用の言句なり。唯心法界の中に、同分を生ず。何物か身にあらざらん。佛は一切衆生と同分なるが故に、三界我有とも說けり。十善法語に、色聲香味等の諸塵が、皆な妙理と相應して、自心適悅するなり、

山河大地を以て自己の身體とす。草木叢林を以て自己の身體とすとあり。妙理と云ふ怪物あるにあらず。此の心が自己の身邊に執ずれば別業となり。同分の上に現すれば同分身となり。無所住にして住すれば三界我有なり。何の妙理の尋求すべきかあらん。涅槃經には無邊身の菩薩ありと雖も。又敢て他の身邊を妨げず。目に見えぬとて身と云ふべからずと云はゞ余が所論にあらず。要は業識の理を的切に說かんが爲めなり。

第百三十三段

或難に曰く、六識に相續不斷の名を負はするは法相に背けり。六識を斷絕識と名づくることはあり。七識を自他分を知ると云ふ註はたがへり。我を以て體とす、內に向て第八を執ずるの力用ある識なり。此の七識の事唯識第二能變の說あり。起信論にては、これを立てず。第八の解も唯識論の說方とは大に違ふなり。それらも簡びて示すべきなりと。

第百三十四段

六識を相續不斷と云ふは當然の事なり。起信論曰、意識者、即此相續識。註曰意之識。故名意識と。十善法語に意がみづから意といはぬ意の德は此に全し。古往今來是のごとし。此の德頑空無記にあらず。萬象の主となり迷悟の基となると。第七第八の說は實踐修行の人にして首肯すべし。凡夫分際にありては不覺の識なり。唯識論の說き方は兎もあれ我が唯識論は本論の所說のごとし。所謂他に一物あるがごとく思ひ外に求め內に求めて不可得の心を逐ひ廻はすこと無くんばよし。

第百三十五段

或難に曰く、先づ禪定の力を以て、と云へども。初學の行者は先づ其の法相を學びて、而してのちに、これが禪觀を用ふべし。義林章に五重唯識觀を說く。其の定規に暗ければ禪觀邪路に入るべし、と。

第百三十六段

禪定觀察を用ひざれば通達すること能はざるの場合に於ては學者必ず其の修行を要することなり。元來六度に就いてこれを論ずるも布施、持戒、忍辱、精進、世、間大人の通法なり。必ずしも佛の出世を待たず。禪定智慧に至りては獨り黃面老子の專らにする所にして。其の敎化も主として茲にあり。外道も禪定を修すといへども。邪師の爲めに謬らるゝものなれば。佛智慧を發得することを能はず。されば善智識に參じて修せざれば。法相を學びても邪路に入るべし。楞嚴經に五十の魔境を說く。是れ悉く禪觀の上に生ずる病ひなり。楞伽經に

第百三十七段

第百三十八段

は、四種の禪を說く、曰く。愚夫所行禪。觀察義禪。攀緣如禪。如來禪と。禪觀にも、種々の差別あり。必ずしも唯識觀の定規を用ひず。其の師に參すれば、謬ることなし。さりながら、世間の父母、其の子を敎育して、偶〳〵惡子に惱まさるゝことあり。是れも詮方なきことなり。近時、佛道新論と云ふ書を、著述せしものあり。是れ全く、法相學者の敎育せし惡子なり。一讀して、法相學の弊害をも省察すべし。

或難に曰く、意生身の　目は、灰身の聲聞、再たび無漏界に生れ出てたる時の名なり。凡類の上に在ては、決して關係なき名目なり。況て意生身の、六趣に輪廻すると云ふこと。決して云はざることなるをやと。

意生身は、聲聞再たび無漏界に生るゝ時の名に、限るべからず。佛菩薩の上に在て、尤もこれを說く。蓋し神通無礙の身をいふなり。本論の所說は、佛にもあらず、菩薩にもあらず、二乘凡夫にもあらず。しばらく決定の一念を指して、意生身と名づく。一切諸法、以意生形の義なり。此の意生身が迷惑すれば、六趣に輪廻す。覺悟すれば、直に佛菩薩なり。意を以て身となすは、心法の當然なり。佛菩

法身は意生身の別名

六趣に輪廻する者は意生身

薩に在て、種々の法身を說く。是れ皆な意生身の別名なり。彼れ聲聞は誤て一氣息の死漢なり。故に蘇息し來て、無漏界に生ずる時は、殊更に意生身とも名づくべし。經曰。如來與陰。非異非不異楞伽經と。五蘊を以て身となすは、凡夫の當然なりといへども。此の五蘊中に主となるものは意なり。此の意即ち意生身にして、六道に輪廻するも、全く這箇の一念なり。肉身が其の儘、地獄に墮落するにもあらず。餓鬼畜生に趣くにもあらず。されば、此の心は、無相なり、平等なり。無相平等なるものが、三界に升沈し、六趣に輪廻するの謂れもなく。況て成佛するの分際にあらず。この故に、六趣に輪廻するものは、全く此の意生身なり。夢に種々の境を現じ、山河草木人畜も、分明にして。其の中、おのづから自身ありて、苦樂憂喜の受あり。有無得失の見あり。此の自他の境は、全く唯心の所現なり。その唯心の中に在て、作業受果するものは何物ぞ。能々觀察すれば、分明なることなり。汝等。心想佛時。是心三十二相。八十隨形好と。此の三十二相、八十隨形好の佛も、全く意生身なり。諸佛正偏知海。從心想生。觀無量壽經と。此の心想とは、衆生の心想なり。經曰。大慧。不覺外自共相。自心現量。

佛身は妄想の異名

七識身以三解脫無漏惡想究竟斷彼七種識佛名爲惡心出佛身血楞伽經と。佛身といふは、勝妙なる名にして、其の實は妄想の異名のみ。斯く說破せざれば、佛法も戲論となるべし。敢て異說を立つるにあらず、今日世間の人が、心法に暗きが故に、通說するものなり。孝子順孫忠臣義士は固より、此の世界に住し、人々其の名分に應じて、義務を盡す。假令、一兵卒、一邏卒の、其の死を顧みず、國家の難に赴くものゝごとき、各〻其の法身あり。是れ所謂意生身なり。貪欲瞋恚愚癡より生ぜし凡夫の常態にあらず。是等は、或は知らず、無量劫來の聲聞が、灰身滅智より生じて、菩薩道を修行するものにあらざることを。それは兎もあれ、佛智見より看るときは、國土草木までも、悉く佛身なりと云へり。余はかゝる怪しき佛智見を、發得せるものにあらずといへども。一切衆生の意生身は、目前にこれを見る。是れ所謂種類俱生無行作の意生身ならん。菩薩を覺有情と名づく、覺すれば仔細なし。故に斯く說明して、他の覺悟を促すのみ。

第百三十九段

或難に曰く、自身を內分の衆生と名づけ、他身を外分の衆生と云ふこと、新名目なるべし。予多く聞かざる所なりと。

第百四十段

諸佛密藏の所攝

內外衆生の事は、甚深微妙の法なり。性靈集答叡山澄法師求理趣釋經書曰復次有三種心理趣佛理趣衆生理趣若覓心理趣者汝心中能覺者即是又可求諸佛邊不須覓凡愚所若覓衆生理趣者汝心中有無量衆生可隨其覓と。所謂衆生なるものは我が內邊外邊に充滿せり。彼の自身を、內分の衆生と名つくと云ふは、自己身邊に執着せしものゝ非難なり。本論の所說は、我が外境界、我が內境界とあり。是れ等の妙理は、諸佛密藏の所攝にして、尤も難解の法なり。覺悟するものは覺悟すべし。迷惑するものは、迷惑すべし。總て我が事に關からず。高野大師の文中に又曰。余未知公是聖化耶爲當凡夫耶と。公は傳敎大師を斥す。高野大師の智を以て、傳敎大師の聖凡を知らずとせば。今日世間の人を、一概に凡夫なりと臆斷するも、不可なり。悉く聖化なりと臆斷するも、不可なり。余が見所に約すれば、法は對機によりて發明するものなり。聖劣の心を去て、眞實の法を擧揚すべし。世尊因外道問不問有言不問無言世尊良久外道贊歎云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入乃具禮而去阿難尋問佛外道有何所證贊歎而去世尊云如世良馬見鞭影而行碧巖集と。阿難は聲聞衆中、多聞

法は對機によりて發明す

第百四十一段

第百四十二段

第百四十三段

第百四十四段

第一を以て稱せらる。竟に外道の見所に及かず。是故に佛法の名字を知らぬとて、一概に凡夫なり、外道なりとし。己れみづから、法相の妄想中に惑溺せるを知らざるは、淺間しきことなり。

或難に曰く、自受用、他受用を註して、寶主互換云々。經論に未だ言はざるの註なり。是れ報身舍那の上にて、他をして受用せしむべからざるを、自受用と名づけ。十地菩薩をして、所見所聞あらしむるを、他受用と云ふ。決して、互換などの義にはあらざるなり。大圓鏡智云々。これを自受用の本體とすと、

自受用、他受用の趣は、實踐修行の人にして、首肯すべし。所見、所聞の佛身は、即今何の處にか在る。若し不見不聞と云はゞ、佛性斷滅すべし。吾手何似佛手、吾足何似驢脚。此の一大事は、名相に打任かせ置くべきことにあらず。

或難に曰く、月庵の法語、至極よし。但し麁忽に看來れば、大匠に代りて、みづから手を傷つくものあらんと。

月庵の法語を以て、みづから傷つくものは。般若心經を讀誦しても、地獄に墮すべし。佛敎多くは、是等の因緣のみ。

第百四十五段

第百四十六段

諸佛の母

二種の往生

或難に曰く、地獄に父母あると云ふこと、經說になし。地獄は、化生を生ず、餘生を立てず、化生に父母なきこと常なりと。

經曰。衆生、思者。即無始來。一切衆生輪轉五道。經百千劫。於多生中。互爲父母とあり。

五道と云へば、地獄もそのうちなり。時には胎卵の衆生もあることにや。文殊菩薩は、諸佛の母と云へり。是れは正位の菩薩なれば、男女兩性の中に配すれば、男性なるべし。男子が母となるも、謂れなきことなり。摩耶夫人も、諸佛の母と云へり。是れは女人なれば、仔細なし。無量壽經には、二種の往生を說く。其の中。胎生は下品なり化生は上品なり。此の胎生は、文殊の生みしにもあらず、摩耶夫人の子にもあらず、如何せし往生にや、疑はし。經曰、爾時慈氏菩薩。白佛言。世尊何因何緣。彼國人民。胎生化生。佛告慈氏。若有衆生。以疑惑心。修諸功德。願生彼國。不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智。疑惑不信。然猶信罪福。修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歲。常不見佛。不聞經法。不見菩薩聲聞聖衆。是故於彼國土。謂之胎生。若有衆生。明信佛智。乃至勝智。作諸功德。信心廻向。此諸衆生。於七寶華中。自然化生。跏趺而坐。須臾之頃。身相光明。智慧功德。如諸菩薩。具

佛子從佛口生

第百四十七段

足成就。復次慈氏。佗方佛國諸大菩薩。發心欲見無量壽佛。恭敬供養及諸菩薩聲聞之衆。彼菩薩等。命終得生無量壽國。於七寶華中。自然化生。彌勒當知。彼化生者。智慧勝故。其胎生者。皆無智慧。於五百歲中。常不見佛。不聞經法。不見菩薩諸聲聞衆。無由供養於佛。不知菩薩法式。不得修習功德。當知此人。宿世之時。無有智慧。疑惑所致。無量壽經と。是れ等の經義に依てこれを看れば。極樂往生にも、種々の仔細あり。地獄往生、豈に仔細なからんや。法華經には、舍利弗、佛に告て曰く、今日乃知眞是佛子。從佛口生。從法化生。得佛法分と。佛の口より生ずるとは、一段の不思議なり。他はこれを知らず、我が地獄往生の時は、必ず父母ありて生ずべし。人間にも四生あり、一概に論ずべからず。是等の因緣は、識者の一笑に付して可なり。

總說するに、佛法を論釋することは、至難中の至難なり。人々得力の淺深により て、大に其の差排を異にせり。佛法元來多岐あるにあらず。八家九宗、各〻其の門流を立てゝ相ひ容れず。余は淺學薄識なりといへども、彼の八家九宗の門流に彷徨して、多少の見解を求むることを願はず。竊に謂へらく、一切經文は、全く我が心の注釋なり。我が種々の煩惱の上に假名を立てゝ、差排せしものなり。

易往而無人

往生は不生の生

是故に、心を明するには、經を以てし。經を明するには、心を以てし。彼の論釋等の如きは、家々の流風あり。是れ皆な爲めにするところありて、一概に信從すべからず。阿彌陀經に、極樂を說く。曰。過十萬億佛土有世界。名曰極樂と。善導大師は、二河白道の譬を立てゝ、これを判す、其間百步許りと。十萬億の佛土を以て、百步となす。是れ等も一家の所見なるべし。無量壽經曰。必得超絕去。往生安樂國。橫截五惡趣。惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。其國不逆違。自然之所率。何不樂世事。勤行求道德。可獲極長生。壽樂無有極。然世人薄俗。共諍不急之事。云々とあり。其の易往而無人と云ふを、蓮如上人註釋して曰く。無人とは、往生する人のなきことを云ふなりと。是れ一宗の主眼とし、他力難信の一證とせり。余が會釋する所は、これに反す。易往而無人とは、機類を撰ばざることを云ふなり。然らざれば、下の句に接して、何不樂と勸誘するの語、および世人薄俗共諍不急之事と云ふ語、共に文格を失すべし。淨土門の知識達は、往生を釋して。往生は不生の生なりと云へり。是れも、余が會釋する所と同じからず。余は以爲らく、往生とは、此の土より彼の土に生ずることを云ふなり。往はゆくなり、此の土を去て、彼の

第百四十八段
言說之極

土に往き生るゝの義なり。不生の生にあらず。不生の生とは、生滅の法を其の儘に、不生不滅の體相に歸して云ふことなり。ゆゑに不生の生と云へば、往生のみに限るべからず。一切衆生は、其の儘にして不生の生なり。經曰。一切衆生。皆如也。一切法亦如也。衆聖賢亦如也。至於彌勒亦如也（維摩經）と。かゝる場合に用ふる語格なり。是れ等は、家々の宗風ありて、都合よく註釋して、其の宗旨の繁昌を圖れば、孰れにてもよきことなり。深く論ずべき要目にあらず。

起信論曰。謂言說之極。因言遣言。此眞如體。無有可遣。註曰。眞如者。是言說之極也と。

此釋も、余が意に反せり。余は思へらく言說之極因言遣言とは、是れ眞如の名目を論ずるものにあらず。生滅を遣るに、不生不滅の言を以てし、有無を遣るに、非有非無の言を以てし、菩提の名を遣るに、煩惱即菩提と說く等を云ふなり。是れ一切の假名を破して、見著を離するの言句を指す。而して此の眞如の體は、非眞如と遣るべきにあらず。非眞如と遣るべきは、眞如にあらざればなりの義なり。是れ等を、詮索すれば、諸經論の中に多々なり。其の是不是は、各ゝ得力の淺深にうち任かせて可なり。盲人の相ひ集りて、一切の色像を論ずるは、到底無益の事なれば。病眼の療治が、何より大切なるべし。彼の臨濟大師の、貧瞋癡を以て、三界を釋せしも。無理と云へば、無理なり。三界を一時に踏み倒すの作略ありと云へば、一段の力量なり。畢竟機に應じ時に應じて、差排するは。佛法の無戲論なる所以なり。

第百四十九段
大梵王生萬物

所謂佛說も、悉くは黃面老子の建立にあらず。一切の名字言句は、大概色法の上に立つるものなれば。經文中の名字言句も、多くは印度の古說俗說、および外道の通語なり。梵天の一切世界を造ると云ふは、梵天外道の說なり。經中に、如大梵王生萬物（觀心地經）とあり。華嚴經に、時斯匿王起立白佛。我昔未承諸佛誨勅。見迦旃延毗羅胝子。咸言此身死後斷滅。名爲涅槃。我雖值佛。今猶狐疑。云何發揮。證知此心不生滅地とあり。涅槃も、外道の通說なり。五蘊及び因果の說も、見所こそ異なれ、悉く外道の說く言句なり。僧衣のごときも、外道出家の服にして、黃面老子の制作にあらざるよし。戒法も、根本性戒、即ち十善戒のごときは、劫初梵天の所說なり。四大五大の說、須彌および天體の說も、固より印度の古說にして。菩薩所學の五明のことときも、ことゝく然り。

第百五十段

淨土の建立

諸法は衆生の建立

されば一切の色法は、凡夫の見聞覺知によりて、建立せしものにして。佛の出世を須たざることなり。唯この色法の上において、心法を明し、轉迷開悟せしむるが。佛の本懷なり。譬へば、聖王治國の法のごとし。亡國の民を除くにあらず、亡國の言語を去るにあらず、亡國の器物を改むるにあらず、一切の色法を、其の儘にして。法非法を差排し、善不善を分別して、國を興すに過ぎず。是故に、佛說淨土の建立も、全く人間相應の色法なり。金銀瑠璃等は、人間の所欲にして。禽獸蟲魚にこれを示すも、鐘呂を以て、爰居を饗するに同じかるべし。曾て人あり、余に問て曰く、西方の淨土は、佛の方便建立なるべしと。余が曰く、然らず、眞實に此の事あり。其の人驚て曰く、斯く廣大の金銀を以て土となすとは、誠に信ずべからざる事なり。余が曰く、廣大の金銀は、子の邊にあり。子が貪愛を離るれば、金銀も瓦礫におなじ。子が貪愛に相應して、金銀あり。廣大の金銀を以て、淨土を建立するは、黃面老子にあらず、全く子が建立せるものなり。一切の諸法は、悉く衆生の建立せしものにして、如實なり。これを佛の方便建立と云ふは、謗佛者の言ふことなり。三界六道もなほ然り。佛世尊を誹謗することなかれ。經曰、諸

第百五十一段

佛自口說
佛弟子說
仙人說
諸天說
化人說

佛淨土亦又空也（維摩經）と。よく〳〵工夫すべし。此の人は、淨門の人なりき。經曰、一切諸名皆假施設、未出前世諦幻法、無名無義、亦無體、無三界名、善惡果報、六趣名字（仁王經）と。是れは名字と義理とを、正しく差排して、教化するを云ふなり。世諦幻法と云へば、一切內外の色法なり。無名無義とて、佛出世の曉までは、一切の衆生、悉く聾啞なりと云はゞ、不通の論なり。大智度論曰、佛一切智人、自然無師、不應從他聞法、而說佛法、非但佛口說者、是一切世間眞實善語、微妙好語、皆出佛法中。如佛毗尼中說、何者是佛法、佛法有五種人說、一者佛自口說、二者佛弟子說、三者仙人說、四者諸天說、五者化人說、復次如釋提桓因得道經、佛告憍尸迦、世間眞實善語、微妙好語、皆出我法。とあり。されば、黃面老子の言說にして、始めて佛法なりと云はゞ。恐らくは佛法も、一種の魔說ならん。されば、黃面老子の舌頭に付き廻り、自語他語、悉く佛語たることを知らざるものは。誠に佛教中の外魔とも云ふべし。

第百五十二段
佛語心

二種生往滅
流注生
相生住
流注住
相住滅
三種相
轉相
業相
眞相
三種識
眞識現識
分別事識
宋譯魏譯唐譯

佛道本論卷之六　一名法供養

萬法唯心なりとは、所謂佛家の常談なり、諸經論中、一句一偈、固より心外の法に渉らず。就中楞伽經は、佛語心を以て宗旨とせり。ゆゑに識心の差排は、この經を以て諸經中の隨一となす。彼の起信論のごときも、全く此の經によりて、論明するものなり。此の經は、一しほ難解の經なり。自心現量を究覓するものにあらざれば、通達することあたはず。余いま彼此を對校し、識心甚深の義を明し、以て本論の會通を助くべし。經曰、佛告大慧、諸識有二種、生住滅（魏云、諸識各有二種生住滅）非思量所知（魏云、非思量者之所能知。○唐云、非聰度者之所能知）諸識有二種生謂流注生（二俱作相經）及相生。有二種住謂流注住（魏云、識有三種相）及相住。有二種滅謂流注滅。及相滅。大慧、諸識有三種相謂轉相。業相。眞相。（一者轉相識、二者業相識、三智相識）大慧、略說有三種識、廣說有八相。何等爲三。謂眞識。現識。及分別事識。（魏云、大慧有八種識、略說有二種、何等爲二。一者了別識二者分別事識、○唐云、大慧識廣說有八、略則唯二、謂現識及分別事識）大慧、譬如明鏡持諸色像（ナリ）現識處現。亦復如是。大慧、現識及分別事識。此二壞不壞相。展轉因（魏云、彼二種識無差別相遞共爲因、○唐云、此二識無異相、互爲因）と。此の經共に三譯あり、一には宋譯、二には魏譯、三には唐譯なり。今引くところの經は、宋譯を本とし、魏唐二譯の異同を示すものなり、學者宜しく參看して、經義を發明すべし。流注を相續となすは、流注相續、同義なればなり。ゆゑに今經に、流注滅を、相續滅と說きし處あり。曰、大慧、相續滅者、相續所因滅（スレバ）則相續滅と。是れなり、又魏譯には、識と說き。今經には、相と說き。魏唐二譯には、識を畧說して、二となし。今經には、三となす。これらの異同には、拘泥すべからず。相ひ通じて、發明すべし。現識を、魏譯には、了別識と名づく。是れ現識に、一切法を了別するの義あればなり。起信の所謂、能見能現の義なり。能見より云へば、了別識の義なり。能現よりいへば、現識の義なり。且つ唐魏兩譯には、現識および分別事識を以て、差別の相なしと說き。異相なしと說く。名相に拘泥するときは、會通することと難し。學者の尤心得べきことなり。

第百五十三段
眞識
現識
分別事識

余は此の經義を會通するに、八識の差排を以て根柢となし、本論五蘊の章に照して、密意を闡明すべし。所謂眞識とは、阿賴耶識の別名なり。現識とは、末那識の別名なり。分別事識とは、意識の別名なり。其の阿賴耶識を、眞識と名づくるゆゑんは、不壞不滅の義によるなり。其の藏識と名づくるは、善惡の種子を含藏す

意

傳送識

意識

種々の塵を取る無始の妄想熏

るの義によるなり。經曰。佛告大慧。如來之藏。是善不善因。能徧興造一切趣生。譬如伎兒變現諸趣。離我我所。と。また以て眞識藏識の、無差別なるを知るべし。其の意と名づくるは、藏識の業種子を執持して、須臾も捨離せざればなり。經曰。受用建立身。是衆生現識と。或は傳送識の名あり、第八識の業種子を、分別事識に傳送するの義あるによると云ふ。此の說は階級の說なれば、取るべからず。これを要するに末那識は、現見の識なり。諸識に徧じて、其相尤も分明なりといへども。所現に轉ぜられて、却て覺悟しがたし。經意を約するに、意識も、意識といふ別相あるにあらず。前五識の上において、分別を生じ。及び妄想の熏習によりて、種々に分別思惟するが故に。分別事識と名づく。經曰。大慧。取種々塵及無始妄想熏。是分別事識因と。種々の塵を取るとは前五識の上に於て。分別を生ずるを云ふ、無始の妄想熏とは一切の衆生、無始より以來種々に妄想して。深く自心に熏染し現境に應じ。忽然として生起す。その生起せる念相をまたも分別するを云ふなり。經曰。大慧。不思議熏。及不思議變。是現識因。（唐云。了別識。不可思議熏變因。○唐云。現識以不思議熏變爲因。）と。

不思議熏

不思議變

轉相

業相

眞相

第百五十四段

第百五十五段

意に五種の名あり

彼の末那識は、前五識および意識の、現見の所變に應じ、及び過去の不思議熏によりて、自境界を現ずるを云ふなり。其の不思議熏とは、自然の熏習を云ふ。不思議變とは、現見の所變を云ふ。內外の因緣によりて、おのづから種々の熏習あり。隨て現見に轉變あり。なほ後章に於て、詳細に論明すべし。

識に三相あること、經の所說のごとし。此の三相は、諸識の常恒に轉變生滅するを轉相と名づけ。その轉相の上に、善惡業の動くを、業相と名づけ。たとひ轉變生滅して、善惡の業を起すも、自心を離れざるがゆゑに、眞相と名づく。經曰。大慧。譬如泥團微塵。非異非不異。金莊嚴具。亦復如是。大慧。若泥團微塵異者。非彼所成。而實彼成是故不異。若不異者。則泥團微塵。應無分別。如是大慧。轉識藏識眞相。若異者。藏識非因。若不異者。轉識滅。藏識亦應滅。而自眞相實不滅。是故大慧。非自眞相識滅。但業相滅と。微塵および金を以て眞相に譬へ。泥團莊嚴を以て、轉相業相に譬ふ。

起信論曰。以依阿梨耶識說有無明。不覺起。能見能現。能取境界。起念相續。故說爲意と。この說爲意とは、末那識を云ふなり。即ち能見の故に、能現の故に能取境界の故に、起念相續の故に、我を以て體とするなり。又曰。此意復有五種名。云何爲五。一者

業識轉識現識

智識相續識

耶耶不覺の相に三種の相あり

無明業相

能見相境界相

名爲業識。謂無明力。不覺心動故。二者名爲轉識。依於動心。能見相故。三者名爲現識。所謂能現一切境界。猶如明鏡。現於色像。現識亦爾。隨其五塵對至。即現無有前後。以一切時任運而起。常在前故。四者名爲智識。謂分別染淨法故。五者名爲相續識。以念相應不斷故。

されば業識轉識現識智識相續識、ともに意の名を得るといへども、前の三種をもつて、全く末那識の本分となし。後の二種を以て、意識の名を立つ。何となれば智識相續識は、五種の中に於て、尤も猛利の力用あればなり。

現識分別事識の無差別

にして、互に因となるの說をも參看すべし、

論曰。言意識者。即此相續識。依諸凡夫。取著轉深。計我我所。種々妄執。隨事攀緣。分別六塵。名爲意識。亦名分離識。又復說名分別事識。此識依見愛煩惱增長義故。

と。而して彼の末那識は、賴耶不覺の相に就て、名を立つるものにして。

謂はゆる無明業相、能見相、境界相、これなり。

論曰。依不覺故。生三種相。與彼不覺相應不離。云何爲三。一者無明業相。以依不覺故心動。說名爲業。覺則不動。動則有苦。果不離因故。二者能見相。以依動故能見。不動則無見。三者境界相。以依能見故。境界妄現。離見則無境界。

と。此の無明業相は、即ち業識なり。能見相は、轉識なり。境界相は、現識なり。此の業轉現を約して、末那識となす。故に曰。以依阿梨耶識說有無明。

境界に六種の相あり

智相相續相執取相計名字相記業相業繫苦相

不覺起。能見能現。能取境界。起念相續。故說爲意。とこれなり。しかして起念相續の相によりて、彼の智識相續識を說く。この智識相續識に、分別事の相あるが故に、分別事識の名を立つ。賴耶不覺の上にありては、智相、相續相、これなり。

論曰。以有境界緣故。復生六種相。云何爲六。一者智相。依於境界心起。分別愛與不愛故。二者相續相。依於智故。生其苦樂覺心。起念相應不斷故。三者執取相。依於相續緣念境界。住持苦樂。心起著故。四者計名字相。依於妄執分別假名言相故。五者起業相。依於名字尋名取著。造種々業故。六者業繫苦相。以依業受果。不自在故。

と。このゆゑに、境界相の上に現はるゝ智相、相續相は、全く智識相續識にして。此の智識、相續識は、卽ち意識なり。其の執取相、計名字相起業相、業繫苦相は、意識の力用にして、妄想の次第を說くものなり。ゆゑに曰。依諸凡夫。取著轉深。計我我所。種々妄執。隨事攀緣。分別六塵。名爲意識。と。又曰。此識依見愛煩惱增長義故。と。總じて緣起の法は、形と響とのごとく、愈〻動て愈〻變ず。自己の妄想によりて、境界の相を現じ。名字を計し、業を起して、苦樂に繫縛せらるゝものなり。別の子細なしといへども、此の意と意識の力用によりて。心識の上に相續して、種々の迷惑をおこす。故に曰。現

壞不壞の相

識及分別事識此二壞不壞相展轉因と。抑も壞不壞の相とは、水性と波瀾とのごとく、心海を動搖するの原因なり。起ると思へば滅し、滅するかと思へば起る。波は水を離れざるが故に、壞にして不壞なり。此の句、尤も難解なりとす。

第百五十六段

經意によるに、彼の現識は、種々境界の相を現じ。其の分別事識は、これを思惟分別して、生滅を起すを轉相と名づく。此の轉相によりて、種々の業相を生ずるものとせり。今これを起信論に對校すれば、いさゝか相違あるものゝごとしといへども。經は、現識を本とし、論は、業識を本として說くものなれば。本末の差排、おのづから同じからず。是れ緣起の法として、環の端なきがごとく、孰れを本とし、孰れを末とするも、妄想の前後なれば。別に是非の分あるにあらず。これを要するに、經の現識を本とするは、眞識の緣に觸れて、發見するものを、現識となし。現識ありて境界あり、境界ありて、分別事識あり、分別事識ありて、種々の業相あり。斯くの如き生滅の法は、彼の眞識を離れざるが故に。其心に熏習して賴耶の業種子となる。この義によりて、現識を本とす。論の業識を本とするは、不覺に心の動く、これ業識なり。動かざれば、生滅なし。生滅によりて、轉識あり。轉識によりて、現識あり。現識により

經は現識を本とす

論は業識を本とす

第百五十七段

て智識相續識あり。此の義によりて、業識を本とす。經に謂はゆる外境界風、飄蕩心海、識浪不斷となし。論は如是衆生自性清淨心、因無明風動と云へり。是れ等の差別によりて、おのづから差排の異なる所あるものに似たり。元來無明といふは、境界を了せざるによりて、不覺に心の動ずる義なり。ゆゑに論曰、以一切心識之相皆是無明と。もし一切心識之相皆是無明と云はゞ、無明が心を動ずるにあらず、其の動ずるところ即ち無明なり。現ずるところ、即ち無明なり。故に經の現識を本とし、外境を緣とし、其の中に轉相業相を說くは、論の所說よりも、分明なるものゝごとし。

經曰、譬如明鏡現衆色像、大悲猶如猛風吹大海水、唐云、或頓生、譬如明鏡現衆色像、或漸生、猶如猛風吹大海水、外境界風。飄蕩心海、識浪不斷、唐云、心海亦爾、境界風吹、起諸識浪、相續不絕、因所作相。異不異。唐云、因所作相、非一非異、○魏云、因事相故、遞共不相離故、合業生相、深入計著、唐云、業與生相、相聚深縛、不能了知色等自性故、五識身轉、大悲即彼五識身俱、因差別分段相知。是意識因、唐云、與五識俱、或因子別差別境相有意識生、と。明鏡の譬喩は、起信論に同じ。これ單に、現識を明するものなり。海水の譬喩は、兼て業相轉相を明す。この譬喩に

明鏡海水の譬喩

よりて、現識の上に、業相轉相のあることを覺悟すべし。故に、經に初めは三相を說き、後に三識を說く、初めの三相は、轉相、業相、眞相、これなり。眞相とは、波は到底水性を離れざるを云ふなり。轉相とは、波の生滅の相なり。業相とは、この生滅によりて、常に心海を動搖するを云ふなり。後の三識とは、眞識、現識、及び分別事識、これなり。眞識とは水は元來その濕性を具するを云ふなり。心性に、本來の智性なければ、轉識は藏識に異なり、彼れ波の生滅を受くるは、水なり。諸法の生滅を受くるは、眞識なり。此の生滅を受けて、業相を現ず。此の業相の所依を以て、阿賴耶識の名を立つ。故に曰、轉識藏識、眞相。若異者。藏識非因。若不異者轉識滅、藏識亦應滅と。又曰、若自眞相滅者。藏識則滅。大慧。藏識滅者。不異外道斷見論議と。この故に、假令轉識滅し、業相滅するも、自眞相は不滅なり。なほ波瀾の滅するも、水の濕性は、變ぜざるがごとし。これを起信論には、智淨相と說く、曰。智淨相者。謂依法力熏習。如實修行。滿足方便故。破和合識相。滅相續心相。顯現法身智淨故。此義云何。以一切心識之相。皆是無明。無明之相。不離覺性。非可壞。非不可壞。如大海水。因風波動。水相風相。不相捨離。而水非動性。若風止滅。動相則滅。濕性不壞故。如是衆生自性

智淨相

清淨心。因無明風動心。與無明俱無形相。不相捨離。而心非動性。若無明滅。相續則滅。智性不壞故と。また以て眞識の相を覺悟すべし。其の現識とは、顯現の識なり。彼の轉相業相も、此の現識の上に起ること、水面を離れて、波瀾の生ぜざるがごとし。其の分別事識とは、境界の相に、愛と不愛との見を起し、種々の妄想を生ずるものなり。これを三識となす。經曰。因所作相。異不異。合業生相。深入計著。不能了知色等自性故。五識身轉。大慧。即彼五識身俱。因差別分段相。知當知是意識因と。これなり。因と所作との相は、異にして異ならずとは、風性と動相と、異にして異ならざるを云ふなり。風を因となし、動相を所作と見るべし。經義によるに、外境界の風、即ち色等をいふ。論は無明と說く、聊か差別あるものに似たりといへども。是れにはさしたる仔細なし。謂はゆる合業生相深入計著を所詮となす。是れ全く、色等の自性は、自心現量なることを知らず。此の不覺心のために、色等に轉ぜらるゝが故に、五識身轉ず、即ち轉相の仔細なり。此の經意によりて、論の無明業相能見相、境界相の差排をも、知ることを得べし。業は、無明業相なり、生相は、境界相なり、意識は、彼の五識と俱に生ずる差別分段の相を知るに、因起するものなり。差別分段の

第百五十八段

相とは、別々に見え分かれたるを云ふなり。此の差別分段の相は、彼の五識身と俱生す。この差別分段に、愛と不愛との見を生ず。是れ業と生相とを合し、深く計著に入り、分別相續す。即ち意識の力用なり。故曰。因所作相。異不異と。能く工夫すべきことなり。（業は因なり、生相は所作なり、）

是の故に、八識ともに、眞識を離れず。八識ともに、現識を離れず。此の眞識現識の上に、眼耳鼻舌身意の六識の差別あり。此の眞識、即ち阿賴耶識なり。此の現識、即ち末那識なり。末那は、阿賴耶識の不覺の相に就て、名を立つるものなり。故に業轉現ともに、末那識に攝す。本論に謂はゆる、內外の分を知て、自他の法を現ずるものこれなりとはこの事なり。法相家の所謂、內に向て第八を執ずるの力用ありといふは、彼の轉相によりて、業種子を相續するが故なり。波瀾の生滅が、直に心海の動搖となる。此の心海の動搖は、波瀾生滅の力用なり。內外と云へば、賴耶は一段の奧に在り、末那は手前にありと思ふは、其の者の妄想なるべし。佛法も、斯く夢物語になり行きては、法滅は久しからず。よく〳〵自心現量を究竟して、法相を學ぶべし。

第百五十九段
心識の總說

如來藏

心識を總說するに、此の心の不生不滅の相を、眞相となす。生滅の相を、轉相となす。生滅と不生不滅と、一にあらず、異にあらず、是れを業相となす。故に業相の所依を、藏識となし。この藏識の不覺の相を、末那識となす。此の末那識に因て、境界分段の相を分別するを、意識となすなり。しかるに賴耶は、單に業因の上より、名を得るものにあらず。經曰。凡夫無智慧藏識如巨海業相猶波浪依彼等類通。又曰。大慧。善不善者。謂八識。何等爲八。謂如來藏名識藏心意意識及五識身。非外道所說。大慧。五識身者。心意意識俱。善不善相。展轉變壞。相續流注。（唐云。善不善相展轉差別相續不斷。）不壞身生。亦生亦滅。唐云。無異體生生已即滅。不覺自心現。次第滅餘識生。（唐云。不了於境自心所現。次第滅時。別識生起。）形相差別攝受。意識五識俱相應生。利那時不住。名爲利那。（唐云。意識與彼五識共俱。聖教種種差別形相。利那不住。我說此等名利那法。）と。是故に、如來藏は、阿賴耶識の異名なり。心意意識、および五識身を攝す。若し心意意識のほかに、如來藏ありと見るは、外道の所說なり。論曰。心生滅者。依如來藏故。有生滅心。又曰。復次。生滅因緣者。所謂衆生。依心意意識轉故。又曰。是故。一切衆生。不名爲覺。以從本來念々相續。未曾離念故。說無始無明。と。經と論とを對校して、發明す

寂滅の相

覺悟

不思議業相

無明業相

有氣息の死漢

べし。夫れ如來藏とは、衆生の自性清淨心をさすものにして。此の自性清淨心、何によりて生滅を生じ、善不善の因となるかを、論究せんがために、藏識の因緣を說くものなり。此の藏識は、覺不覺の上に通じて、所立するものなれば。たとひ轉識滅し、業相滅するも、此の藏識は不滅なり。此の不滅の相を、寂滅の相と名づく。此の寂滅の相は、心海澄清にして、一點の波瀾なしと覺悟するを、聲聞緣覺の見となす。何となれば、波瀾止滅して、寂靜なるは、心海の相なり。心海の相を執るは妄想にして、覺悟にあらず。覺悟と云へば、たとひ波瀾流動しても、水性は不動なり、故に其の動相の上に悟入して、不動相を覺悟するを、覺悟と云ふなり。若し心海澄清、波瀾不起を以て、究竟となさば、一たび外境界に對するときは、依然として動相を生ず。何となれば、如來藏によるがゆゑに、生滅の心あればなり。生滅は此の心の力用なり。これを起信論には、不思議業相と說く、若し自心現量を覺せざるときは、この不思議業相、即ち無明業相となる。彼れ二乘凡夫は、生滅を懼れ、禪定の力を假て、灰身滅智に入る。これ全く外境界を捨離したる、有氣息の死漢なり。妄想の干物と云ふべし。經曰、如來之藏是善不善因能偏興造一切趣

疑人面前說夢

妄想の干物

【第百六十段】

一大疑問

生と。大抵の凡夫は、思惟して以爲らく、業相滅するときは、善不善の因なし。何として如來之藏、善不善因となれる。彼の業相は、不覺の相なり。無明業相なり、此の無明業相を以て、如來藏の所作となさば、成佛不成佛の沙汰も、甚だ謂れなきことなりと。是れ一大疑問なり。この疑問は、惡智惡覺の、よく解する所に非ず。ゆゑに彼れ法相學の徒は、徒らに名目に拘泥し、種々に差排して、終に灰身滅智に引導す。彼の佛道新論を著述せしものなども。一たび法相學者の引導により て、此の窠窟に陷いりしものと見えたり。さすがに氣息の絕えざりしにや、蓋めきいだし、口を極めて佛法を誹謗す。その累引て黃面老子に及ぶ。是れ全く癡人面前說夢し過ちなり。老子在世においても、曾て謬りて、聲聞緣覺の機類を養成す。後ち大に驚き、菩薩乘を說く。維摩を倩ひ來り、相ひともに、口をきはめてこれを、彈呵すといへども。藥毒深く骨髓に入り、全く妄想の干物となり果てゝ終に救醫すべからず。誠に憐むべきことなり。

經曰、譬如海波浪是則無差別諸識心如是。異亦不可得。心名採集業。意名廣採集諸識識所識現等境說五。魏云、心能集諸業。意能總集境識能了所識五識現分別。唐云、心能積集業。意能廣積集了別故名識。對現境說五、義疏曰、秖此如來

藏。第一義心。擧體而爲藏識轉識。譬如祇此濕性。擧體而爲海波浪也。第八名心者。採集爲義。以其無覆無記。能受熏習。能藏種子。故從採集業得名也。第七名意者。以其有覆無記。恒審思量。自內我法。第八識恒受生死。第八如庫藏。第七如守庫人。非我計我。非法計法。熏此我法二執種子於藏識中。不得清淨。と。守庫人を以て第七識に比するは。我を以て體となすと云ふの說に謬らるゝものゝ如し。かく說きては第八と第七と、庫の內外を隔てゝ、自心現量の上に、惡差別を生ず。されど義疏の說は、大に淺學の者の爲めにする所あり。故に今ことさらに之れを示す。余が解釋する所を以てすれば、心は採集業なり。種々の業を採り集めたるものなり。經の謂はゆる、無始妄想熏、不思議熏等、これなり。意は廣採集なり。廣く採り集るもの

採採業

廣採集

なり。眼に色を採り、耳に聲を採り、鼻に香を採り、舌に味を採り、身に觸を採り、種々の名相を採り集めて、現識の上に現ず。此時、おのづから心に熏染して、採集業となる。內にこの種子を執持して動くが故に、意となす。本論五蘊の受想の段を參看すべし。諸識識所識とは、眼に色を識る、耳に聲を識る等なり。諸の識は、その知識する所を識るの義なり。色等を限界して識るが故に、五種識の名あり、

諸識識所識

眼識は、色を見るといへども、聲を聞くことあたはず。耳識は、聲を聞くといへども、色を見ることあたはず。六根各〻異なればなり。就中意識は別根なし、五根を合して意根となす。ゆゑに分離識とも云ふ。經曰。意識五識。俱相應生。又曰。五識身俱。因差別分段。相知。當知是意識因と。唐譯曰。心能積集業。意能廣積集。了別故名識。例せば、夢中に夢境を現ずるも、現識の力用なり。現識生ずれば、境界生ず。境界生ずれば、意識も生じ。業相轉相その中にあり。また以て現識の理を悟るべし。

分離識

第百六十一段

經曰。青赤諸裸色波浪悉無有。採集業說心。開悟諸凡夫。彼業悉無有。自心所攝離。唐云。本無起。自心所取離。所攝無所攝。唐云。能取及所取。與彼波浪同。受用建立身。是衆生現識。唐云。身資財安住衆生識所現。於彼諸業等如水波浪。唐云。是故見此起與浪無差別と。

自心現の影事

鼻舌身識の所攝も、ともに海の波浪のごとく、此の心の了別分別の相にして、實體あることなし。採集業を心と說き、以てもろ〳〵の凡夫をして覺悟せしむるなり。何となれば、採集業を心と說き、その業相を一々分別して、元に還さば、內外の法不可得なり。本論五蘊の章を參看すべし。凡夫の人は、自心現の影事を採り集めて、心と思へり。鏡中の色像を見て實有の見を立つるに同じ。海面の波瀾

灰身滅智

を認て、水性を忘れたるがごとし。故に自心の所攝を捨離するときは、見著を離るゝが故に、所攝なし、彼の波浪と同じ。波浪に波浪の實體なく、全く水の所攝なり。この所攝は、實有にあらずと、覺悟すれば。波浪の儘にして、所攝を離するなう。譬へば、自身の影を畏るゝときは、其の影が奇怪をなすが如し。若しこれは、自身の影なりと覺悟すれば、其影法師に付き廻りて、種々の分別を生ぜず。これを離るゝと云ふ。若し影を邪魔なりと見て、取り除かんと欲するときは、其の影は、いよ〳〵種々の奇怪を現ずべし。彼れ二乘の禪觀に住して、灰身滅智に入るは。恰も闇室に坐して、眼を閉ぢたるがごとし。影は見えざれども、甚だ謂れなきことなり。受用建立身。是衆生現識とは、即今是非得失愛憎好惡するところの者によりて、此の身を現ず。その受用建立する所、いづれか衆生の現識にあらざらん。彼の蟻子の、種々の不淨を集めて、受用するがごとし。物に取不取の別あるにあらず、彼れが好惡によりて、得喪を生じ。其の貪愛に相應するものは。彼れが受用なり、現識なり。此の現識の上に、種々の業を造る。類を集め業を長じて、東奔西走す。その所作、容易ならず。故曰。於彼現諸業。譬如水波浪。と。風性に。

第百六十二段

不壞相有八

不壞相
壞相

波浪の相なきも、風水相ひ因るときは、波浪生ず。青赤諸樣色等に、取不取の相なきも、業と生相とを合し、深く緊著に入る。これ即ち一切衆生の現識にして、受用建立の身なり。よく〳〵工夫すべし。

經曰。譬如海水變。種々波浪轉。七識亦如是。心俱和合生。謂彼藏識處。種々諸識轉。譬如海水動。種々波浪轉。梨耶識亦爾。種々諸識生。唐第三句云。藏識亦如是。餘三句並同魏。謂以彼意識。思惟諸相義。不壞相有八。魏云。心意及意識。爲諸相故說。○唐云。心意及意識。爲識相故說。無相亦無相。魏云。諸識無別相。非見所見相。○唐云。八識無別相。無能相所相。と。藏識は巨海のごとし、轉識は波浪のごとし、故に此の藏識の處において、種々の諸識の轉相あり。此の轉相の上を、意識を以て分別す、不壞の相に八あり、謂はゆる八識これなり。色に轉ずる不壞の相を、眼識となす。聲に轉ずる不壞の相を、耳識となす。香に轉ずる不壞の相を、鼻識となす。味に轉ずる不壞の相を、舌識となす。觸に轉ずる不壞の相を、身識となす。分別に轉ずる不壞の相を、意識となす。境に對して轉ずる不壞の相を、末那識となす。業因に轉ずる不壞の相を、藏識となす。不壞の相とは、生滅の相を、不生滅の體に約し。壞相とは、一生一滅を云ふなり。一生一滅の上

妙觀察智

に、斷絶せざるの相あり。是を不壞の相と名づく。經の謂はゆる五識身者、心意意識俱と。これ壞不壞の相なり。又曰、相續流注、不壞身生、亦生亦滅と。これ不壞の相なり。譬へば、彼の波と水とのごとし、波は一生一滅なりといへども、水は不生不滅なり。故に水の在るところ波生ず、彼の藏識の處において、種々の諸識轉ず。波は水を離れざるが故に、波の生滅するところ、即ち不壞の相なり。諸識は、此の心を離れざるが故に、諸識の轉ずるところ、即ち不壞の相なり。此の八種の相は、意識を以て思惟するものにして、本來は無相なり。無相亦無相は、有相亦無相の誤りなるべし。されば、八識甚深の義も、彼の意識を以て決定するものなれば、この意識ほど、諸識の中において、猛利なるものはなかるべし。故に覺悟の上より、これを名づけて妙觀察智となすも、さることなり。義疏曰、若依今文釋者、於八識中唯第六意識最爲猛利能思惟種々諸相而此種々諸相若約不壞假名則第八以集起爲相第七以染淨爲相第六以偏能分別爲相前五以各塵了境爲相故有八也若其體則秖是識性所謂第一義心。如水與波同一濕性如金與器同一實性故無八識差別之相亦無能緣所緣相見二分也と。藏識および末那識の義は、前後に通じて、自得すべし。名相に局るときは、はなはだ解しがたし。故に余は、本論において、先づ五蘊の理を論明し、其の識を論ずるに、一々これを五蘊に配當す。斯くの如くならざれば、容易く人をして會得せしむること難し。曰く、識蘊は、衆生心の根本なり。又曰く、七に末那識とは、自他の分を識て、內外の法を現ずるもの、これなり。八に阿賴耶識とは、萬法を含藏す、故に藏識とも名づ

識蘊は衆生心の根本

前五識

最後識

根本識

色身即ち阿賴耶識阿賴耶識より因緣して諸識を生ず

ず。凡夫の人は、第六識を認めて、自心と思へり。其の末那賴耶の二識のごときは、不覺なるものなり。又曰く、心識の差別は、種々の名目ありといへども、大槩は、この八識の差別にて、盡せるものなり。而して眼耳鼻舌身を、前五識と名づく。此の前五識の因緣によりて、第八賴耶より、悉起するものは、末那識なり。內は末那識により、外は前五識により、生ずるものを、意識となす。故に意識は、最後識なり。賴耶は根本識なり。又曰く、余が見所に約すれば、阿賴耶識なるものは、別物ならず。直に此の色身、即ち眼耳鼻舌身より、毛髮爪齒五臟六腑まで、是れ其の物なり。又曰く、謂はゆる色蘊のあるところは、阿賴耶識の體なり。受蘊の在る

第百六十三段
色心の二法

一大事因緣

ところは、即ち眼耳鼻舌身識の生ずる所なり。想蘊のあるところは、即ち末那識の生ずる所なり。行蘊のあるところは、即ち意識の生ずる所なり。唯一の阿賴耶識より、因緣して、諸の識分を生ぜりと。本論五蘊の章に就て、參看すべし。

萬法唯心なり、強て內外の法を分つて、色心の二法とす。經曰、內外心現妄想と。

又曰、世間相續性。妄想之所熏。唐云、諸趣分別起。無明爲其因。心則從彼生。乃至色未生。中間有何分。唐云、未能了色。來中間何所住。相續次第滅。餘心隨彼生。唐云、無間相續滅而有別心起。不住於色時。何所緣而生。以從彼生故。不如實因生。唐云、若緣彼心起。其因則虛妄。と。

起す。謂はゆる相と名とは、妄想の自性なり。五法三自性の義を、能く工夫すべし。抑も諸色に種々の相あり、其の相によりて、種々の假名を立つ。其の假名に迷て、妄想を生ず。斯く云へば埒もなきことなりといへども、五蘊に就て、よくよくこれを觀察するときは。此の色心の二法は、全く衆生界建立の因緣なり。佛の一大事因緣と云ふも、此の義に外ならず。是故に受と云ひ、想と云ひ、行と云ひ、識と云ふも、悉く此の心の、色法によりて緣起せし相なれば。受想行識ともに、色

想蘊

行蘊

無始妄想熏

法を離れざる心法の差別の相と知るべし。受とは、此の心に感受するを云ふなり。想とは、假名の妄想なり。行とは、生滅相續して、水の流るゝがごときものなり。識とは、知覺なり、此の知覺は、妄覺なるが故に、無明の名あり。謂はゆる識識所識これなり。識するところを識て、みづから不覺なり。此の妄覺が、受に起るを、眼耳鼻舌身識と云ふ。此の眼耳鼻舌身識によりて、自心に熏染するを、不思議熏と云ふ。此の不思議熏が、想蘊なり。其想に起る妄覺が、末那識なり。此の末那識によりて、境に攀緣するを、意識と名づく。五蘊を以て云へば、行なり。何となれば、意と意識と、互に轉相業相を因緣す。其の轉相業相の流注相續するが、行蘊なり。故に意識は、行に生ず。念々分別して、須臾も住らず。色を分別するかと思へば、聲を分別し。內を分別するかと思へば、外を分別し。善を分別するかと思へば、惡を分別し。天を分別し、地を分別し、乃至一切現識の上を分別す。故に經曰、現識及分別事識。此二壞不壞相。展轉因。大慧。不思議熏。及不思議變。是現識因。大慧。取種々塵及無始妄想熏。是分別事識因と。謂はゆる無始妄想熏とは、無始以來、種々に分別惡見を生じて、心識に熏染せしものなり。其の不思議熏とは、色受

不思議熏

不思議變

の分際に應じ、不思議に熏染せしものなり。元來生滅は不思議なり、生ずれば、色身こゝに附添ひ來る。色身附添ひ來るが故に、受あり。受によりて、知覺あり。其の知覺するところの諸法を、自然に熏習せり。思量分別の上より、求め來るものにあらざれば、これを不思議熏と云ふ。其の不思議變とは、色と心と相ひ因緣して、おのづから所變あり。少年となり、大人となり、男子となり、女人となり、強者となり、弱者となり、勇者となり、怯者となる。此の種々の變相は、全く不思議變なり。此の不思議熏不思議變が、まさしく現識の因なり。經曰。受用建立身。是衆生現識と。これを五蘊の中に攝すれば、想蘊の義なり。本論五蘊の段を參看すべし。

第百六十四段

流注生滅は、行蘊にして。此の行蘊の上に生ずる知覺を、意識なりと云はば、一應解し難き樣なれども。能く工夫すれば、必ず通達する所あるべし。經曰。大慧相續滅者。相續所因滅。則相續滅。所從滅。及所緣滅。則相續滅。魏云。相續滅者。相續因滅。則相續滅。因滅。緣滅。則相續滅。○唐云。相續滅者。謂所依因滅。及所緣滅。即相續滅。大慧所以者何。是其所依故。魏云。大慧所謂依法依緣。○唐無。依者。謂無始妄想熏。緣者。謂自心見等識境妄想。魏云。依法者。謂無始戲論妄想熏習。依緣者。謂自心識見境界分別。○唐云。所因依者。謂無始戲論虛妄習氣。所緣者。謂自心所見分別境界。と。

流注生滅の相

第百六十五段

相生滅

ことなし。所依とは何ぞや、彼の謂はゆる自心見等の識境の妄想熏是れなり。所緣とは何ぞや、現境の上に生ずる妄分別にして、彼の謂はゆる自心見等の識境の妄想これなり。見とは、見つきなり。識とは、知覺なり。彼の分別の見は、諸の識境の上に起り、以て妄想するものなり。この所依所緣によりて、相續不斷なる、これを流注生滅の相といふ。五蘊に攝すれば、行蘊なり。故に意識は行に生ずと云ふは、不當の言にあらず。流注生滅の因と、分別事識の因と、異ならざればなり。故に意識を相續識とも名づく、能く工夫すべし。

相生滅とは、心相の上に生滅あるがごとく見ゆるを云ふなり。生ずれば、有るがごとく思ひ、滅すれば、無きがごとく思ふ、これを相生滅と名づく。彼の波浪の凹凸を見て、生滅の想をおこし。鏡中の色像を認て、種々の分別を生ずるがごとき なり。經曰。大慧。若覆彼眞識。種々不實諸虛妄滅。則一切根識滅。是名相滅と。彼の

相滅

一枚悟り

麁細の生滅

眞識を覆ふ種々の不實諸の虛妄とは、色法差別の相なり。六塵虛妄の差別を泯するときは、此の心一枚にして、異相なし。即ち一切の根識滅すと云ふ、これを相滅と名づく。楞嚴經曰。如大虛空參合群器。由器形異名之異空。除器觀空。說空爲一。彼太虛空。云何爲汝成同不同。何況更名是一非一。則汝了知六受用根。亦復如是。とこれなり。彼の流注生滅の因は、無始の妄想を、熏染するものなれば、深く心地に染み付きて、容易に取除きがたし。動もすれば、此の熏染せる業種子が、緣に觸れて動き出だし、現識の上に流注して、相續生滅するものなり。此の流注生滅を斷ぜざれば、眞實解脫の境界にあらず。禪門に一枚悟りと云ふことあり。是れは相生滅を斷じたる一枚見識の上に滯り。流注生滅の、何物たるを知らざる分際を云ふ。起信論には、此の相生滅、流注生滅を、麁細の生滅と說く。相生滅を、麁となし、流注生滅を細となす曰。復次。分別生滅相者。有二種。云何爲二。一者麁。與心相應故。二者細。與心不相應故。又曰。此二種生滅。依於無明熏習而有。所謂依因依緣。依因者。不覺義故。依緣者。妄作境界義故と。論と經と、大同小異なりといへども、經は、無始妄想熏、および覆彼眞識種々不實諸妄想等を、因となす。故に其の原因を詳かにし

涅槃の境界

て、學者をして開悟し易からしむ。論には、動もすれば、無明と說く。故に學者誤り解して、一種無明と云ふものありと思へり。これらは、尤も省察すべきことなり、然からざれば、即今無明なり、即今不覺なり。法相學者の無明を說くは、眞に無明と云ふべし。不覺を說くは、眞に不覺と云ふべし。

經曰。大悲。我所說者。妄想識滅。魏云。見虛妄境界分別識滅。○唐云。分別衞炎識滅。名爲涅槃。大悲白佛言。世尊。不建立八識耶。佛言。建立。大悲白佛言。若建立者。云何離意識。非七識。魏云。何故但言意識轉滅。不言七識轉滅。佛告大悲。彼因及彼攀緣故。七識不生。魏云。以依彼念觀有故。轉識滅。七識亦滅。意識者。境界分段計著生。習氣長養藏識。唐云。意識分別境界。起執著時生。諸習氣長養藏識。壞身相。魏云。彼二種識。無差別藏識相。○唐云。無別體相。藏識因攀緣。唐云。藏識爲唐云。執著自心所現境界。心聚生起。展轉爲因。自心現境界。計著心聚生。展轉相因。譬如海浪。自心現境界風吹。若生若滅。亦如是。唐云。而有迴滅。是故意識滅。七識亦滅と。余は涅槃を求むるものにあらず。妄想を除くものにあらず。黃面老子は、意識滅するときは、七識もまた滅して涅槃の境界なりと云へり。それはさもあるべし。余は意識を心王なりとす此の意識は、恰も幻師のごとし、藏識

意識は轉相の主

藏識は地面の如し

意識滅

第百六十七段

に種々の物を取集め時々にとりいだし來り、境に對して變現自在なり。此の經意は、既に前段において、說明し了せり。彼の意を廣採集と名づくるときは、末那識なり、意と譯す。いまは意識を以て、藏識を長養して、意と俱なりと說く。抑も。意識は、轉相の主なり。內を轉じ、外を轉ず、一切の心海を、かきまぜるは、意識なり。此の世間を紛亂するも、這箇の所作なり。世間の心王となりて、萬法を差排す。此の心王が不覺なるによりて、萬法も無明となる。彼の藏識のごときは、地面のごとし。能く物を含藏し、因緣に相應すれば、善惡の業種子を現ず。これを心王と云ふは、しばらく方便の說なり。謂はゆる衆生心地、猶如大地、ものなり。されば、意識と藏識と、一異を云ふべからず。金と莊嚴とのごとし、斯く通達するを、意識滅すと名づく。この意識が滅するときは、佛道も滅し、涅槃も滅し、佛身も滅し、八識の分劑も滅す。謂はゆる通身一條の生鐵のごときものなり。假名滅して、眞實のみ存せり。夢の覺めたると一般なり。

起信論は、名目のみ繁多にして、誠に會通しがたし、恰も目錄帳を讀むがごとし。總じて天竺の學風は、名目の繁多なるを以て高尙なる者となせるに似たり。外道の二十五諦を說くを以て、其の一斑を知るべし。黃面老子は、其の非を知るものなりといへども。當時の習尙なれば、折衷して、名相を用ひ、學者を釣り出たすの道具となせり。然れども、四諦六波羅密等を以て、其の大槩を盡す。滅後に至り、佛徒たるもの、動もすれば、外道と爭論を起し。名目名義を以て勝を爭ひ、終に大乘を捨てゝ、小乘を固守す。小乘は、佛法の名目經なればなり。大乘は、實際經なるが故に、唯に妙用を說て、名目を論ぜず。是故に、佛徒も、小乘にあらざれば、外道と爭論して、名目分別の勝を制するに足らざるが故に。大乘を捨てゝ、小乘に歸依せしものと見えたり。馬鳴大士これを歎き、起信論を著はす。大乘の法相、これより次第順叙あり。其の名目の多きは、彼の名相學者を釣り出すの手段なるべし。是れ一應の說なり、起信の名相は、大乘の至極と云ふべし　遺教經論も、大士の作なり、これは一段の力量あり。經文の名字に關せず、自在に取扱ひしは、絕代の智識なり。斯くてこそ、佛法の本分と云ふべけれ。後世法相學者、いたづらに論釋に付き廻り、畢生佛法中の妄想者となる。斯くては、寧ろ佛法と云ふもの、世間に流布せざるにしかず。流布すればこそ、これに付き纏ひ、人の子弟臣民を愚弄し。地獄極樂の說等を以て、

名目經
實際經

佛法中の妄想者

銳氣を挫き精力を減耗す

貪愛畏怖の心を長ぜしめ、大に他の銳氣を挫き、精力を減耗せしむ。故に余は以爲らく、秦の始皇を、九原より喚び起し來り、一切經文を焚き捨てたらんには、却て眞實の佛法も、現前するなるべし。經曰。復次。大慧。當說名句形（魏作字。唐作文。）身相善觀名句形身相菩薩摩訶薩隨入義句形身（唐云。諸菩薩善觀此相了達其義。）疾得阿耨多羅三藐三菩提。如是覺已。覺一切衆生大慧。名身者。謂若依事立名。（唐云。謂依事立。名即是身。）是名名身。句身者。謂句有義身自性決定究竟。（唐云。諸能顯義決定究竟。）是名句身。形身者。謂顯示名句。（唐云。謂由於此能成名句。）是名形身。又形身者。謂長短高下。（唐光有曰。句身者謂諸字名各差別。如從阿字乃至呵字。乃接此句。○魏釋亦有三句。）又句身者。謂徑跡。（唐云。如足跡。）如象馬人獸等所行徑跡中人畜等跡。得句身名。大慧。名及形者。謂以名說無色四陰。故說名。自相現故說形。（唐云。名謂非色四蘊。以名說故。是名名句形身說名句形身相分齊。應當修學。）故文。謂名之自相由文顯故。

一切經文も、此の名句形身なり。此の名句形身によりて、決定の義を發得すべし。若し名相に滯り、法相に付きまとふときは、佛說も魔說となる。爾時世尊。欲重宣此義而說偈言。名身與句身及形身差別。凡夫愚計著。如象溺深泥。と。

第百六十八段

五法相名妄想如如正智

三自性妄想自性

緣起自性

經意によるに、五法三自性、八識二無我の義を、覺了するを、眞實の佛道となす。其不覺なるを、愚人の法となす。何をか五法と云ふ、一には相、二には名、三には妄想、四には如如、五には正智これなり。經曰。大慧。相者。若處所形相色像等現。（唐云。謂所見色等形狀各別。）是名爲相。若彼有如是相。名爲瓶等。即此非餘。（唐云。依彼諸相立瓶等名。此如是此不異。）是說爲名。施設衆名顯示諸相瓶等心心法。是名妄想。（唐云。心心所法。是名分別。）彼名彼相。畢竟不可得。始終無覺。於諸法無展轉離不實妄想。（唐云。彼名彼相。畢竟無有。但是妄心展轉分別。如是觀察。乃至覺滅。）是名如如。眞實決定究竟自性不可得。彼是如相。（唐云。眞實決定究竟根本自性可得。是如如相。）我及諸佛隨順入處。普爲衆生。如實演說。施設顯示。（唐云。如其實相開示演說。）於彼隨入正覺不斷不常妄想不起。隨順自覺聖趣。一切外道。聲聞緣覺所不得。（唐云。若能於此隨順悟解。離斷離常。不生分別。入自證處。現於外道二乘境界。）是名正智。とあり。而して、此の五法の自性を詮ずる時は、約して三自性となす。三自性とは、彼の名、および相、これを妄想の自性と名づく。これによりて、妄想を生ずればなり。彼の妄想は、心と心所の法を生ず。譬へば、日と日光の俱に現ずるがごとく、彼の心と心所の法を生ずるを、緣起の

成自性

二無我
人無我
法無我

名相の流に隨ふ

自性と名づく。しかして彼の正智、および如如なるものは、眞實にして壞すべからざるがゆゑに、これを成自性と名づく。經曰。衆相及緣起。彼名起妄想。彼諸妄想。相從彼緣起生。唐云、依於緣起相、妄計種々名、彼諸妄計相、皆因緣起有、覺慧善觀察、無緣無妄想。成已無有性。云何妄想覺。唐云、眞實中無物、云何起分別。と。謂はゆる八識なるものは、畢竟妄想の分別にして、彼の不實の名相に、緣起するものなれば。これを三自性の中に攝するときは、緣起の自性なり。其の二無我は、彼の我と我所と、共に緣起虛妄の相なれば。此の二法を捨離して、人無我、法無我を生ず。故に三自性に攝すれば、謂はゆる成自性なり。經曰。大慧。自心現妄想。八種分別。謂識藏、意、意識及五識身。相者不實、相。妄想故。我我所、二攝受滅。二無我生。唐云、於自心所現生執著時、有八種分別起、此差別相、皆是不實、唯妄計性、若能捨離二種我執、二無我智、即得生長。と。是を總說するに、凡夫の常として、名相に執著し、自心の流散を悟らず。種々の相像を現じて、我と我所との見に陷いり。貪欲瞋恚愚癡の所作によりて諸の業を積聚す。此の積聚によりて、妄想を生じ。自から纏て、解脫の分なし。是れを名相の流に隨ふと名づく。故に經曰。彼相者。眼識所照。名爲色。耳鼻舌身意意識所照。名爲聲香味觸法。是名爲相。又曰。彼妄想者。施設衆名。顯示諸相。如此不異。象馬車步男女等名。是名妄想。唐云、分別者、施設衆名、顯示諸相、謂以象馬車步男女等名而顯其相、此事如是、決定不異、是名分別。又曰。正智者。彼名相不可得。猶如過客。唐云、謂觀名相互爲其客。諸識不生。不斷不常。不墮一切外道聲聞緣覺之地。とあり。されば自性眞實の義に通達せんと欲する者は。必ず先づ名相を觀じ。名相によりて、妄想の分際を知り。妄想によりて、如如の理を了じ。如如の理によりて、正智を開くべし。若しそれ三自性の名相に滯り、八識の分際に流轉するものは。畢竟自心現量の法に、種々の妄見を立つるものにして。これもまた名相の流に隨ふものといふ可し。謂はゆる三自性は、一自性なり。一自性は、三自性なり。妄想の自性とて、取るべき惡むべきにあらず。緣起の自性とて、外にすべきにあらず。成自性とて、取るべきにあらず。此の經意は、自心現の量を離れて、內外我他、および凡聖の差別なきことを、解說せしものなれば。眞實の學士は、深く工夫を下して、取不取の見に陷いることなかれ。經曰。是名五法。三種自性。八識。二種無我。一切佛法悉入其中。唐曰、普普攝。是故大慧。當自方便學。亦教他人勿隨。於他。唐云、汝應以自智善巧通達、亦勸他人令共通達通達此已、心則決定、不隨他轉。と。

第百六十九段

法相學者の流風

余は本論において、教の名相に就て、これが秘奥を闡明するの意なし。只世出世に通じて、佛法の要旨を論明せんと欲し。本論四卷を著述して、これを世の謂はゆる善知識に正す。竊かに其の示教をうけ、始めて此の世間に、一種法相學者の流風あることを知り。或難を辨じ、尋て心識を論じ、力を極めて、其の窠窟を打破し、佛語の會通を講明す。夫れ佛法は、自心現量の外に、一法もあることなし。故に名字に泥み、法相に滯るときは、經論も、一種の妄想學となれり。經曰。大慧。彼諸癡人。作如是言。義如言說。義說無異。所以者何。謂義無身故。魏云。以義無體相故。言說之外。更無餘義。惟止言說。唐云。是人不了言音自性。謂言即義。無別義體。大慧。彼惡燒智。魏云。彼愚癡人。○唐云。彼人愚癡。不知言說自性。不知言說。生滅義。不生滅。大慧。一切言說。墮於文字義。則不墮離性非性故。無受生亦無身。二俱云。離。有離無故。無生無體故。大慧。如來不說墮文字法。文字有無。不可得故。除不墮文字。唐云。唯除不墮於文字者。○魏云。如來說法。依自聲說。不見諸字是有無故。不著名字。大慧。若有說言如來說墮文字法者。此則妄說。魏云。若人執著名字說者。彼人不名善說法者。○唐云。云。若人說法墮文字者是虛妄說。法離文字故。唐云。諸法自性。離文字故。是故大慧。我等諸佛。及諸菩薩。不說一字。不答一

二種通相宗通

字。所以者何。法離文字故。非不饒益義。說。唐云。非不隨義而分別說。言說者。衆生妄想故。大慧若不說一切法者。教法則壞。魏云。法斷滅。教法壞者。則無諸佛菩薩緣覺聲聞。若無者。誰說爲誰。是故大慧。菩薩摩訶薩。莫著言說。隨宜方便。廣說經法。唐曰。應不著文字。隨宜而說。以衆生希望煩惱不一故。我及諸佛爲彼種々異解。衆生。而說諸法。令離心意意識。故不爲得自覺聖智處。唐云。我及諸佛。皆隨衆生煩惱解欲種種不同。而爲開演。令知諸法自心所見。無外境界。捨二分別。轉心意識。非爲建立聖自證處。と。當に知るべし、佛法は多般なし、一切衆生をして、心意意識を轉ぜしむるがための故に、若干の言說を費す。敢て一法の他にあたふべきものなし。自覺聖知處を得るがためにせず。されば所得の見を以て、他人を惑亂するは、尤も邪魔といふべし。然りといへども、言說なければ、教法すなはち壞せん。教法壞。則無諸佛菩薩緣覺聲聞。若無者。誰說爲誰と。誠に是非なきことなり。此の義に通じて、偏見を生せず、教法を護持するは、菩薩大人の一大事なり。されば宜しく宗通說通の差別を知りて、度生の願を起すべし。經曰。佛告大慧。一切聲聞緣覺菩薩。有二種通相。謂宗通。及說通。魏云。一者建立正法相。二者說建立正法相。○唐云。宗趣法相。言說法相。大慧。宗通者。謂緣自得勝進相。唐云。謂自所證殊勝之相。遠離言說文字妄想。趣無漏界自

覺地自相遠離一切虛妄覺想降伏一切外道衆魔緣自覺趣光明輝發。唐云離於文字語言分別入無漏界。成自他行超過一切不正思覺伏魔外道生智慧光是明宗通相云何說通相。謂說九部種々教法離異不異有無等相。以巧方便隨順衆生如應說法令得度脫是名說通相と。宗通は、自心現量を打破し、衆流を裁斷し、一句半句、或る時は懸崖のごとく、或る時は大火聚のごとく、或る時は熱鐵丸のごとく、これに接するものは、喪身失命す、これ即ち宗通の相なり。其の說通の書は、此世間に汗牛充棟なり。蓋し異不異有無等の相を離れ、巧方便を以て、衆生に隨順して、これが度脫を得せしむるものは稀なり。多くは異を立てゝ、衆生を縛するものなり。是れ等は、說通者の妄想趣に、他を誘ふものなれば、佛法中の外道とも稱すべし。今時禪門の徒、やゝもすれば、古人の宗通に擬して、一機一境の上に、無一物を荷ひ來り、胡亂に言句を吐き、みづから欺き他を欺く。これも甚だ言ひ甲斐なし。元來宗通の力量あるものにあらざれば、說通することは難し。たゞ〳〵其の力量を具する底の人あるも、宗旨は宗旨の風ありとなし、みづから小天地をつくり、區々たる道場を固守するも、詮なきことなり。具眼の人は、省察して、何とぞ佛法の興隆を圖るべし。余は其の任にあらずといへども、方今法難の時にあたり、護法の一助に、之れを論明して、いさゝか四恩に奉答せんと欲す。本論言說の錯雜もあるべし。其の義を取て、其の言を取ることなかれ。

佛法中の外道

說通

明治十七年冬十一月、不識道人、山吹の村莊にしるす。

佛道本論跋

世之評得庵居士者皆曰。先生不出。如蒼生何。居士之責。可謂重矣。然是非知居士者也。居士豈漠視斯民者哉。詭激誤身。吾何敢爲。肥遯遺世。天不允之。嗚呼居士之身亦窮矣。頃者不見居士數月。聞其在高田莊。往而訪焉。居士出其所著佛道本論見示。展而閱之。縷載佛徒修業之法。井井有條不紊。拾級而升。盈科而進。無復一毫方便虛假之說。殆古人未經言者。施諸家國天下。無不可也。抑我邦佛徒。自古受爵祿於朝。自任護國之責。十善四恩。汲汲之務。使民悔罪遷善。有過儒者經世之功。大與支那諸國異撰。是蓋獲釋子眞訣者。雖

有浚民膏營寺塔等譏。其實一國人心所歸。不可不察也。居士好文。常稱韓愈闢佛諸篇。切中其病。惜大顚文暢輩未達佛之精微。無以諭愈。今斯書發揮眞諦。駕軼千古。余信其用意與孔孟憂世之念無異。而其所謂精微之說。則亦未得受教爾。然余嘗竊謂大道出乎天備於人。萬象森然昭布。故君子之學。動靜語默。唯道之從。至誠無已。則本體活潑流行。可以與天地參。是之謂聖功。是之謂成佛。其理本無二致。根於自知之明。擴而充之。躬驗實行以致之。非思議所能及也。屢見居士言之。居士掉頭曰。否否未達。有時喜溢眉間。曰。足下大言亦可畏也。豈謂余可教者。非邪。世之所謂豪傑者。自持太高。不能與人相下。所以莫能相尙。居士名滿天下。自視欿然。深愛吾儕狂言無隱。其於人無所著相。諄諄誘掖不倦。自今以往。德業之進。其可測度乎。本論刻成。因叙前言附卷尾。併告世人。

明治十八年一月

佛道本論終

阿波岡本監輔撰

廣長舌

教育原論

人心は本是れ明鏡の如く、而して感應尤も鋭敏なるものなれば。外面幾多の事物に觸るゝごとに、其の影像を明中に留めて紛然たり。是に於て先覺者あり、是非を差排し善惡を判別して、以て、取捨去就の道を敎ふ。人この敎に因て、始めて去就の智を生じ、取捨の見を立て。是非を是非とし、善惡を善惡として。而して後彼の紛然たる物、始めて整理す。人の人たる所以の道、是に於てか定りぬ。されば人心に、本より是非善惡の體あるに非ざること、猶明鏡に、青黄赤白の色なきが如しと雖も。然れども善と知りては安んじて移り、惡と聞ては惡み避る情は、おのづから其中に在りて存す。是故に先覺者は、實に斯情の上に、是非善惡の差排を立て。後覺者は、此の差排に因りて、取捨去就の道を知れり。斯の如く一切の是非善惡は、先覺者の知識によりて發明せらるゝものなるが故に。其の是非善惡の差排は、古今萬國に通じて、一定貫通するものあり。一定貫通せざるものあり。甚しきに至りては、是非善惡を反對にするものあるに至る。其の故何ぞや、蓋し其の時所位の分界と、關係とを以て、これが差排を立つるが故に。其の先覺者の智識も、亦おのづから其の分界と、關係とに由りて、發揮する所を異にせり。是れ是非善惡の、古今萬國同一軌轍に出づること能はざる所以なり。

其中古今萬國一定貫通して、是非善惡の原則とも云ふべきものは。物の生を助け保つを善とし、之を傷つけ害ふを惡とするもの、是なり。是は一切萬物は、生を遂ぐるに艱むのみならず。其生を愛するの情と、死を惜むの情とは、殆ど生類の心なりと云ふべきほどのものにて。其の分界と關係とを問はず、同一轍に出づるが故に。其の之を傷つけ、害ふことは、其の性情に反するのみならず。謂はゆる其のみづから生を艱むが上に、又これを艱ましむるは、尤も理に悖るの事なればなり。是故に人にまれ、蟲にまれ、禽にまれ、凡そ生とし生けるものを殺傷するは、惡にして。之に反して、助け保ちて、生育を遂げしむるは、善なること勿論なり。若し夫れこれが分界を立てゝ、差排する時は。人間は、人間の上に於て差排し。

即ち人間一類の上に通じて、善惡を立て、必ずしも禽獸に及ばざるべし。又或は一國を限り、一世を限りて、分界せらるゝ事のあるのみならず。其の關係因緣によりて、大に相通ぜざる事もあるべし。例せば佛戒に、敵軍門に至る、之を殺さゞるは殺生戒を犯すとあるが如し。佛の殺生戒は、世と出世とに通じて、立てたるものなれば。生類を殺すは、在俗の人たりとも、違犯とせり。然るに其の大殺生と名づくる人を殺すを以て、却て不殺生となし。之を殺さゞれば、犯戒となるとは。尤も非常の言なりと雖も。是れは此れ所謂關係の上より、善惡を差排するものにして。殺すものは、人にあらずして敵なり。其軍門とあるは、敵を防ぐの人を云ふ。夫れ敵てふものは、我が人民とか、我が國家とかを、討亡ぼすものなれば。之を許す時は、其の國家を覆へし、其の人民を殺傷せらるゝが故に。之を殺さゞれば、却て殺生戒を破ることゝはなれるなり。均しく是れ人なり、而して、敵に對しては、敵に對しての是非善惡あり。況や親と名づけ、君と名づけ、夫と名づけ、友と名づくるに至りては。彼の敵に於ける義理のあるが如く、一々其の關係の上に、因緣の實相ありて、種々に差別せざるべからず。されば一概に、一般の平等論を以て、是非善惡を定むるは。戲論なり、空論なり、異端なり、邪說なり。何となれば其の因緣の實相を、一々破壞して、是非善惡の名は、悉く顚倒し盡くすが故なり。況や又其の時、其の所に因りて、相應不相應等の事ありて、法非法、理非理の差排も、其の上に生じ來るに於てをや、例せば、夜寢るは時なり、晝寢るは非時なり。寢るに善惡はなけれども、時と非時とによりて、善となり惡となる。大小便利の如きも、便所にすれば所なり。便所ならざる所にすれば非所なり。便利に是非はなけれども、所と非所とに因りて、是となり非となる。一切の事物、之に準じて知るべし。

されば時所法理等の事を以て、一切の事物を、一々規律して、是れ善是れ惡、是れ是是れ非と、指示すとも。其の時變じ、其の所變じ、國を異にし、俗を異にする時は。却て彼れの時も、此れの非時となり。彼れの非所も、此れの所となり。非法非理も、法理となり。法理も、非法非理となり。是非善惡の名、悉く顚倒せん。是等の事は、隨分例多き事なりかし。今日世界の諸先覺者が、發明せし事物を、悉く取集めて、之を我が國家に加へんとする時に當りては。能々取調べて、間違ひなきや

うにせざるべからず。教育の任に當るもの、若し此の取調べを間違へて、一歩針路を誤る時は。一國内の人にして是非を異にし、善惡を別にして、恰も異類異種の人間を以て、一國を造り成しゝ如くなるべし。敢て請ふ、今日の先覺者よ、國家の教育を興起して、異邦異國の教育を回顧すると勿れ。又請ふ、今日の父兄よ、子弟の教育を監督して、異種異類の人間とならしむること勿れ。能々是非の差排を正し、善惡の判別を明らかにして。以て取捨去就の道に踟躕すること無んば好し。

儒教大意

曩に同方會幹事諸君は、余の演説を求められたり。余は非才淺學にして、いかやうに説き立つるとも、諸君の御耳を煩かすに足るもの無し。已むを得ざれば、唯心に浮び來れる事どもを、口に任せて説き出さんとの覺悟なりき。然るに強て演題を要せられしゆゑに、取あへず儒教の大意と定めぬ。されども余は儒者にあらざれば、余が説くほどの事は、諸君も亦既にこれを知らるゝならん。然れども更に一方より觀れば、近年來西洋流の學説、大にその勢を逞しうして。世人は東洋の學問は、陳腐なり、迂濶なり、決して用をなさず、取るに足らずとまで、放言せるに至るがゆゑに。儒教の如きは、高閣に束ねられて、人口に上らざることも亦久し。是時にあたりて、此の問題を持ち出でゝ、其の必用功能を説き立つるは、却て裨益なきにあらざるべし。

かゝる席に於て、堂々たる演説をせんには。其の説く所の要領綱目次第順序等、豫め起草して置きたらんには、説く方も、聞く方も、雙方互に便宜を得る事なるべきに。余は性質疎懶にして、筆を執る事を好まざるがゆゑに、用意こゝに及ばざりしは、今更詮方無し。故に最初の覺悟の如く、隨意放言、以て諸君の清聽を煩はさんとす、諸君請ふ之を恕せよ。

さて儒道は、支那にては、程子朱子を始め、巨多の碩學あり。日本にても、仁齋徂徠、その他の學者輩出して、これを講明したるが故に、東洋の學問にては、頗る研究を盡せるものなり。但その研究は常に一致することを得ずして。往々諸家おの〳〵其の説を立て、中には氷炭相容れざるもの有るは、諸君の知る所なり。これ

を要するに、益々研究して、益々分裂せる現狀あり。今余が說かんとする所は、研究すればするほど分かるゝ如き、朱子陽明の流にもあらず、訓詁考證の學にもあらず、儒道の大體、すなはち儒道はいかなる所を根據として、立てたるものなるかを論究せんと欲するなり。そは古人は、斯の如き大體上に於ては、却て研究を盡せしものあらざれば。これを　究すること、蓋し無用にあらざるべければなり。本題に入るに先だちて、まづ儒道の成り立ちを說かざるべからず。そも〳〵儒道は、その源を唐虞の昔に發し、それより夏殷周の三代を經過する間に、數聖人の手を歷て、漸次に成立したるものにして。周公と雖も、孔子と雖も、一より十まで手を下して、一時に作爲せしものにあらず、即ち時代と共に發達したるものなり。是れ佛敎耶蘇敎などゝ、其の成り立ちを異にする所なり。此事は、一應心得置かざれば、前途に至りて、理學上不便を來すことあれば、一言辯じ置くなり。

次に一歩を進めて、儒道の地盤を說かん。さて儒道は、いかなる處を根據として、立てたる者なるかと云ふに、今人の謂はゆる哲理に尤も近く、全く人情を地盤として、其の上に組織せられたるものなり。樂而不淫、哀而不傷と云ふが如きも、人情に基きたる語にして。人情、聖人之田也と云ふが如きは、其の尤も較著なるものなり。（人情を以て、慾となすが如きは、宋學の說にして、聖人の旨を得たるものにはあらざるべし、）なほ其の情に基づく事を確知せんには、孟子性善の說を見るべし。惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也、と云ふが如き、皆人情の謂ひに非ざるは無し。唯孟子は、情の字を明示せざりしのみ。其は情は、即ち性の動いて外に現はるゝものなるがゆゑに。其の現はるゝ情にして善なれば、其の根本なる性の善なることは、云はずして明らかなればなり。此の道理を明らかに會得せざれば、性善の說は、到底解すべからざるのみならず。此の事は儒敎上に最も緊要なる一大事なれば、能く〳〵明らめ置くべし。

情と云ふものは、斯くの如く大切なるものなるがゆゑに、其の伴なる想と云ふものを持ち來りて、今一層これを慥かめ置かん。佛敎には情想と云ふ熟字ありて、情に想を伴はせたり。想とは、「おもはく」と云ふ意義にて、即ち私が「おもはく」と云ふ是れなり。親を見れば、親の想を爲し。兄を見れば、兄の想を爲し。學者に對すれば、學者の想を爲し。富者に對すれば富者の想を爲す。是れみな想にして、

謂はゆるおもはくなり。猶おし廣めて申さば、太陽は中天に止まりて、地球はその周邊を旋轉すとは、天文學者の定說なれども。即今誰か地球の旋轉する想を爲すもの有らんや。地球は斯の如く動かずして、太陽はいつも東より昇りて、西に沈むの想を爲せり、又天は地球を裹みて、地の外面は、上下四方みな天なれども。しかれども、天は上に位し、地は下に在るの想を爲すは、萬人一轍なり。誰か又夜間は、地球の裏面に在て、人其の上に逆立ちすと想ふもの有らんや。是れ他無し、此世に生れ出てしより以來、見聞するに伴れて情が動き。その情が知らず識らず熏習して、自然にかゝる想を結び來れるものなり。されば約めて云はゞ、此の想てふものは、直に是れ人間世界なり。若し此の想を破却する時は、直に此の人間世界が破れて、仙界やら、佛界やら、將た魔界やら、殆ど名狀すべからざる有樣に成り果つべし。されば此の想は、情と相伴ひて、至極大切なるものにて。取も直さず人間世界なるが故に、決してこれを動かし驚かすべからず、況やこれを亂り破るべけんや。

情と想とを理會し去れば、初めて本題に入ることを得べし。然れども今一つ道

德と云ふ事を辨へざれば、不十分の憾有り。そも〳〵道德てふものは、一應は善美なるものと思はるれども。道の字たる、古人必ずしも善のみに用ひず。其は先王之道、夷狄之道と云ひ、君子之道、小人之道と云ひ、又父の道と云ふなど、其の冠らす所の文字に依りて、善ともなり、惡ともなりて、道の字自身を、直に善なりとは謂ふべからず。德も亦然り、吉德凶德と云ひ、淑德悖德と云ふを以て見るべし。其は吉人凶人、君子小人とも、各々その德有るべく。農夫には農夫の德あり、工商には工商の德あり、盜賊には盜賊の德あるべし。要するに其の道に入れば、おの〳〵其の德を成すものなり。是れ獨り余が私言に非ず、韓退之もすでにこれを言へり。曰く、道與德爲虛位、仁與義爲定名、と。是れなり。夫れ仁とは物を助け、義とは理に合はするの謂なるがゆゑに、惡人の仁、小人の義などゝは謂ふべからず。是れ定名たる所以なり。道と德とは、虛位なるが故に、今これが定義を下すには、聖人君子の道。吾人人間の道と謂はざるべからず。其は夷狄之道にもあらず、禽獸の道にもあらず、惡人の道にもあらず、盜賊之道にもあらざるが故なり。又儒道は儒道と云はずして、聖人之道、先王之道と云へり。其故は、聖人先王は、吾

人の爲めに、斯教を人間に立てたるが故に。おのづから聖人の道、先王の道とは稱するなり。老子莊子も、固より道德に據て說を立てたりと雖も。其の地盤とする處、彼の謂はゆる人情にはあらで、別に一機軸を出したり。是れ諸子の道の聖人の道に異なる所以なり。故に儒道は、人間世界の完全なる道德と認めて可なり。然れども、若し一方より論じたらんには。老子は老子の道あり、莊子は莊子の道有りて、老莊ともに、其の妙處渺なからず、是れ即ち老莊の道德にして。老莊其の人の德の光なり。唯、聖人の謂はゆる道德と、其の途を殊にするのみ。以上道德の事も、儒と老莊刑名などゝの分かるゝ所も、略辯じ了りぬ。諸君にも定めて理會せられしならん、故に今は進みて本題に取かゝるべし。

儒の教たる、これを名づけて名教と云ふ。（前に陳べし如く、道德は、老莊にもあれども、名教は、老莊には絶て無くして、獨り儒教の專らにする所なり。）名教とは、讀て字の如く、名を定めて教を立つるの意義にして。親を親と名づけ、兄を兄と名づけ、大は君臣より、小は一家の間に至るまで、先これが名を立て。さて其の名の間に、分際と云ふもの、即ち親には此の如く、兄には此の如く、君には箇樣、臣には箇樣との分界を定め。其の名と分とに相應するやうに、教へ導くものなり。是れ名教の稱ある所以なり。さて此の名教は、いかなる處に據て、組織したるものかと云ふに。謂はゆる情より起りて、而して想に成るものなり。其は試みに思へ、他人の親を見て、我が親なりと想はんとするも、決して能はず。他國の君を見て、我が君なりと想はんとするも、決して能はず。又天文學者が、いかに舌を爛らして、地動說を說くとも、余輩は即今地球の旋轉するの想を生ぜず。人類學者が、如何に筆を禿して、進化說を唱ふるも、余輩は此身直に猿の子孫なりとの想は起らず。唯是等は、其筋の學者の研究すべき、學問上の理にして。人間の想にあらざれば、名教外の沙汰なること勿論なり。

又想はおのづから窮極する所有るものなり。人各々子あれば孫あり、孫あれば曾孫あり、曾孫あれば玄孫あり、今之を追究して、玄孫のその玄孫に對する時、その愛情如何んと問はゞ、誰もこれに答ふること能はざらん。又これを尊屬に操り上れば、父より祖父、祖父より曾祖父、曾祖父より高祖父ならん、高祖父のその高祖父に對する時は、其の恩情如何んと問はゞ、是れ亦答ふること能はざるべし。是れ他無し、想にはおのづから差等の存する有りて、漸次盡くる所あるが故なり。

故に名教は想の及ぶ所の範圍内に立てざるべからず。されば弔祭の禮、忌服の制なども、大抵此の間に制定せり。是れ名教の由て立つ所の土地なり。併しながら上は高祖父にて切り上げ、下は玄孫にて切り捨てなば、其の區域餘りに狹隘にして、聊か殺風景なる心持なきにしもあらず。されば聖人は、祖父よりあなたに、祖先と云ふ名を立て、子孫よりこなたに、裔孫と云ふ名を立てゝ。上は烝民の生ぜし時より、下は烝民の滅する時まで、一條の情想を伸べ及ぼして。優長なる社會を造りたるなどは、又別段の手際ぶりといふべし。若し夫れ天に天あり、天上の天に又天ありといふが如き事は、學問上の沙汰にして、名教のあづかる所にあらざるなり。

斯て人の情想は、其の對する所の物によりて、各々差等あるが故に。其の差等のまに〳〵、名教にも又分別を立てゝ教へ導く時は、その名分によりて、人の情想も、亦おのづから正しく堅固に成り立つものなり。謂はゆる父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありと云ふが如きもの、即ち是れなり。凡そ此般の事は、前に演べし如く、周公孔子の聖賢と雖も、一人二人の手を以て、私に之を作爲せずして數千歳の年所を歴、數聖人の手を經過したる間に、成就したる者なれば、實に人間世界の完全なる道德なること、申すまでも無し。然るを近來の學者輩が、之に向ひて彼此れ異議を容れんとするは、蟷螂が斧を持て、立車に向ふの譬にやあらん。

又近年は、文明と云ふ事、大に世界に流行する故、序てに文明の話をなさん。茲に一人の人あり、父に對しては、子となり。兄に對しては、弟となり。朋友に對しては、朋友となり。陛下に對し奉りては臣民となり。一人の身を以て、種々の分際に應用すること、誠に自由自在なり。此方既に斯の如く、幾多の面を被るにあらざれども、應用自在なる以上は、彼方も猶その如く、親は此方に對して、子の想を爲し。兄は弟の想をなし。朋友は朋友の想をなし。陛下は臣民の想をなし給ふならん。一切の事、此の想の發する通りに應用する時は、斯の如く圓滑自在にして、事々みな道に叶ふなり。若し此の想を破り斥け、理窟に由りて、事を處置せんとする時は、左に支へ右に閊へて、事々みな道に違ふべし。言を換へて云はゞ、分際を明らかにするとせざるとなり。此の分際を明らかにするを文明と云ひ。